

---

# スクールエンゲージ

算裏 友城

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スクールエンゲージ

### 【Nコード】

N7206I

### 【作者名】

算裏 友城

### 【あらすじ】

日常・・・いつもの通りの日々が、また今日もやって来る。私は、そんな日々が好きでもなく嫌いでもなかったが、少し物足りなくもあつた。

手を伸ばせば何でも手に入る様になつたし、大きな争い事がある訳でもないこの世界で、私は求めていたのかもしれないのだ。

冒険。いつか本で読んだ、ドキドキワクワクする、そんな冒険を・

•  
•  
○

## プロローグ

### プロローグ

これは、今から数万年前のお話です。

誰もが、記憶の中に留めていないお話です。

それは魔族と呼ばれる者達がこの地上に現れ、ヒトの文明という文明を破壊し尽くしていた頃のお話です。

魔族・・・それは、ヒトがそう名付けたそれは、ヒトより大きく、ヒトより速く、ヒトより硬く、ヒトより生きる。

そんな連中が、ヒトにとっての悪事を働いていました。

無論ヒトは全力で抵抗しましたが、自慢の兵器はもちろんの事何もかもが役に立たず、ついには人々が絶望を始めたその時でした。

神の力を授かった少年と少女が現れたのです。

二人が手を取り合ったその時でした。光が、七色の光が溢れだし、世界をまるごと包み込んだのです。

その力は、“エンゲージ”と呼ばれるものでした。

やがて人々が目を覚ましてみれば、仇なす者、すなわち魔族は全て、この地上のどこからも消えていたのです。

さて、人々は探しました。ヒトの文明を、命を救った勇者を……。

すると、そこには少年だけ、立っていました。

少女はどこにも居なかったのです。

人々は尋ねました。

“もう一人は何処に？”

と。少年は答えました。

“世界はもう、大丈夫です。ヒトが魔族に生活を脅かされる事は、もうありません……。”

と。人々は首をかしげました。

が、この世界は間違いなく平和となっていました。

## プロローグ（後書き）

この物語は、原案“ぬーちゃん様”、キャラクター原案“プロ  
ス様”、文章“算裏 友城”でお届けします。

## 第一話 平穩を望んだ私

### 第一話 平穩を望んだ私

朝6時30分、朝日がカーテンの隙間から滲み出た頃、目覚まし時計が鳴り響く。

「んん・・・ん。」

私は音声発生源に手を伸ばす。だが、手探りではなかなか見つけられず、しょうがなしに体を起こそうとした。

次の瞬間、天地が逆さまになり背中に激痛が襲う。手をつこうとした場所が、実は何もなく、バランスを崩しそのままベッドから墜落したのだ。

「いつ・・・た。」

痛みは皮肉にも、私にはっきりとした目覚めをもたらした。じんじん痛む背中を擦りながら、老婆の様な動きで部屋を出て・・・、

つと、眼鏡を忘れた。

人間、普段と異なる出来事が起これば、習慣に等しい物事すら忘れる時がある。

よし、オツケー。ようやく部屋を出た私は一階目指し階段を慎重に下った。



台所、汚れ一つない清潔感溢れるスペースだ。

丸い小さなテーブルに、ラップのかかった皿が一枚と、皿の下に紙切れが挟まっている。

私は、紙切れを手に取ると書いてある文字を頭の中で読んだ。

“美空へ

今日も早出だから、朝ご飯をラップしておきます。早めに登校しなさいよ。あ、あと、今夜もちょっと遅くなるからね。戸締まりはちゃんとしなさいね。

母より 父さんより”

私は思わず、クスツと笑ってしまう。だって、明らかに“父さんより”の部分、あわてて書いたのか、最初何て読むのか分からなかったから。

私の家族構成は、父、母、私の三人家族。

母はまだ若いながら、とある大企業の重役であり、朝は早く、夜は遅くなる。

父は、母の会社の傘下の、中小企業の一般社員であり、今日から単身、一ヶ月程度の出張で朝早く出たのだ。

私の家族は、仲良く家族とよく言われる。

父と母は、どんなに忙しくとも、私の事を第一に考えてくれた。

お母さんは、重役会議を抜け出し、授業参観に駆け付け、その少し後には、仕事をこっそり抜け出したお父さんが、作業着のまま現れた。

鉢合わせした二人は、気まずい様な、でも、どこか嬉しそうな、そんな感じだった。

だから、今、一人で食事しているのは、身体の一部が失われた様な気分になる。

私は、手早く食事を済ませると、スムーズに、使った食器を洗い、しっかりと拭いて、食器棚へと戻す。

さてと、次は着替えだ。

ハンガーに掛けてある、アイロンのかかった、カッターシャツと、制服、スカートを手に取り、するすると着替える。

あっ、歯磨き忘れてた。洗面所へ。

鏡をフツ、と見た私は、おデコに、にきびが出来ているのを確認。

まあ、いいや。やはりさっと歯磨きをし、カバンを持って、えーっと、いま7時10分だから・・・余裕で間に合う。

それじゃ、行ってきま……。

あああーっ、お弁当ー!!

・

結局、私が家を出たのが7時30分。

いつもこうだ。余裕を持ってたつもりだったのに。

さて、いまは通学途中。学校までは、私の足でも15分とかからない。

毎日通る、近所の住宅街を抜ければ、半分は来たということだ。

「おーい、美空あー!」

美空?私のことだ。

私は振り返って、声の主を……見つけた。ひらひらと、手を振っているあの子は、同じクラスの、千秋ちあき 華夏かな。

「おはよう華夏。」 彼女は、とっても明るい太陽の様な娘だ。

「おい、オレを無視すんなよー!!」

そう言い、華夏の後ろから顔を出した、少しちっこい彼は、千秋ちあき

勇。

華夏の弟で、私の事がどうも気に入らないみたいだけど。

「こらっ、ゴメンねー美空、コイツ、いくつになってもガキだから……。」

「何だと……背だつて1センチ伸びたし、少しずつ大人に……。」

「ハイハイ分かった、そういうところがガキって言うの!!」

八八……朝から元気だね、この姉弟……。私、低血気味だから、うらやましい。

つてな感じで、賑やかに登校していると、前方に、見慣れた人物を二人、見つけた。

「あつ、紅葉に忍、おっはよー!!」

華夏が早速、あいさつをした。私も、聞こえにくかったかもしれないが、あいさつをした。

すると、その男女は振り返り、口々にあいさつを返してきた。

「……おはよ。」

「おっ、華夏っちに美空じゃないか。おはよう。」

この二人は紅葉と忍。

はつきり言つて、忍は初対面からわりと馴れ馴れしかった人物で、初めはちよつと敬遠気味だったんだけど・・・あんな事情があるって分かったから・・・それに、実はとってもいい人だった。

紅葉は、北極の氷山みたいな・・・かな？ 不思議な子で、いつも一人だった・・・いや、忍と二人だったか。でも、正直、この子を悪く言う人は絶対に許さない。

紅葉はいい人、これ、断言する。

口数は確かに少ないけれど、困っている人は見過ごせないタイプなんだろう。私も以前、助けてもらってから仲良くなったんだし。

しかし、この二人、本当に仲がいい。手までつないじゃってる。

軽薄で誰とでも仲良くなってる忍だけれど、やっぱりパートナーは紅葉ってカンジで、まあ、正直ちよつと羨ましい。

私含めての五人は、家の場所のせいもあつて、登下校時はほとんど一緒になる。

この五人で、私達は他愛もない話をしたりして微笑むのだ。

最近の私にとって、この時間はとても大切な刻に思える。

「あれ？ 美空、あれ誰かな？」

急に華夏が会話を止め、私に質問をしてきた。

私は、もうすでに近くに見える校門の方へと、視線を移す。

すると、確かに見慣れない男の子。白と銀の間の、金属つばさを連想させる髪の色が、やけに気になった。

ととつ、彼はこちらに気付いたのか、氷のような視線で一瞬、私を見た。

目が、合った。

(あれ？ ……何？)

“ ……何だ？”

これは？ 彼の？ 私の中に？ 彼？ 時間にして一瞬、一秒。

彼はすぐ目を逸らして、校門の中へと消えて行った。

「ウチの生徒じゃないよね。制服違うし。」

「転校生か何かじゃね？」

私は、仲間の声が聞こえなくなっていた。

さっき、あの男の子と目が合った時、確かに彼の中に私が居る様に感じた。

そして私の中に、同様に彼が居た。

口に出す言葉よりも鮮明に、彼の思いや想像して感じている事が、断片的にだが伝わったのだ。

あの時、彼は私しか見ていなかったのだろう、“地味そうな奴・・・”とか、そう思っていた。確実に。

同時に私も、“ちょっと目元が怖い感じの子だな”と思っていた訳で、それが彼に伝わったのかもしれない。

「美空、どうかした？」

「えっ・・・紅葉、いやっ、何でも。」

すぐ横には、いつの間にか紅葉が居た。

私は、平静を何とか保っているつもりで、言葉を絞りだす。

「オーイ、二人共、遅いぞー。」

「そうだ、遅いぞー!!」

「そうだそうだ、遅いぞー!!」

「はいはい、今行くー。」

その場はどうか不自然に思われなくて済んだと、私は先行く三人に少々感謝しつつ、駆け足で彼らの元へと急いだ。

たった今、朝のミーティングの始まりを告げるチャイムが鳴り響く。

先生が教室に入って来て、それまで騒然としていた室内は一気に沈静化。

皆、先生の言葉を待っているのだ。

それは、今朝、ある噂が皆の耳に入ってしまったからである。



転校生が来るといふ噂を。

「知ってる子もいると思うけど、今日、このクラスに転校生が入ります。さっ、入って。」

クラスの皆の視線が、教室の入口に注がれる。

少し間を置いて入室して来たのは、金属つばさを連想させる髪の毛を持つ男の子だった。

周囲が少なからず沸き立ったけど、一番、あつ、と言いたかったのは私ではないだろうか。

間違いなく、校門の前で見た人物だったのだから。

「じゃあ、自己紹介して。」

「……青林あおばやし 黒斗くろとです、よろしくお願いします。」

「……終わり？ はい、じゃあ皆さん仲良くしてあげて下さいね。で、……えーと席は……春野さんの後ろ、空いてるわね。青林君、あそこに座ってくれるかしら。」

春野？ …… 春野 美空っ、つまり私！？

「……………」

彼は無言で歩いて来る。

一歩一歩、足音の聞こえる度、私の心臓は鼓動を早めてゆく。

何で私、こんなに気にしてんの？

……あれこれ考えていたら、いつの間にか彼は席に着いていた。

やばい……後ろから明らかに視線を感じる。

こうなると、授業どころではない。何か恐くて振り返れない。

と、いう訳で私は休憩時間、トイレ等に逃れていた。

ようやく、昼食時間。私は、お弁当を携え屋上へとダッシュした。

あそこは私の……私達の場所である。

いつも五人でお昼ご飯を食べているのだ。

はぁ・・・はぁ・・・、運動音痴の私が、ここまでダツシユで来たのだから、当然、メチャクチャ疲れた。息が、あがってる。

さて扉を開いて、ようやく辿り着い・・・・・・・・・・あれ？  
誰も居くない？

おゝい華夏あ、紅葉、忍々、勇々？

友人を、心の声で探していたその時、誰かの足音がする。

階段を、昇って来ている足音だ。

(まさか・・・。)

今の私には、嫌な予感しかしなかった。そして予感は現実となる。

扉を開いてゆっくり出て来たのは、氷の視線の持ち主、青林 黒斗であった。

(やっぱりいいー!!)

最悪だ。もしかしたらコイツ、私の後追い掛けて来たんじゃない。。。

いやいや、待てよ。ひよっとして前の学校で彼も屋上でご飯を食べる派の人間だったのかもしれないじゃない。

とりあえず、さりげなくここを脱出しよう。うん、それがいい。

「あれえー？　．．．どこ行っただら。」

私はわざと、声に出して友人をさがすフリをし、そのままさりげなく扉へと近づいて、“いないじゃん．．．。”と、ボソッと言い、ここを脱．．．。

「おい．．．。」

嫌な予感はあるもの．．．私はそれを思い知りつつその場に固まってしまった。

まるで彼の、次の言葉を待つ様に。

「何か落としたぞ．．．。」

私は、彼の方を極力向かずに振り返ると、確かに弁当を包んでいたハンカチが落ちていた。

あわてて、それを拾いに行く私。

あわてて・・・それがいけなかったんだろうな、私は転けてしまったのだ。

しかも彼の位置から見れば、スカートの中、丸見えだあ！！

(ギヤアアアアア、私のバカ、バカ、バカアアアアア！！！)

自責の念。だが、現状で一番気になったのが、彼の反応だ。

一体どんな反応を取られるだろう・・・。

「ああ〜、もう泣きたい。

脳内において、転校生はどんどん凶悪な生き物になっていく。

「ただど・・・。

「相変わらずそっかしい奴だな・・・お前は。」

「はい？・・・思ったよりは普通の反応・・・って、相変わらず

！？」

私は恐らく初めて、彼の目を自分から見た。

私の顔には、分かりやすく疑問と疑惑が張りついていたのだろう、

彼はやれやれといった感じで疑問に答えた。

「俺だ。・・・小学校の時、一緒に帰ってたろ。俺の事、黒くんってお前は呼んでた。・・・妖怪ズッコケ女だったよな、お前のあだ名。」

そう、私のドジは今に始まった事ではない。

小学校の頃、まず通学路でバタバタ転けた。

そこから残酷な小学生達は、私にズッコケ女の名を与えたのだ。しばらくして妖怪という分類まで・・・。

・・・それはとりあえず置いて、

「ええええー！ー！ー！黒くん！！？」

あの時の、私の・・・実は初恋の相手が今、成長して目の前に居た。

「俺は一目で分かったが？」

だいぶキャラ・・・いや感じが変わったなあ。

でも、見れば見る程思い出して来た、あの日々。

帰り道、雨が降って来て、彼は濡れながら帰る私に傘を・・・ぶん投げてくれた。

体育の時、一人余った私とわざわざコンビ組んでくれて・・・地獄のスパルタを喰らった。

でも、その頃の私からすれば、カッコいいし、私の事を気にかけてくれる人だった。

いつしかその、ある種の憧れが、初恋へと変わっていったのだ。

「・・・・・・・・」

「やつ・・・・・・・・」

（おわあああー!）

私は思わず、頭の中と口で、悲鳴をあげた。

いつの間にか、黒くんの顔が目の前にあったからだ。

しかも私の顔を、じっ、と覗き込んでいたのだから。

私は反射的に距離を取って、

「なっ・・・ななっ・・・何・・・。」

やっぱり、咄嗟だから何言っていないか分かんない・・・。

今、多分顔赤いし・・・再び、彼から顔を隠す私。

当然、そんな私達だから、上空の黒い点の様なものには気付きもしなかった。



## 第二話 闘争を選んだ私

### 第二話 闘争を選んだ私

「!？」

その時、紅葉・・・その名の示す通り、紅い髪色をした彼女は、感じ取った。

来る、あいつらが。

あの異様な力が、と。

「忍っ!！」

彼女の傍らで昼メシを頬張っていた、忍と呼ばれた少年も気付いたらしい。

いつもの軽薄な様子はなく、ああ、とだけ答え、その場に弁当を置くと互いに、一瞬だけ目を合わせる。

頷き合い、即座に駆け出した。

その、異様が近づく場所、屋上へと。

「久々だな・・・やれるか？ 紅葉。」

「奴らは私達が倒す。」

「よっしゃ、上等だな。」

・

「ちよっ・・・ちよっと黒くん？」

やはり彼は、容赦のない視線で、お構いなしに私を見まわっている。

何を見てるの？ 一体。

「さっ・・・さっさっさっから何を・・・。」

すると黒くんは、下を向いたままこつこつ言った。

「うん、悪くない。」

だから何が？ 主語お願いします。とか、まああれこれ考えていると、彼は何と、大胆にも私の手を取って来たのだ。

あまりに急に次の動作に移るもんだから、一瞬、私と黒くんの手に走った静電気の様な痛みも、ほとんど気にならなかつた。

「……っあ……。」

「……美空、聞いてくれ。これからするのは大事な話だ。」

っえ……ヴええええええ！?????

いつ……いきなり二人きりで、こんな状況で、大事な話って……  
ついに……ついにきたのか？

歳が歳ならば、確かに一度はお付き合いしててもいい位だけど、  
彼氏は高校になってからって決めて………だっ、第一、互  
いに何年も離れていたんだし、そんなイキナリ屋上で二人で大事な  
話ってそんな……。

「俺とお前は、どうやら相性が良いらしい……。」

うんうん……って、何で残念そうなの!?

相性が良いならそれでいいんじゃない……そもそも、まだ再会して一時間と経ってないのに相性いいって……。

「あつ……あの……なに言ってるのかなって……」

と、勢いよく、扉が開いた。勢いよく。それこそ、黒くんと距離を取る時間等一切ない位。

誰!?! こんな絶妙のタイミングに。ヤバいこれ、絶対これ、ほんつとにカンベンして欲しいタイミングに扉を開きやがったのはあ!?!

私と、入って来た二人（よく見ると紅葉と忍）は数秒間、硬直した。

……数秒後。

「いや……えっと……違うから……」

「何が?」

間を置かず忍の返し。

「そういっんじゃないから……。」

「どっいっのが？」

「えっと、だから……。」

そこまできて、紅葉が忍のツッコミを遮り言った。

「二人共、今すぐにここから移動して……。」

と。私自身そうしたい気分だったから、異論なくその場を去ろうとした、その時だった。

上空の黒点、バレーボール程の黒い点が二メートル四方程度に広がり、その中から異形の生物が出現し、屋上、私達の背後に着地したのは。

私は、着地の音と振動で振り返った。

恐怖から……だろうか、その生物から目が放せなくなる。

まるで、本に出てくる西洋風の悪魔……全身薄黒の肌、人のそれより遅しく、がっちりとした四肢、包丁の刃くらいありそうな長

い三本爪は、相手を切り刻む為のものだろう。

赤い灯の灯った眼球がこちらを睨みつけ、一度獣の……いや、私の知ってるどの獣よりも凶暴さを秘めた咆哮を發した。

とにかく、あれはこの世の生き物ではないと、一瞬で分かったのだ。

「なっ……なな、何？」

足が竦み、その場にぺたんと膝をついてしまった。震えている自分の身体を、自身の意志ではどうにも出来ない。

「忍……。」

「ああ、仕方ねえ。」

一方、二人は落ち着いた様子で頷き合つと、互いに手を取り、こう言い放った。

“エンゲージー！！”

瞬間、凄まじい光が視界を覆い、私は目を反射的につぶってしまったから、何が起こっているのか、二人は何をしているのかが分からなかった。

そして目を開けた時、紅葉の手には刀・・・彼女の身体と同等の長さはある、日本刀が握られていた。

「・・・貴様ら魔族は、私達が殲滅する。」

そう彼女が宣言したのと同じ時、魔族と呼ばれた怪物が動いた。

一瞬で紅葉に接近、爪を振るう。

「・・・私はここだが？」

いつ・・・今何が起こったの？ 何で、これまでそこに居た紅葉があつちに？ そして何で・・・。

遅れて怪物の腕が、バダツ、と落下する。血が・・・黒色の血液らしい液体が、脈動に合わせて噴き出していた。

“~~~~~!!”

恐らくは悲痛の叫びをあげ、苦しんでいるのだろう。

しかし怪物はなおも抵抗の意志を見せ、再度の攻撃態勢をとった時、今度は忍が動く。

「ハイ、それまでよってなあ!!」

彼は正面から、魔族の腹部に拳を叩き込む。

よく見ると地味だが、彼の手には詳しくは分からないけど、あの・  
・殴るやつがついていた。

私はもう、何が何だか分からなかった。

怖い・・・怖い。心臓の鼓動がもの凄く速く、血を脳へと身体中へと送っていく。

(黒くん?)

彼は私のすぐ横に居て、初めから私と同じものを見ている筈である。

だが、驚きもしてないし騒ぎもしない。ただじっと、二人と化物の様子を見ている。



でも不思議なもので、そんな彼の横顔を見ると、だんだんと  
平静を取り戻せている気がした。

でも、心臓はどんどんと速度を上げた。

「もう終わりか？」

そう、声がした。

敵は身体中、至るところ傷だらけになり、赤かった瞳は黒ずんで  
しまっている。

二人は、あつという間に怪物を、魔族を追い詰めて見せたのだ。

「トドメだろ？ 俺が……。」

「いや、私の役目だ。」

忍を押し退け、紅葉が前へ。刀を構え直し、刃先を相手に向け、  
駆け出した。

魔族は、最後の悪あがきで爪を、自身の武器である刃を紅葉目が  
け発射した。

しかし今更そんなもの、彼女に通用などしない。

飛来する凶器を、身体をひねり回避、そのまま斬撃。

魔族は頭頂部から真つ二つとなり、噴き出す体液が彼女の刀、刀身を真つ黒に染め上げた。

「くっ……黒……くん？」

その声で、紅葉は勝利より我に帰り、気付いた。

先程の爪の射線上、すなわち紅葉の後ろには美空が居たのだ。

（しまった！！）

彼女が慌て振り返ると、そこには想像以上の事態が起きていた。

黒斗が、美空の前に立つ。恐らく攻撃をかばったのだろう。

だが、問題はそこではなかった。

黒斗の……彼の腕は、肩口から制服を破り、彼本人の胴体を上回る程のサイズとなっていた。

そして、その肥大化した腕に食い込む爪を伝い流れていたのは、黒い血だった。

.

正直、速過ぎて目がついていかなかったけど、最後に見えたのは化物が発射した爪だった。

やはり私は目をつぶった。

それしか、出来なかったから。

でも、何事もない。

そして聞こえた、黒くんの苦痛の声。

まさか・・・私はようやく瞳を開く。

すると目に飛び込んできたのは、この学校のじゃない制服の後ろ姿、そして身体より大きいかもしれない腕をした、彼だった。

「く・・・黒・・・くん？」

私は、それ以上の言葉を言えなかった。

だってこんな状況、一体誰が想像出来ただろう。

いろんな事が一度に起こり過ぎた。

だけど、一つだけ、頭の回転の鈍い私でも分かった事がある。黒くんが、彼が怪我をしたという事。

「黒くん!!」

「美空ア、そいつから離れる!!」

血が、出た。

おつきな腕に爪が沢山刺さってる。出来る事は……出来る事、出来る事、出来る事は……。

「そいつの手エよく見ろ、そいつは化物だ。」

「魔族だ……。」

「カツコいいじゃない!!」

「!？」

「黒くんはきつと悪くない魔族・・・だって、私の代わりにこんなになって・・・手だつてこんなに・・・でも、カッコいい・・・カッコいい魔族なのよ!!」

「み、美空、てつきり恐がるかと・・・思ったんだけどな。」

「何だよ・・・カツ・・・カッコいい・・・じゃない・・・。」

やばっ・・・涙出て来た。

(やれやれ・・・美空コメツ・・・変わらないな・・・。)

「・・・美空、そいつは・・・分かってくれ・・・。」

美空が居るから、攻撃は出来ない。それに、何だか攻撃するのは違う様な気がしてきた。

悪くない化物・・・。

そう考えた事はなかった。いつだって魔族は、自分達を脅かす存在だったのだ。

自分や紅葉の大切なものを奪っていった奴らも、幾度となく戦って来た連中も全て、心まで怪物であったのだ。

だけど・・・コイツは、転校生は、美空を助けた。

本当にコイツは、もしかしたら・・・。

「考え事してても何にもならない。」

「紅葉・・・。」

「忍が出来ないなら、私がやる。」

そう言うなり、紅葉は再度刀を構える。さっきとは反対方向に刃先を向けてだ。

「斬・・・。」

「チッ。」

私は、突然の衝撃を受け、身体が弾かれた様に吹き飛んだ。

黒くんに突飛ばされたのだ。

それと同時に、金属同士がぶつかる様な音がする。

慌て頭を起こすと、紅葉が刀を振り下ろし、黒くんはそれを大きな腕で受け止めていた。

空いた左手で、人間のもののままの左手で紅葉にパンチ。

命中はしたものの、手応えはほとんど無い。

彼女は衝撃に逆らわず、後方へ飛び、着地。そこにすかさず黒斗の右腕、巨大な拳が、

だが、それは空を切る。速度が違い過ぎる。

振り下ろされた拳は、屋上の床にヒビ割れを生じさせた。

正面、今度は忍が、既に攻撃のモーションに入っていた。

「悪いな。」

顔面……から打点をずらし、肩にインパクト。

骨を破砕する感触、そして音はいつ聞いても気分が悪い。

黒斗の、ヒトのものでない叫びが、耳を駆ける。

「今!!！」

瞬間、時間差で紅葉の斬撃が、黒斗の、人間の左手を肘下数センチからバツサリ切断した。

切断面からは、赤い血液がとめどなく流れ出している。

「やめてええええー!!！」

気付かない内に、彼女は走り出していた。

眼前の出来事は、今の美空にとって到底許容出来ないものだ。

偶然だろう。美空には戦いの流れが分かっていたいなかった。だが、



それでも彼女は、黒斗と二人の間に割って入る事をした。

「!!」

現時点で、身体能力が平常時の数倍、数十倍にまで向上している紅葉や忍にとつて、美空の行為を見た上で攻撃を中止するのは造作ない事だろう。

現に忍は拳を止めた。

だが紅葉は、突き出した刃を止めなかった。

刃先は、美空の腹を貫通し、後ろの黒斗にまた一撃を見舞う。

私はまた、目を閉じた。

でも、痛みは一切ない。

恐る恐る目を開くと、お腹には傷跡一つない。

そうだ、黒くん。気を取り戻して振り返ると、既に決着はついてしまっていた。

真っ二つだ。

制服、上着とズボン、上半身と下半身、その境がキレイに分かれた。

崩れ落ちる下半身・・・一瞬遅れて上半身が、顔からコンクリート造りの床面に落下した。

赤い、黒い、血。

混ざり合って・・・。

「黒・・・くん・・・黒くうううん————!!!」

鼓動がずっと高まりつつあった私の心が、ある種の何かを越えた感じがした。

突如、私を責める。

欲求が、溢れ出す。

特定の欲求が、行動が、私を責め立てる。

“手を・・・手を取る・・・。”

離れた、ヒトの手では意味がない。

まだ、繋がっている異形の手。

大きな手。

固そうな手。

私を守ってズタズタの、痛々しい手。

でも………

優しい手。キレイな手。

まだ、暖かい手に触れた。

まだ、脈打つ手に触れた。

その感触、私は二度と忘れないだろう。

「みつ……そら？」

「……黒くん!……」

温かい光が、周りを包む。

とても眩しい、圧倒的な光量だったけど、私はもう、目をつぶらなかつた。

光の向こうに、確かに、黒くんが見える。

傷だらけ、悲しかった。

でも、何とかなると思った。

黒くんを、助けるんだ！！

“ やつと私の出番か。”

「！！！」

誰かが、私の中に入ってきた気がした。

・

「この光・・・エンゲージかあ！？」

忍が思わず言った。

「そんな・・・バカな！！ ヒトと魔族でエンゲージなど・・・」

だが、この光は紛れもなく・・・。

しかも、力強く、気高く、ひたすら美しい光・・・だった。

急に光は黒ずむ。

美しい等とは程遠い、邪悪さが見て取れる、悪意の渦巻くところにまで汚れた。

やがて、光か闇であるのか判別つかぬそれは、引いてゆく。

現象は治まった。

頭を垂れる美空。その手には、野太い両手剣。

切断するといつよりは、叩きつけ破壊する向きの、おおよそ美空には似付かわしいエモノである。

静かに彼女は頭を持ち上げ、息をすうーっと吸い込む。

(来る……)

紅葉は確信していた。こちらに対し、美空は攻撃の意志を持っている。

相手を慎重に、油断なく睨む。

今度相手は、はぁーっと息を吐く。

刹那、美空が動いた。

重量剣を軽々と振りかぶり、紅葉へ。

(あれ程の剣、振り下ろせば隙が出来る。)

右へ、刃すれすれに回避、がら空きの相手側面へ反撃を……。

しかし、隙だらけの相手はいない。刀は完全に空を切る。

カウンターを喰らったのは紅葉の側であった。

背中側、後方から斬撃が。

なんとか回避したものの、二撃、三撃と簡単に繰り出されると、ついに自身の刀をガードに使いざるを得ない。

二撃目で刀身が欠け、三撃目で手が衝撃に耐えられず、武器が手を離れ、床面に転がった。

「動かないでちょうだいね。」

首元に、剣の刃先があった。

そして今、初めて美空の表情が見えた。

笑ってる!?

風に翻った長い黒髪、制服も顔も間違いなく美空のものだ。

だが、その表情と、目に見えない部分は明らかに彼女ではない誰かであった。

しかし、紅葉にとって一番ショックであったのは美空の変貌ではない、敗北だった。

秒殺に近い形だから尚更だ。

「紅葉いー!」

忍が身構える。

「はいストップ。動くと言タのパートナーの首飛ぶよ？マジで。」

事も無げに彼女は言う。しかも、どこことなく面白可笑しおもしろおかそうに。

「くっ……そ。」

「そうそう、OKOK……ってあら？」

僅か一瞬、美空が目を切ったその間に、紅葉は刀を拾い、既に振る素振りを見せていた。

「あああああー！！！」

左、次は下。突き。

読み切られている！？ 間違いなく見られている！！ と、紅葉がそう感じているのも無理はない。

実際、彼女は常に刃の切っ先を見ていた。紅葉の全体像には目もくれずに切っ先のみを……。



「よっ、と……。」

見えない……。

重量大剣の太刀筋が、見えないなんて……。

金属音、それは紅葉の刀の刃先から三十センチ程だけが落下した音。

更に紅葉本人には、剣の柄を持って。

まるで吸い込まれる様に紅葉の腹に。

「ガッ……ハッ。」

悪いトコロに入ったのか、紅葉は膝を付き、両手まで床に付けた。

さぞ、彼女にとっては屈辱であろう。

「紅葉イ!!！」

「そんなにさあ、早死にしたい訳？」

今度は少し低めの声で、美空は言った。

当然ながら、こんな顔をする彼女は見た事がない。

紅葉は覚悟した。自分は殺されると。

だが、またもや紅葉の意に反し、美空は剣を消失させた。

そして駆ける。黒斗の方へ。

さっさと上半身、下半身を抱き抱え、屋上の隅、落下防止手摺りの上へと、彼女は立つ。

高さにして、マンションの五階分にも相当するのではないだろうか。

「フフ・・・黒斗にはまだまだ仕事があるからね。まだま〜だ生きてもらうのよ。」

誰へ、という訳ではなく美空は言う。

「じゃあ、バイバイ、さようなら、また会いましょう。」

美空は、空中へと足を踏み出した。当然、二人共重力の働く方向

へと落ちていく。

「み……美空あ!!」

忍が反射的に隅へと駆け寄り、下を見る。

二人は影も形も無い。頭では、二人は消え失せている事は予想していたが、いくら感付いていたとしても身体は反応してしまつた。

それから彼は、自分のパートナーを方を向き直る。

紅葉は膝を付いたまま、俯いていた。

折られた刀が、刃が光に変じ、やがて消え失せる。

それでも紅葉は、膝を付いたままだつた。

(なつ……何で!?)

華夏は、今まで見ていた事が夢でも、幻でもない現実であるといふ事を自覚した。

たまたま、屋上に遅れて着いた時、先客が居た。

それはきつと美空達だろうと思っていた。

そして結果的にそれは正解ではあった。

でも、屋上に足を踏み入れる事は出来なかった。

血が、流れていた。

倒れているのは、朝、校門の所で見た男子だ。

そして、美空が剣で、紅葉を攻撃していた。

すぐに紅葉は武器を落とし、膝を付いた。

そして美空が、男子を抱え屋上から飛び降りた。

これが夢ならどれだけ良かったか。

華夏はただ、扉の向こう側の惨劇を見ている事しか出来なかったのだ。

### 第三話 あつちと私

#### 第三話 あつちと私

日常・・・また、いつも通りの日々。

私はベッドに居て、眠っていた。

今は何時だろう？ 目覚まし時計のアラームが聞こえた覚えはないから、六時三十分よりは前だと思う。

顔に手を当てると、カチツと、何かに触れる。

そうか・・・外し忘れたんだな、メガネ。

でも、そのおかげですぐに気付けた事がある。

明らかにここは私の部屋じゃない。この布団、枕・・・もちろん違つ。

「・・・・・・・・・・？」

ようやく私は、けっこう深刻な事態だコレ……という事に気付けた。

私は、誰かヨソの人の家で眠っていたのだ。

何があつてこうなつてしまったのだろうか？ さっぱり分からない。

でも、一つだけ妙に残っているものがある。それを思い出すたび、顔は熱く、熱を帯びていった。

黒くんの事だ。寝る前の最後の記憶は、黒くんと屋上で再会して……いろいろ……話して……。

(じゃあ……まさかここ、黒くんの?)

改めて身を起こし室内を見渡すと、ベッドから手の届く位置に電気スタンド、そしてちよつとしたクローゼット、あと、机が一つ。まるで、ホテルの一室か何かだ。

窓へと向かい、閉めきられたカーテンを開くと、眼下には灯りがポツンポツンと所々に見えるだけで、辺りは真っ暗だった。

「……夜？」

私はますます不安になった。つまり昼以降、授業やら何やらサボ

ったという事に・・・。

「ヤッバ!!」

つい口に出し、部屋の入口扉に向かったその時だった。

突然、扉が開き女の人が一人、入って来たのは。

「あらっ、起きてたのね。」

それは今まで同級生、先生、親とかぐらいしか見ていなかった私にとって、凄く衝撃的だった。

す・・・すごい・・・いろいろ・・・。

ものすごい、アレだ、出るトコ出てる。

すごい・・・キレイな人・・・すごい・・・出すとこ出してる服・・・。

私、すごいばっか言ってる。こんな人見た事ない。あれだ、セクシーだ。

女の私から見ても、セクシーだ。

・・・女としての自信が、地の底まで落ちるなあ・・・。

「あ、そろそろご飯だから呼びに来たのよ。大丈夫、安心して、貴女に危害を加えようとかそんなの無いから。本当よ?」

「えっ・・・? あの・・・何の事を・・・。」

「だって貴女、人間でしょう? 私、魔族なのよ?」

・・・魔族?

ああっ!! 角が頭にい!!

コウモリみたいな羽根が背中につ・・・お尻に尻尾があ!!

無秩序におつきな胸や、しっかりくびれたボディラインばかりに目が行ってて気付かなかった・・・。

「もしかして分かんなかったの?」

「いつ・・・いえ、そんな・・・ハハ・・・ハ・・・。」



「まっ、いいわ、よろしくね美空。私はリム・サーキュリス、リムでいいわよ。」

「あっ……よっ、よろしくお願いします。」

何で私の名前を？ ってのは聞かないでおいたほうが……。

「あ、貴女の事は黒斗君に聞いたから。」

あ……丁度いい返答、感謝します。

「どういたしまして。」

え……？

「さっっ、早く来て。ご飯だから。」

そう言うと彼女は部屋を出て、手招き。

まあ、呼ばれた以上いかなばなるめえ……リムさんは階段を下ントンと下っていった。

私は同様に一段一段、転倒しない様、気を付けて下って行く。何故なら、変に急だったし、手摺りがない。

しかしさつき廊下に出たとき思った事がある。やけに扉が多いのだ。ぱつと見、数十はある。

やがて下の階に辿り着くとまた、沢山の扉。この統一した並び、どこかで見た気がする。

先の曲がり角を曲がると、リムさんがさらに手招きを。

その先、正面に見える大きな扉には、何故か漢字で“食堂”、下には何らかの文字で多分、食堂と書いてあるんじゃないかなと思う。

私は中に恐る恐る入ると、やっと気付いた事が一つ。

この建物の照明、全部火だ。ゆらゆら影が揺れるから、階段も降りにくかった。

あれ？ でも確か、私の居た部屋には電気スタンドが……。

と、その時、悪い視界の先に、何かが断続的に動くのを見つけた。

よおく目を凝らすと、それはよく知った人物の顔だった。

「くつ、黒くん!？」

そう、妙な色のスープか何かを口に運んでいるのは、間違いなく黒くんだった。

彼はこちらの姿を認めると、口の中のものを飲み込んで、周りを拭いてから、

「美空か。」

とだけ言った。

「えっと……ん？」

気付かなければ良かったって事、あるのよね。

黒くんは上半身に服を着ていなくて、体に、そして腕に何重にも包帯が巻かれていた。

すごく……痛そうだった。

「ちよっと派手に転んだだけだ。気にするな。」

彼はそう言った。

転んだぐらいじゃそんなにならないよ……と思いながらも、深い所までは聞かずに聞いた。

男がそう言う時には、何らかの事情があると……私なりに空気を讀んだからだ。

それにしてもヒドイ……。

「あらあ、アナタが美空ちゃん？」

その声の主……カウンターの奥から、またセクシーが出た。

リムさんよりすごい。

とにかく、出すとこ出して、見せるとこ見せて、隠すところは最低限隠している。

この人見たら、自信が奈落の底だよ……。

「私はリースよ、リース。リムのお姉さん。よろしくねえ。」

「あつ、よろしくお願ひします。」

姉妹かあ……納得。

やっぱりリースさんの方にも角、尻尾に羽根があった。

でも、何で私はこんな訳の分かんない状況になっているんだろう。全く思い当たるところがない。

学校に行ったら、黒くんが転校して来て……でも最初は全然誰か分かんなくて……気付いたら屋上で二人きりになって……そこから覚えてない。

また転んで気絶でもしてたのだろうか？

もしかしたら……というかほぼ間違いなく、黒くんの怪我が関係ある様な気がして来た。

やっぱり聞いてみよう。私がかしたのかもしれないし……。

「美空ちゃん、ご飯……ああつ、ちゃんと人間専用のやつだから大丈夫よお、早く食べちゃって。」

とリースさんは言った。

そうだった……私は目の前の背もたれのない木造のイスに腰掛け、テーブル上の料理に注目した。

・・・あれ？ これカレーじゃない？

蔵密には、ぼい、だけど。

ぼいと考えたのは、下にライスらしいものがあり、その上に、ルーだろーと思うのだけど、パサパサした黄色いのが乗っている。

粉が少し湿った感じの黄色いのが。

まあ、私はとにかくお腹が空いていたので、すぐさま料理の放つ香りに理性を奪われ、スプーンを瞬時に手に取ると、一気に口に運んだ。

・・・ちざつと・・・とろつと・・・ピリツとして・・・。

おいしいiiiiiiii!!

カレーだコレ、絶対カレーだ!!

「どお？ おいしい？」

「うおひいひいでぶ!!」

思わず、口に含んだまましゃべってしまった。

この味、一生忘れられないものになりそうだ。香りが何の抵抗もなく素直に鼻から入り身体中を駆け舌はただその一口だけで肥えてしまった様に感じた程だ……ちょっと興奮し過ぎたけど、それぐらい美味しい。

あっ、という間に私は食べ終えた。手が、次々に口へと反射運動よろしく放り込んでいた様で、口内は満杯だ。

リスかハムスターかというくらいに頬を膨らませた私は、とても幸せそうな顔をしていたらしく、リースさんとリムさんが、フッフ、と笑う。

ところで黒くんといえば表情一つ崩さず、右手のみでひたすら、時々悪戦苦闘しながらチビチビ食べていた。

そんな彼の様子が気になりだした頃、リースさんが言う。

「すごいわねえ……空腹は最高のスパイスって言うらしいけど、私の料理をここまで幸福そうに食べたの、美空ちゃんが初めてよ。」

「二日振りだし、無理ないわよ姉さん。」

その言葉、大いに疑問だった。

はて、二日とか聞こえた様な気がしたが・・・まさかとは思いつけど念の為・・・。

「あの・・・私、どれくらい寝てました？」

と、リムさんに聞いてみた。すると彼女は、

「二日前からさっきまでよ。」

と、すぐに答えてくれたってええええええー、って事は私、二日以上も・・・。

「ってかあ、美空ちゃんって変わってるわよねえ。」

「えっ？ どこがでしょうか？」

「だあってえ、魔族の私ら見てもビビんないしい、パニック起こさないしい。」

「それは・・・あなた方がヒトの形に近いからです。」



黒斗が一瞬、目を美空に向ける。そして、彼女に気付かれる前に、料理へと目を戻した。

その僅かな動き、美空を除く二人は気付いていた。

「だって、魔族ってフレーズからしますと、もっと凶悪そうで、目をギラギラさせて、ヒトなんかも一口で食べてしまう様な……つまり典型的な怪物って奴を想像していましたが、お二人は角や羽根や尻尾があるくらいで特に私達とは違わないし、むしろ私達よりキレイだし……それに今、ヒトの私にこうしてご飯まで食べさせてくれています。今の私にとって、貴女達は……異国の……そう、外国人……よその国のヒトみたいなものです！」

本気でそう言っている……リムは、それを感じ取った。

「ふん……なるほどねえ。でもね美空ちゃん、アナタの想像通りの魔族はもちろんいるわよお。」

そう言つとリースさんは、カーテンをシャツ、と開けた。

外を見渡せる透明の……ガラス？窓。そして彼女は私を手招きした。

私は一度自分を指差し、相手が頷くのを確認してからそつちに歩いて行った。

「見て見なさあゝい。」

リースさんは、外を見る様、私に言った。今一つ、彼女の真意が分からないかったけど、言われるがまんま外を見た。

すると、一つ、暗がりの中で何かが蠢いた。

(?・・・!)

それは、確かに魔族と呼ぶに相応しい存在だった。

全身が・・・固そうな緑色の鱗？ だろっかに覆われ、でこぼこして、手らしい部分には尖った槍の様になっている。

胴体と一体になっている顔には一つだけ、巨大な目が輝き・・・  
口、だろっかは、丸く、上下左右にノコギリの刃みたいなたががある様だ。

この位置から見えるのだから、余程の大きさであろう。

「ス・・・スゴいですね、何か。」

「でしょ？」

(でも・・・恐がってる訳じゃないさそう。むしろ・・・喜んでない？ 目をキラキラ輝かせちゃってるし・・・。)

「・・・やっぱり変わってるわ・・・アナタ・・・。」

「それが美空の良い所ですよ、リースさん。」

黒くんは、ご飯を食べ終えた様で、席を立つと同時に言った。

「・・・まあ、下手に騒ぎ出すよりはマシよね。」

・・・私って、そんな変かな？

いろんな生き物が世界中に沢山居るんだから、今更・・・なんて事を考えていたら、次の疑問が芽を出した。

「そういえば、ここどこです？」

「少なくとも、貴女の住んだニホンってところじゃないわ。」

「それは分かりました。窓の外とか、いろいろ南米チックですし・  
・というか、私、どうやってここに？」

「俺が連れて来たんだ、美空。」

「……………黒くんが？」

「そうだ。そしてここは、地球ですらない。二つに別れた世界の  
片割れ……………ここは魔族のみの住む、お前から見れば異世界という  
事になる。」

そんなストレートな。第一、信じがたい話だろうが！！ と姉妹  
は思った。

「そつか……………そつかあ、やっぱり異世界なんだ、道理で…………  
そつかあ！！！」

“二人共、これが美空です。”

“……………。”

「ねえ、だったら私達はどっやってこっちの世界に？」

“……………”

「美空……それは今、語るべき事ではない。分かって欲しい。」

“オイ!!!”

「分かったよ、黒くんがそう言うなら今は聞かない。」

“お二方、これが美空の真骨頂です。”

ボソツと黒斗は言った。

黒くんは立ち上がり、皿を重ね、片付けを始める。右手だけで力  
チャカチャカやっているの、はた目には相当危なっかしく写る。

「あら、いいのに。私達がやるわよ。」

「いえ、泊めて頂いているので、このくらいは当然です。」

そう言い黒くんは、片手で皿を持ち、腹で支える様にして足早に食器を運搬して、食堂を出て行く際、一度私の方を振り返って、

「美空、もう夜だ。朝まで今日のところは休め。明日、いろいろ説明するから。」

と言うと、食堂を出て行った。

「あつ……。。」

タイミング逃しちゃった……。一番肝心なの聞いてなかつ……。。

「あら、本当。もうこんな時間。美空ちゃん、眠たい？ 眠たくないんだったら……。。」

「あつ、いえ……。ちょっと眠たくなっちゃったんで……。おやすみなさい。」

私はそう答えると、やはり足早に返却口と思われる所へ食器を置いて、食堂をあとに……。。

「美空ちゃん、自分の部屋覚えてる？」

「ええ、大丈夫ですリースさん。私、道を覚えるのだけは得意で、一度も迷子になった事ないんです。」

そう美空は言うのと、走って行った。一回、バァン、と何かが床にぶつかった音がしたが、すぐにそれは駆けてゆく。

「・・・姉さん、私・・・。」

「気にしないの。黒斗ちゃんの頼みなんだしねえ。」

リムは頭を垂れた。

リースはそんな彼女の頭を、ポンポン、と叩いた。まるで、子の失敗を許容し、慰める母の様に。

私は、部屋に戻るとベッドに一直線だった。

靴を脱ぎ捨て、ベッドに入ると、布団を頭から被ってダンゴムシ状態。

“・・・私、異世界に居る。”

ワクワクした、スリルを感じた。最初は・・・。

でも、次にそれと違う何かが、頭の中を染めて行く。

言い知れぬ何かが。

“・・・私は、異世界に居るんだ。”

自分に何度も言い聞かせる。私は、訳の分からないどこかに居るのだ、と。

今の状況は異常だ。でも、そうは全く感じていない自分がいる。

リースさんは私が変わってるって言った。確かに変わっているのかもしれない。変なのかもしれない。

しかし私は求めていた。

欲しいものがあれば手に入れたがる欲求の様に、ごく当然に私は、



今の状況を求めていたのだ。

それは変なんだろうか？

ヒトとして、自然に持っているものを、方向を変えて持っている私は、変なのだろうか？

“・・・私は・・・。”

出来れば、今すぐにも眠りたかった。寝息をすやすやとたてて。

でも、結局私が完全に眠ったのは、しばらく後の話だった。

・

夢の中だ。ここは、夢の中。

だって私は、こんなに大きな剣を軽々と片手で持てる筈がない。

それに、自分自身の顔を真つ正面から客観的に見る事は出来ないから、夢でしかあり得ない。

では、正面に居るのは私だろうか？ それは、自信を持ってそう  
だと言える。

メガネ・・・何の飾りつけもないただのメガネ。肩下まで伸びる

長い黒髪、学校の制服、母さんによく似ているって言われる顔、ちよっと最近気になって来た、おデコのニキビ。うん、私だ。

そして、正面の私の横には黒くんが居た。学校の制服、よその学校の制服のままだ。

・・・客観的に見ているのは、夢の外の私だろうか？ 現実の私だろうか？

夢の私は、右手で剣を持っている。私、左利きだけど、夢の私は右利きなのかな？ とか思っている。

やがて私と黒くんは手を取った。空いてる左手と黒くんの右手が、つながっている。

その時に、異変は起こった。

黒くんのつながれた右手が、巨大化してゆく。やがてそれは、茶色いフサフサの毛に覆われた、ゴツゴツした腕となった。

私は冷静だった。これは夢って分かっているから、何が起こっても不思議じゃないからだ。

それに、正面の私も、そんな事は気にしていない様だ。

“黒くんは、黒くんだもの。”

私は思った。

例えこれが現実でも、まあ、少しはビククリするかもしれないけど・・・気にはしない・・・様な気がする。

やがて光が満ちる。二人のつないだ手から、光が溢れ出しているから。

そんな光に包まれ、夢は途切れた。

短い、夢は終わった。

## 第四話 置いてきた私

### 第四話 置いてきた私

通学路・・・私は、弟の勇と二人きりで登校していた。ここ三日間もだ。

あの日、そう四日前のあの日、学校の屋上で見た事は、やはり現実であったとしか思えない。

友人と友人が戦っていたのだ。

そして血が流れていた。

だけど、この目で見た事がいくら現実であったとしても、現実には四人の人間が姿を消したという事実があったとしても、信じられない、信じたくない。

だってあの美空が、恐らくは争い事と対極にあると言っても過言でない彼女が、紅葉を攻撃し転校生を血だらけに・・・。

「姉ちゃん・・・。」

分からない・・・全く理由が分からない。あれ程仲良かった彼女  
らが・・・。

「姉ちゃん!」

私は、ようやく私を呼ぶ声に気付き、顔を上げてみれば、弟が、  
怒気を滲ませた表情で見上げている。

「なあ、姉ちゃん・・・あの三人が居なくなった理由、知ってん  
じゃねえのか？ 全然元気ねえよ。」

流石に、気付かれない方がおかしい。

ここ数日、元気の良いところが美德点の一つに挙げられる彼女が、  
それを完全に失い俯き気味となっている。

「言ってくれよ。絶対、何か知ってんだろ？」

「・・・ゴメン。」

私は、真実を語る事が出来なかった。何と説明したらいいのかが、  
分からなかったのだ。

やがて下校の時間となった。

私がつい二日前、あまりに不自然で不条理であると思った事がある。

美空を始めとして四人が行方不明となった翌日、連絡用のプリント類が配られた時、私は三枚程余計に貰った。

美空と紅葉、そして忍のものだ。

そして、届けた。

だが、私は分かっていた。明日の予定の書かれたプリント、今後の予定の書かれたプリントは恐らく、意味をなさないだろうということ。

ところが、その翌日。

プリントはなかった。貰えなかった。

席は、机は、椅子もなくなっていた。

三人・・・いや、転校生含めた四人の形跡は跡形もなくなってい

た。

それに、先生達も、他の生徒達も、まるで初めから四人などいな  
いという様な態度であった。

だって、美空と、紅葉と、忍という名前、知らないって皆が言う。

皆、口を揃えて言う。

だから私は、帰りに勇を先に行かせ、皆の家にと歩を進める事に  
した。

・・・とはいったものの、正直美空の家には行きたくない。

何故ならば三日前、届けものを携えて訪ねたあの日、両親の二人  
は家にいた。

だが、たった一日にも係わらず、二人は疲弊し切っていた様に見  
えた。

母親はスーツ姿のまま座り込んで視線を虚空に彷徨わせ、父親は  
フラリと死人の様な表情で歩き、プリントを受け取ると奥へと引っ  
込んで行った。

私は、二人を授業参観とか学校のイベントとかで何度も見かけた  
のだが、今、目の前の人物は、その時の人と同じ人であると説明を  
受けなければ分からない程、雰囲気が変わってしまっていたのだ。

おじさんやおばさんの力になれない自分を呪いながら、帰ってしまっただのだ。私は。

だからこそ、今日はまず紅葉と忍の住むアパートへ向かう。

メインストリートから細い路地道を歩き、三つ目の通りを左へ、すると百メートル先ぐらいに見えて来るアパート群。それが、紅葉と忍の住んでいるところである。

アパート群、とはいってもかつては七棟はあった古めかしいコンクリート造りの建物は、今は二棟しかなく、近い内に取り壊しの予定だという。

さて、彼女らは二号棟の202号室に住んでいる。

両親を早々に亡くした二人は、互いに引き取られた先で知り合ったそう、実は互いの親が中間に一人を挟んだ兄弟であつたらしい。

つまりは、三兄弟、長男、次男、長女として、長男夫婦の娘が紅葉、長女側の夫婦の息子が忍である。

そして引き取ったのが次男である訳だが、資金に関してのみの保護であり、二人の子供は安いボロアパートの一室に放り込まれたのだ。

法律とかに引っ掛かるであろう、同棲に近い状態で二人は暮らし



ているためか、誰も家には断じて呼ばなかったし、誰にも話さなかつたと思われる。

それでも私や美空はその事を知っていた。彼女らが話してくれたのだ。

友達だからと・・・。

さて、202号室の扉を軽くノックする。

返事はない。

今度は呼び鈴チャイムを鳴らす。

やはり返事はない。

前に、扉のところに挟んだプリントが、そのまま残されている。

それが何を意味するのか・・・分からぬ私ではない。

(・・・・・・・・・・)

やっぱり、あの時の屋上の出来事・・・関係ない訳ないよね・・・

見なきゃ良かった。

だがしかし、何を思ったかドアノブを少しひねり引っ張ると、扉が開いてしまった。

鍵がかかっていなかったのだ。益々、おかしい。

・・・私は、入ってしまったおうかと思った。

けど同時に、入ってしまう事に漠然とした、恐怖にも似た何かを感じていた。

(・・・紅葉、忍、美空・・・)

でも、何か手掛かりがあるかもしれない。

例え無駄であろうと、やってみるべきだと、今更ながらにそう思う。

扉を、開く。

玄関、靴は一足として無い。

ひやりとした空気が、肌を撫でてゆく。何年もヒトが住んでいな

い廃屋の様な空気だ。

短い、ごく短い廊下の先、その扉を開けたなら、そこはかつて私達が一度だけ一緒に勉強した事のあるスペースである筈である。

筈だったのに・・・。

## 第五話 彼女と私

### 第五話 彼女と私

夕日の差し込んだ殺風景な部屋は、だいたい色に照らされていた。

ここには、何もなかった。

物が無い、という訳ではない。

古びたテレビ、ちゃぶ台、押し入れ・・・あの頃と全く変わらずにそこにあるのだが、肝心なものはキレイさっぱりなくなっているのだ。

彼女らの・・・紅葉と忍の部屋の筈なのに、二人の持ち物が一切見当たらない・・・だれの形跡もないこざっぱりとしたスペースが有るだけ。

そんな状況に、私はますますどうしたらよいのかが分からなくなつた。

と、その時だ。

玄関の方で物音がしたのは……。

扉を開く音、続いて靴のじやり、という音。

恐らくは音をたてずに、精一杯努力しているであろうが、この部屋が静か過ぎた。

こんな時は普通、どうするのだろうか？ それも分からない。

もしも紅葉だったら、何て言おう。もしも知らないヒトだったら、何て言おう。見つかったら、何て言おう……。

顔は熱くなり、汗が頬を伝う。

私は必死に言い訳を考えた。

でも、何を言ったところで悪い方にしか転がらないだろうし、今更ながらいつそ隠れてやろうかとも思った。

でも、私の身体は自分の考えに反して、先に玄関の方を覗き込んでしまう。

何がそこに居るのか、確認する方が先になってしまったのだ。

まず、暗がりの中で目に入って来たのが、見覚えのある制服だった。

顔は見る事は出来ないものの、背は、私より低いみたい……つて、よくよく見てると……まさか……。

「勇!?!」

「うおわあああ!?!?」

扉を開き、つい、素っ頓狂な声を出してしまった私。

そう、コイツは紛れもなく私の弟、勇であったのだ。

「ビッ、ビビらせんなよ姉ちゃん!」

「いや、何でアンタがここに!?! 紅葉んち知らないんじゃない……」

「姉ちゃんの後尾けてたんだよ!! もしかしたらアイツらの居場所知ってんじゃないかねえかと思って……つっても姉ちゃんも知らねえみたいだな、その様子じゃあ。」

「……………」

「……なあ、本当に何も知らねえのかよ？ ハッキリ言っておかしいぜ学校の連中。忍達と仲良くしてた奴ら、心配どころか話題にすらしてないし……………」

ああ、やっぱり……………」

おかしいのは私じゃないんだと、ようやく今確信を持てた。

私一人だった……美空が、紅葉が、忍がいなくなったと思っていたのは。

怖かった……本当は、九十九パーセント正しいと思っていた事が、僅か一パーセントに覆えされ、否定されるのが……………」

でも、弟は言った。間違いなく言ってくれた……………」

私をただ一人、肯定してくれたのだ。

「勇……ここからは、マジの話だからね。嘘じゃない、本当の話だからね……………」

「なっ、何だよ急に……………」

話した……。

ひたすら、口がまわったのだ。

口数の多さを自負している私自身でも、驚くぐらいに話した。

屋上で見た、出来事。その一部始終を。

あの日の事をとにかく詳しくにだ……。

「……マジで言っただよな？」

「マジもマジ、嘘じゃないって言ったじゃん。まあ、私自身もちよつと自分の頭大丈夫？ とか思ってたけど。」

「……まあ、信じるけどよ。」

「本当に？」

「ああ。そんだけ必死に言ってるんだしよ……それに……姉ちゃんがアイツらでそんな悪趣味なジョークなんて言わないだろ。」



「うん、ありがと・・・勇。」

「ってか、だったら・・・。」

「そう、そうなのよ。後で先生に言っ来てもらったら、全部なくなってたのよ!? それに間違いなく美空は飛び降りた・・・この目で確かに見たのに!!!」

「・・・やっといつも通りだ、それでこそ姉ちゃんだ。・・・と  
ころで、これからどうすんだ? 姉貴的に。」

「うーん・・・とりあえず、外出よつか。誰かに見つかったら何  
て言うのよ。」

「・・・それもそーだな・・・。」

と、さしむきは部屋の外へと出ようと玄関戸に手を駆け、開いた  
時であった・・・。

外に、誰かが立っているのが分かったのだ。

「!!!」

「うおー!!」

最初こそ言い訳や状況説明が脳内を走り回ったが、すぐに分かる。

部屋の外に立っていたのは、少女であった。

少女である私から見ての少女なのだ、小学生の・・・それも低学年にしか見えない子供。

全身を漆黒一色の、ワンピースだろうか？ で包み、黒く大きな瞳はじいっと、こちらを向いている。

短めのピンクの髪にツインテールが、極めて印象的である。

「・・・貴方達、此処で何をして居るのです？」

感情が欠落しているかの様な、強弱も、アクセントもほぼない、そんな口調で少女は言った。

「・・・えっと・・・私はね、このお部屋のヒトのお友達なんだけど・・・心配になっちゃってつい、来ちゃったの・・・あなたは・・・この部屋のヒトとお知り合い？」

「・・・紅葉の？・・・そうですか、そういう事でしたか。」

少女は一人、納得のいった様にアゴに手を置いて、こくりと頷いた。

「紅葉って……知ってるのね？」

「ええ。私は知っていますよ、紅葉と忍……この二名の居場所をね。」

「本当！？ 教えてくれないかなあ？」

「……いいですよ……その代わりに、貴女と……その後ろの貴男、名を教えてください。そうしたなら、連れて行って差し上げます。……二人の所に……。」

「ちょっと待てよ姉ちゃん、こんなガキの言う事信じんのかよ？ 第一、お前は何だよ？ アイツらとはどんな関係だ？」

「コラ、勇、止めなさいって……。」

「私は、言葉……“コトノハ”と呼んで頂ければいいです。」

コトノハ？ この子の名前だろうか……。

「……私は華夏、こっちは勇よ。」

「オイ、姉……。」

「分かりました、カナにユウ……では、お二人共、部屋へ。」

そう言い、コトノハは再び紅葉の部屋へ皆を入室させた。

そして二人、がらんどうの部屋の中心に立ち、コトノハという少女の次の言葉を待つ。

彼女は一度、こほんと小さく咳払いをし、口を開く。

「それでは二人共、手を繋いでみて下さい。」

と。当然、勇は、

「なっ、いつ、いまさらそんなんが出来るかあ……！」

と、過剰に反応して見せた。

そういえば、昔はよく手を引いて一緒に登校してたっけな……。いつからだったかな、勇が一人で行く様になったのは。

「……………やって見ましょう、勇……………」

「なっ……………マジかよお!?!」

「うん、これでこの子が紅葉達の所に案内してくれるのなら。」

「……………チツ……………ウソだったらこのガキ、ブン殴るからな。」

そう言い、手を伸ばす私と勇。

「いつ、一度だけだぞこんなの……………」

手が、触れる。

パチツ、と静電気にでもやられた様な感触。

でも、特に気にならない。

一気に、私達は手を繋いだ。

「こっ……これでいいのかがキィ！！ んじゃ、とっとな……」

すぐに勇が、手を放そうとした、その時であった。

微かだが、光が……金色の光が、私達の繋がれている手を照らした。

「やはり……貴方達、素質ありと見える……では導きましよう、始まりの、そして終焉の、二つの世界へ。」

次第に、その光は強まってゆく。

差し込む夕日を掻き消し広がり続ける光は、やがて部屋全体を包み込む。

（……っくっ、ゆっ、勇、そこに居るの？）

繋がれた手、それすら見えない。感触だけだ。

その感触だけが、相手の存在を信じる事の出来る、たった一つの

ものである。

眩しさは、まだ強くなる。

自身の存在ですら、視覚では感じられなくなってゆく。

「転位。」

光は引いた、即座に引いた。

後には、華夏と勇、二人のカバンと靴、ただそれだけが残されていたのだ。。。

## 第六話 広場と私

### 第六話 広場と私

「美空・・・朝だ、起きろ。」

私はその声で目を覚ます。

見知らぬ天井、見知らぬベッド、見知った黒くん・・・それに窓から差し込む陽光が、異世界（いせかい）に来て初めての朝に私を迎えたものだった。

「ん・・・ああ、おはよ・・・黒くん・・・。」

極力・・・極力、寝顔を綺麗に見せようかと思っていた私の昨夜の誓いは、眠気の前に脆くも崩れ去る。

もういいよ・・・寝起きは皆、こんなだから・・・。

「美空、俺は用事があるから少し外出するが・・・お前は朝食を二人が用意しているから、先に食堂に行くといい。」



「・・・あ、ちょっと待って・・・あの、シャワー浴びてからじやダメかな？ 多分今の私、結構キツイと思うんだけど・・・。」

「そうか・・・好きにすればいいさ。」

「うん・・・ごめんね・・・。」

「？ 何故、謝る？」

「いや、少し私って勝手かなーなんて・・・。」

「・・・お前を巻き込んだのは俺だ。美空は好きにしていいいんだぞ。」

「・・・うん・・・。」

・  
・ 黒くんは私に背中を向けると、そのまま部屋を出て行くようにして

「美空、食堂の場所は覚えているか？」

と、尋ねて来た。黒くん、優しいなあ……。

「うん、大丈夫。私、一回行った事のある場所、完璧に覚えてるから。」

「そうか……。」

今度こそ黒くんは、部屋を出て行った。

こうしちゃいられない、早くシャワー浴びて外に出よつと。黒くん、なんか忙しそうだったし、私だけ楽しんでちゃいけないだろうから……。

えつと、タオルタオル……あつたあつた、洋風なクローゼットの中に掛かっている。

うん？……ああ、やっぱり電気スタンドなんてものは無いや……  
・見間違えだったんだろうな。

いよっし、さあシャワーシャワーつと。

制服脱いでたんで……いよっし、いよっし。

あらら、赤と青の見慣れた蛇口が……何にも変わらないんだ。

えーと、初めは水が・・・だね、少し待って・・・熱っ、熱っう。  
・・・青の蛇口を少し・・・よし、適温。

さて、いよいよ体に・・・当たったあ。

うはぁ・・・シャワーって・・・こんな気持ちいいものだったんだ・・・。

ちよっとぬるめの湯が体を打ち、頭を顔を打ち・・・。

これでシャンプーとか石鹸があればなあ・・・。

って、あるじゃん。

よし、これでしっかり洗ってっと。

・・・あれ？ 偶然ってすごい。

これ、私がいつも毎日使ってるお気に入りのシャンプーじゃない。

よしよし、あとは体をよく洗って・・・ああ、あんま時間かけちゃダメだった、手っ取り早く流して・・・。

と、ここで私は重大なミスに気付いてしまった。

あつあぁあ、着替えがねえエエエー！！！！！！

そうだった、替えの下着すらない。

うあああ……どっしょ……。

.

「いてて……んだよ」は……。

勇は、自身の制服を手でぱんぱん払いながら言った。

彼がそうばやくのも無理からぬ事だ、私もそう思いながら、口に出していないだけである。

ここは何だ……ろう……。

一言で言うとするならば、瓦礫の山、廃墟の海。

倒壊した数々の建物。あるものは横に真っ二つのキレイな切断面をさらし、またあるものは押し潰されたかの様に粉々、破片を辺りに撒き散らしている。

道路は全て碎け、捲り上がり、白色の見た事もない材質を見せていた。

所々には、一直線、三本に規則的に並んだえぐられた様な傷跡がある。

とにかく、世界の終わりが来て壊滅した都市の様であった。

瓦礫をかわし、あるいは踏み分け、私達は先頭を苦もなくするする歩く少女、コトノハの後をついてゆく。

これは夢か・・・いやそれは違う。ほつぺたつねり確認は済んでいる。

見た感じ、日本かな？とも思える。それっぽい高層ビルらしきものに、それっぽい店舗に住宅・・・。

「ねえコトノハ、ここってどこな訳？」

私は試しに尋ねてみた。今の私では、ちょっと理解も想像もおよびそうもないから。

「・・・少なくともニホンではありませんよ、あなた方の知る、ね。」

「何だと？　じゃあ外国とでもいうのかよここは!？」

「カナ、ユウ、今の貴方達に言っても理解は出来ません。だから黙って着いて来て下さい。忍、そして紅葉に逢いたいのでしょうか？」

「チィ、都合悪いとそれかよ……。」

歩いて、歩いて……。

それをどれだけしたぐらいだっただろうか、ふと、それまで口を開く事のほぼなかったコトノハが、自分から言う。

「見えましたよ、あれです。」

と。そして前方、比較的損傷の少ない建物を示した。

かつては恐らく、大型のショッピングモールとかであったのではなからうか、見上げ続けていれば首が痛くなるかという高さに、これだけ距離があっても視界の一杯に広がる幅。

ああ、よく見るとそこ、窓ガラスが健在だ。

それだけでも周囲の景色から浮いている。

「ようやくかよ……つてっだああ!!」

「勇!? ……プツ……アハハハハ、何こけてんのよ、だつさあー。」

「つせえよ!! クソ、何でこんな所に……? ……!!?」

勇も、私も言葉を失った。

何でこんな所に落ちているのだろう……。瓦礫から一部、顔を覗かせていたのは野太い、丸太の様な……。紛れもない生物の腕であつた。

でも、ヒトのものではあり得ない。

三本の、風化しかかった長爪、金属の如き黒色、そして長さは勇の身長程もある。

「うおお!? 何じゃこりゃああ!!」

「な……うつ、腕……かな?」

「うでええ!? どんな化物のだよこれはあ!!」

と、私達が言い騒いでいたその時だ、コトノハが突如振り返る。

ただ振り返っている訳でなく、目を見開き、驚愕ともとれる初めての表情を顔に張りつけていた。

「何故、此処まで……。」

私達もつられて振り返ってみれば、何かが瓦礫の上に、たんつ、と着地したのが見えた。

それは……生物であろう……二本足で立ち、二本の腕を持っている。

だが、黒色の鎧の様な金属質の身体、三メートル近くある背丈、長く太い丸太の如く腕と、切り裂く事に特化した出刃包丁にも似た爪、そして赤く爛々と輝く眼球……こんな生物、当然ながら見た事はない。

……そうか、さっきの腕はコイツと同族の……。

と、瞬間、消えた。

化物は視界から消え失せ、どんなインチキか気付けばもう、私や勇のそばで腕を振り上げていた。



「えっ……。」

瞬間、頭をもたげたのは何だったか……。

しかし爪は二人を捉えられない。接触音、金属と金属の衝突する様な音。

動きを止め、更に弾かれる巨体。

化物は飛んだ、吹き飛んだ。

瓦礫の山の中に転がる化物。

同時に、今度はこちら目がけ駆けてきていると思われる、複数の足音。

その足音の主は、少年である。

コトノハと同年代くらいの男の子が三体。倒れる異形へと駆けてゆく。

その手に何かを抱え……。

「アサルト……ライフル……。」

銃だ・・・彼らは銃を持っている。

それらを彼らは一斉に化物に向け・・・発砲音。

秒とせずには次の音。

黒色の雨が化物中心に降り注ぎ・・・すぐに化物は動かなくなつた。

私はその目の前の光景に戦慄してしまっていた。

化物の黒い・・・多分、血を浴びているにも関わらず、全く無關心な風の顔。いや、むしろ彼らは嬉しそうですらあった。

「アルフレッド、何故奴らの侵攻を此処まで許したのです!？」

アルフレッドというのは恐らく、今振り向いたコトノハと視線を合わせている、少年らの中でも一番背の低い者であろう。

ただ、その名から派生するイメージとは違い、荒々しく吠える様、彼は言った。

「だってママ・・・!」

「誰がママですか？」

「・・・コトノハ、コイツがトトロ口していたから!!」

と、彼は、今しがた少年らの元に辿り着いた・・・全身を黒い布で覆い、目だけしか外気にさらしていない・・・多分女性を示した。

「それをどうにか工夫するのも、パートナーである貴男方の役目では？」

「ぐっ・・・。」

「では、カナ、ユウ、少々お見苦しいものを見せてしまい申し訳ありません。では、行きましようか。」

コトノハは、何事もなかった様に、元通りの無表情で語り、歩き始める。

私達は、その言葉に従う以外の方法がなかった。

後ろ、背後で声があった。

少年らが女を、うづくまる女の人を蹴っていた、殴っていた。暴力を振るっていた。一方的な暴力を。

女は、悲鳴を、声を漏らさぬ様、必死に耐えていた。

私はまた、見ていられなくなって目を逸らした、背けた。

歯がゆかった・・・また、私は・・・。

ようやく、建物のその入口に辿り着く。

自動扉がシャッ、と音をたて開き、皆を招き入れる。

中身は、数々の物品、例えばパイプ椅子であったりソファアであったり、あるいはタンスに自動販売機・・・中央には止まったエスカレーター。

二階には更に多くの物が散らかっているように見える。

そして、私達が無数の目に、見られている気分になる。

今、倒れている商品棚の後ろで何かが動いた。

と、いうようにヒトの気配や痕跡はいくらでも見えるし聞こえるし感じられる。

だが、それらは決して姿をさらさず、言葉を吐かず、息さえも殺している。

獲物を狙う獣の如く。

「さて、着きましたよ。此処に紅葉、そして忍がいます。」

コトノハは、ついに言った。私達にとっての本命、本題をだ。

そう、その扉・・・スタッフルームと擦れた文字の見えるその扉の向こうに・・・二人は居るらしい。

私は、扉のノブに手を掛けた。

## 第七話 迷子な私

### 第七話 迷子な私

うう・・・結局、脱いだ服と下着、また着ちゃった・・・。

臭い・・・絶対、匂ってる・・・。

四日も同じ服着てんだもん・・・ぜってえ、くさい・・・。

で、今よじやく食堂に辿り着いて・・・。

「あらあ？ 美空ちゃん、おはよおー。」

双子の姉の方、リースさんだ。

やっぱり、あの大胆な格好をして、その上からエプロンを身に付けている。(一瞬、裸エプロンかと思って驚きかけたのは秘密だ。)

でも、リースさんも、妹のリムさんも昨日と同じ格好。・・・こ

の人達、服は替えないんだろうか。

「おはようございます。」

「おはよう、美空。ご飯、一応用意しといたけど・・・もう冷めちゃってるかも・・・。」

「いえ、全然オツケーですよ、ただかせていただきます。」

私はすぐにテーブルにつくと、目の前の食事、そのメニューを確認した。

えっと・・・あれ？ 割と普通・・・？

これ・・・茶碗に、ごはん？・・・みそ汁？・・・卵焼き！？

なんかシヨツクな様な・・・異世界まで来てるんだから、もっとグロテスクなモノや、独特の料理、期待してたのになあ・・・。

でも、でもだ、

「いただきます!」

あっ……でもやっぱり、めちゃくちゃおいしい。どんどん食べられる。

私、基本朝弱いから、いつもだったら食パンの一枚でも食べられないんだけど……やっぱり、リースさんってすごい!!

「フッフ……美空ちゃんてさあ、すごくおいしそうなお食べ方してくれるから、嬉しいわあ。」

「ふお、ふおうでふかあ?」

「本当よお? この世の幸福、全部受けてるみたいな。」

ふいーっ、すぐに食べ終わっちゃったな。

……ところで、服どうしよ……ん? ……ああ、黒くん!  
! 黒くんどこ行ったんだろ!?



「美空、アンタが今考えてる事当てよっか？ ……ズバリ、服と黒斗の事じゃない？」

「ええ！？ どうして分かったんです？」

「フフ…実はね私、ヒトの頭の中を見る事が…。」

ええええええええええ！！！？ 考えが読めるって事！？ ぎいやあああ  
ーーー、なら私の中学生思春期丸出し思考も読まれてたりとかし  
てたりして！？

そうになると本当に…。

「あつ、あのね美空、冗談なんだけど…。」

「えっ！？ あつ、ああ…冗談、ですか…そ、そうです  
よねアハハ。」

なあんだ、マジで焦った…そうだよね、私、服をチラチラ見  
てたのかもしれないし、黒くん探してキョロキョロしてたのもし  
れない…勘のいい人、ならぬ魔族なら気付きそうなものだ。

「でも、本当に黒斗ちゃんも働き者よねえ。」

「?・・・どういふ事です? リースさん。」

「あらあ、知らなかったの? 黒斗ちゃんはねえ、タダで泊めて貰うなんて悪いからとか言っていて、いろいろ手伝ってもらってるのよん。」

なあっ・・・くっ、黒くんがリースさん達の手伝いをして、泊めてもらう許可をもらっていたって事!? いやあああ、私、何だか最悪じゃない!!!

「っっ、っっしちゃいられない!!!」

「リースさん、わっ、私にも何か手伝えないでしょうか!?!」

「えっ!? なっ何、急に?」

「黒くんだけを働かせる訳にはいきません、私も、何かやりたいです!!!」

「そっ……そっ……んー……ならね、ちょっとお買い物、お願い出来るかしら?」

「ありがとうございます、では早速にでも!」

「ちょ……ちょっと落ち着いて美空。アンタ、この町の事何も知らないでしょう、今、説明したげるから待って。」

と、とりあえず深呼吸させられ、しっかりと説明を受ける私。

どうやら買い物って言うのは、ご飯の材料の事らしい。

なんたらジャガイモやら、どうたら玉ねぎだのと、野菜としか思えないものの買い出しだそうぞ。

あつ、あと詳細な地図を書いてもらった。

では、私は早速、

「行って参ります!」

と、駆け出し・・・。

「迷子にならないでよね。」

「大丈夫ですリムさん、私、今まで一回も迷子になった事ありませんから。」

気を取り直して、今度こそ駆け出した。

・

さあさあ、ようやく外だ。初めてのお使いだ。

異世界の風景を想像しては心踊らせながら、まだ見ぬ外へと駆け出した。

外は、思っていたより普通過ぎる街並みであった。

ぐねぐねと曲がりくねったり、トゲトゲが生える建物がある訳ではない・・・ふつーに屋根があって、煙突があって、四角くて・・・機能とかを追求していったら最終的にこの形に落ち着くのかな？

まあ、とにかくキレイに左右に立ち並ぶ建物、真ん中に道。

そうだな・・・テレビとかで見た事ある、ヨーロッパの方とかの商店街みたい。

道路はレンガ造りだと思っただけど、五色の、えっと茶色に、白に、黄色に、青に、赤色・・・と色分けされていて、それぞれがラウンドに配置されている。

ゴミ一つない、クリーンな道だった。

スキップしながら私は地図を見る。

えーっと、ここがリースさん達の・・・ん？・・・ええ！？  
宿泊施設だったんだ、リースさんち。

ま、まあそこからこの・・・メインストリートを五百メートル程  
真っ直ぐ進んで、その先の交差点を左に行って、すぐの所。

って事はあ、この先を・・・左と。

えー・・・この地図だったら、そろそろお店が見えて来る筈なん  
だけどなあ・・・。

・・・あれ？ 何だろう、そういえば魔族の方々、一人も見えてい  
ない様な気が・・・。

と、その時、私は気付いた。気付いてしまった。

白い、もやみみたいなものが私を・・・私の周りを包んでしまっている事に。

「えっ・・・。」

もや・・・とはいっても、いくら何でも濃過ぎる。

周りの風景はもとより、私の足元・・・道のレンガでさえ見る事が難しくなって・・・いや、今完全に見えなくなった。

どんどん濃くなってる。

ついに私は、まるで何も無い所で浮いているとさえ錯覚する様な状況に陥った。

・・・こんな時は・・・とりあえず私は、横向きに、カニ歩きの様にして歩く。

この辺りの建物は道沿いに真っ直ぐ並んでいる訳だから、手でも触れられたならそれを伝い戻ろうと思ったのだ。

しかし、いつまで、どれだけ歩いてても何も手に触れはしない。

おかしい……いくら何でもこんなおかしい。

私はたまたまらず、今来た道を戻り、駆け出す。

だが、よく考えてみれば、視界のきかない中で走るなど、どれほど危険極まりない行為か……見えはしなかったが何かにつまずいて、転倒してしまう。

直前で手をついたから、顔を打つのは避けられたけど、それでも少し、コツツ、と道が当たる。

ちょっと痛い。

でも、その痛みは私を少しだけ冷静にした。

（そうだ……ここは私の居た所じゃないんだ、こんな事が起こっても何の不思議もないじゃない。）

ゆっくりと身を起こし、考えた。この状況を打破する手段を。

今、私が座り込んでいる地面、いや道は赤、黄、青、茶、白の五色のレンガで色分けされて、それぞれがランダムに配置されている

筈だ。

私の記憶が正しければ、道の端から端までは、約・・・十メートルくらいだったかな？

あれだけ歩いてても建物に触れなかったけど、もしかしたら私は方向感覚がおかしくなっていて、ひょっとして違う道に入って広い場所に出たのでは？

そしてこのもや・・・もしも定期的に発生するものならば、こんな視界がゼロに近くなる中を歩こうとは思わない。

つまり、この街の魔族の方々がもやの事を知っていれば、外に出ないだろうから、一切彼らの姿を見ることが出来なかったのはこの為かもしれない。

・・・でも、もやの事知ってたんならリースさんやリムさんが、私や黒くんを外出させるとは思えないんだけどなあ・・・。

とか考えていたら、少しずつだけでもやが晴れてきたようで、私は、よしよしどうにか・・・と思っていた。

けど、少し視界がよくなってしまった事で気付いた。正面に動くものがあるという事に。



それはだんだんと、こちらに近づいて来た。

(・・・ヒト?)

私の見た、動くものは明らかなヒト型をしている。しかも背丈は私より少し低いくらい。

やがて、互いの顔が見える位置で相手は静止した。

私は、相手のその顔が、誰のものであるのか知っていた。

だから、つい声が出てしまったのだ。

「も・・・紅葉!？」

## 第八話 若い葉っぱと私 1

第八話 若い葉っぱと私

「もっ……紅葉!？」

そう、目の前にあったのは、紛れもない紅葉の顔であった。

いつも一緒に通学し、同じ学校で学び、友人であった紅葉。見間違い等ではない。

「どっしてココト？」

私の問いかけに、相手はにやっと笑い言う。

「紅葉ねえ……何度目かな、そう言われたの。」

と。そして頭を覆うフードを、取り去った。

同時に目に入った、緑色の髪の毛。

違う・・・紅葉じゃない、彼女の髪の毛は、薄い赤がかった色の筈である。

「フフ・・・残念でした、紅葉じゃなくて。奴が枯れかけの紅葉なら、私は生まれたての青い、葉・・・青葉。」

「青・・・葉・・・？」

よくよく見ると、人懐っこささえ表情から伺える。近づきたい雰囲気を持っていた紅葉とは、対極の様に感じられた。

そして、いつかどこかで会った様な・・・。

「アナタ、名前は？」

「あっ・・・わっ、私は美空・・・。」

それを聞いた彼女は、一層顔を緩ませ、

「アナタ、迷ったんでしょ？ このもやの中、迷子になったんでしょ？」

と言った。髪の毛と同じ、緑色の目が、そうなんだと断言している様だった。

「えっ……ええ、実は……。」

彼女の瞳を見ていると、吸い込まれそうになる。引っ張られる様な気がする。

「やっぱり。じゃあ私が連れてってあげる。……ついてきて。」

彼女が、手を差し出す。

私は、その手に対し、ある強い衝動が身体を駆ける。

以前、感じた事のある様な気がする、手を取らなきゃという衝動が。

私の手は自然と、青葉の手に向かう。

あと少しで手が触れ合う、という所であった。

「美空あ、そいつから離れる……！」

その声で私は衝動を脱出し、声のまま反射的に青葉から距離をとった。

そして直後、私の手を引く誰か。振り返ればその人物は黒くんであるという事が分かる。

「黒くん!？」

「遅いと思ったら、まさか青葉とは……。」

「えっ……?」

走らされながら振り返れば、もやのせいもあり、もう青葉は見えなくなっていた。

「せっかちねえ、黒斗……じゃ、後は任せたよアンタ達。」

一方の青葉も、そう言う。すると彼女の周りには、三つの影が揺らめく。

それらは魔族である。

以前、学校の屋上に出現したものと全く同じ形をした生物であった。

青葉の合図一つで、一斉に三体は行動を開始した。

・

華夏は、扉を軽くノックした。

ようやく知った顔に会える、そんな期待を抱いてだ。

すぐに内側からドタドタと音がして、間もなく扉は開く。

ひょこつと顔を覗かせたのは、見覚えのある少年のである。

「忍!！」

華夏は思わず声を出してしまった。眼に写ったのは紛れもなく忍だった。

彼は初め驚きの表情を見せたが、すぐに下を向き、弱々しく咳い

た。

「この二人を・・・選んじまったのかコトノハ・・・。」

「はい。素質ありと判断しましたので。しかも・・・貴方達と顔見知りとあれば話も早いと考えました。」

弱々しい忍、機械的な返答を繰り返すコトノハ。

「では忍、後は頼みましたよ。私は用事があるので、これにて失礼させて頂きます。」

彼女はそう言い残し、あっさりと私達と別れた。

困惑する私と勇を、忍は部屋の中に入る様促した。それと同時に、口元に立てた人差し指を持ってきて、しいー、と言った。

理由は入室後にすぐ分かった。

紅葉が居た。

ベッドに仰向けで眠っている様で、すうすうと定期的に寝息を漏らしている。

「すまないな・・・気が遣わせて・・・。で、コトノハから何も聞いてないみたいだな、その様子だと・・・。」

「うん・・・。」

「よし、だったら・・・そうだな・・・じゃあとりあえず、魔族と俺達についてからだな。」

私と勇は、そこから彼の言葉を一言一句聞き逃さないよう、口元に集中した。

「魔族は見たか？」

「・・・見るには見たけど、あいつら一体何なんだ？」

「信じられないかもしれないが、四万七千年前、ヒトと魔族は同じ世界に生きていた。」

「ちょっと待って、ヒトが初めてこの世界に誕生したのって確か、四万・・・えーっと・・・。」

「四万五千九百六十年前、という事にされている。問題は、この



約千年の間に起こった事だ。

四万七千年前、ヒトの文明は、今と同等かそれ以上のものだった、ところが平和なその時代に急に現れ、ヒトを苦しめ始めたのが魔族・  
・・らしい。」

「らしいって・・・そんなはっきりしてない話・・・。」

「確かにな・・・だが、実際に魔族を見たろ？ いなくなった筈の連中がまた、現れ始めたって話さ。」

「・・・ならば、千年の空白に何があったんだ？」

「・・・ヒトと魔族の戦争だ。そして、それを千年後に終わらせたのが“エンゲージ”という力だ。」

「エンゲージ？」

「そう、その力は世界を包み、全ての魔族を消去した・・・コトノハが言ってたんだがな。」

「・・・あんな小さい子の言つこと信じてるの？」

「「ちとら信じるしかない体験してるからな……。」

「……あのガキ、何者だよ……。」

「それは今はいいよ。それよりもエンゲージって力……この前屋上で使ってたやつ？」

その言葉が出た時、忍は少し困った様な顔をした。

「……見たのか？」

「うん……それで……美空はどうなったの？」

「……美空……か……。」

「美空は忍達と戦ってたよね……一体、美空は……。」

「美空は魔族側についた。」

「紅葉・・・起きたのか・・・。」

紅葉はベッドから上半身を起こし、言う。

「あの転校生、魔族だった・・・。美空は騙されているんだ。騙されて魔族側についた。敵になった。」

「紅葉、まだそう決まった訳じゃ・・・。」

「なら何故、美空はこちらに攻撃して来た？ あの二人はどこに行った？」

彼女の発する言葉からは確かな怒気が感じ取れた。

「・・・忍、訓練だ。今の私では美空に勝てない。」

彼女は立ち上がり、扉へと歩く。

「紅葉！！」

「・・・美空を助けるんだろ？ 今のままじゃダメだ。」

そうだけ言い残し、紅葉は外へと出ていった。

「・・・華夏っち、勇、ついでにエンゲージの説明もするから、着いてきてくれ。」

私達は頷き、忍の後に続いて部屋を出た。

## 第九話 若い葉っぱと私 2

第九話 若い葉っぱと私 2

もやが、少しずつだが晴れて来ている。

視界が回復しつつあった。

もう、足元のカラフルに色分けされた道が、見えて来ている。

黒くんに手を引かれ、私は走り続けていた。

「くっ、黒くん、何で私達走ってるの？」

呼吸をメチャ荒げて、私は言った。

「説明は後だ。今は走れ。」

でも、もう足が棒みたい。正直、休みたい。

私、長距離走とかスポーツ関係は、ビリからトップスリーレベル

だし……。

とそんな事を思っていると、背後から獣の叫び声にも似た、異形の声が聞こえる。

それは、私が体力の限界を突破させるのに、効果を発揮する。

「なつ、何！？ 今の声！！」

「恐らく、奴の兵隊だろうな。」

「えっ？」

「俺達を殺しに来る、敵だ。」

うっ、嘘、それってつまり……。

「魔族！？」

「そういう事だ。」

どれくらい走ったか、ようやく建物が見えて来た。

一見、木枠と藁で構成されている、粗末な造りである。

黒くんは、正面の扉を蹴破り、中へと入る。

勢い余り、建物奥に積み重なっていた牧草らしい山に突っ込んだ。

中はまるで、牛舎の様な雰囲気だ。

顔を起こした私は、

「黒くん、何で遠くに逃げないの？ こんな所じゃすぐに追い付かれ……。」

と、言いかける。どうやら私は不安そうな顔をしていたらしく、黒くんは少し表情を緩めてから、言う。

「いや、奴らは臭いと、俺達より遥かに良い目、そして驚異的な足の速さで追って来る。逃げ切れるものじゃない。」

「でも……。」

「勝算があるんだ。それは美空……。」

黒くんが言いかけたその時、ドオン、と凄まじい轟音と衝撃が小屋を襲った。

扉以外の場所から強引に突入しようとしているのだ。

「……長くは保たない……美空、俺を信じてくれないか？」

突然の黒くんの言葉であったが、私の答えは決まっている。

「うん。」

だ。黒くんも私がそう言つと分かっていたのだろつ、即座に、

「今すぐに俺の手を取って、“エンゲージ”と言ってくれ。それで勝てる。」

「うん。……うん？ ……えっ、エンゲージって……。」

た、確かそれって婚約とかそんな意味なかったっけ？ いや、確かそうだった。



何？ 愛の力で勝利とか・・・。

あつ、でも異世界なんだから、何かあるのかも・・・。

「美空っ、早く!!」

「!？ わっ、分かったわ、黒くん。」

既に、彼は右手をこちらに向けていた。

手と手が触れ合う。

同時に敵が三体、壁、天井、それぞれの場所を突き破り、一斉に二人に発達した爪を向ける。

このままならば、すぐに細切れとされてしまっただろう。

だが、私は意に介さず、

「エンゲージ!!」

と叫ぶ様に言った。

光が満ちる。

私はまた目を閉じてしまっていたが、激しく発つせられた光はまぶたを通してでもハッキリ分かる。

力が湧きあがる気さえした。

目を開く。

眩しくて視界はほとんどきかないけれど、手を伝って温かいものが流れ込んでくるのが分かった。

やがて光は一点に収束する。

魔族の兵隊らは、吹き飛ばされたのか、部屋の隅に倒れている。

私の眼前に集まった光が、形を成す。

それは、私の身の丈近い程大きい、金色の光放つ剣となった。

「これは・・・？」

「それはお前の武器だ。」

そう言って黒くんは、私に、その大剣を手取る様促した。

繋がれた手を放し、私は宙に浮くその剣を手にした。

瞬間、私の身体はガクンと前に倒れる。

肩が、外れそうになる。

剣先がガシヤツ、と音をたて、地面に叩きつけられた。

「ちよっ……これ重たい!!」

「なに？」

黒くんの顔に、驚きの色が張りついた。

だが、私がこんなゴツイ剣、持てないくらい分かりそうだが……

私は所詮、ただの女子中学生である訳だし……第一に力でもク  
ラスの女子中で最下位争いをしているくらい非力な私だから、無理  
な話だ。

「ど……どうしよう、黒くん……。」

きっと黒くんも、剣を手にした私が、何かもの凄い事になって、敵を瞬時に切り捨てるとか思ってたんじゃないだろうか……。

少なくとも、私はそう思ってしまったのだが。

「っ……大丈夫だ、俺に任せろ。」

黒くんはそう言うと、自身の手中にある武器を構える。

それは、刃渡り二十センチ程のナイフ状の武器であった。

多分、彼の方の武器……かな。

黒くんは、それを持ち替えると同時、身体を軽く沈め、地を蹴り、敵魔族の方向へと飛び出した。

「はっ……。」

美空が、疾駆する彼を目で捉え、“速い”と口に出すその前に黒斗は、今正に起き上がった魔族の一体に肉迫していた。

「速い……！」

そう言った時には、刃が敵魔族の首を飛ばしていた。

吹き出す黒色の血液。

一瞬の後に起こるであろう、首から上がゴトリと地に落ちるその前に、黒斗は次の行動に移っている。

左方の敵、未だ倒れたままの魔族に、これまた一瞬で接近。

弱点はヒトと同様、心臓である。

その部位に、短刀を突き立て、ぐうつ、とえぐり引き抜くと、やはり黒い血が規則的なリズムで吹き出し、辺りを濡らす。

その魔族は二度と、顔を起こす事はなかった。

続いて残った最後の一体に、彼は狙いを定め、流れる様に突っ込んで行く。

だが、相手も負けてはおらず、黒斗が短刀を振るうと同時、敵は後方に飛び退き、着地。

瞬間、地を蹴り爪を振るう。

黒斗は目を切る事なく、敵の行く先、行動を常に先読みしている。

爪による一撃を、ギリギリで回避。

だが、これは余裕を持った上での行動。

顔が、敵の爪に、腕に擦れる程のストレスで回避し、そこから最速の反撃を繰り出した。

長い爪が自慢の右腕が、感覚すらなく切断され、さらには懐にまで気付けば黒斗の侵入を許している。

人間ならば、何も出来ず葬られるところであるが、魔族の反射運動はヒトのそれより遙かに早い。

魔族は、もう一つの武器である牙を、つまり黒斗へと噛み付き攻撃を敢行したのだ。

「やはりな……。」

それは既に想定済みだったらしく、黒斗は自ら敵口内へと手を突っ込んだ。

肩口まで突っ込み、拳と短刀は後頭部を抜ける。

そして口を閉じる行動の起きる前に、手を引き抜く。

決まった。

この瞬間、黒斗は勝利を確信した。

敵魔族の身体が、ぐらりと倒れ始める。

だが、上半身が後方に四十五度程倒れた、その時である。

消え失せていた敵の眼光に、再び光が灯る。

「なっ……。」

これには黒斗も、思わず声を漏らしてしまったが、すぐに攻撃体勢に移行する。

とはいえ、反応が一瞬遅れてしまった為、敵のゴツゴツした左腕に捉えられる。

胸を掴まれ、持ち上げられる黒斗の身体。

頭を碎かれているにも係わらず、敵魔族は耳障りな声で吠えた。

最後の断末魔にも思えるそれは、まるで自身の居場所を示しているかの様だ。

今の状況、黒斗にとっては何の驚異でもなく、すぐにでもこの手

から脱出して、確実にトドメが刺せる。

だが、振りほどこうと身体に力を入れたその時だった。

側面、壁を何かが突き破り侵入、そして魔族と黒斗を巻き込み、美空の真横を通過したのは。

波動・・・エネルギー波だろうか。

美空は、凄まじい光と轟音と衝撃、そして破片からヒトの反射運動、目の保護の為に、真っ先に瞳を閉じた。

粉塵が巻き上がり、いくつもの、大小の破片が彼女の首筋や、頭の上の手の甲、足先を何度も何度も襲った。

しばらくこの状態が続き、やがて収まっていく。

私は、これまで以上に慎重に目を開く。

まだ視界は悪く、ハッキリとは見えない。メガネを制服の袖で軽く拭き、時を待った。

そして塵煙が晴れた時、最初に目に入ったのが、側面およそ三分



の一を強引に削ぎ落とされ、風通しのよくなった小屋だった。

先程まで、圧倒的な強さを誇っていた黒くんは、どこにも見えな  
い。

「あれ？ 黒……くん……？」

「ちよつと強過ぎたかなあ？ このB・O・Dじゃ。」

美空の耳に聞こえて来た声、それはついさっきこの耳で聞いた声。

そして削ぎ落ちた小屋の外に見える人物は、ついさっきこの目で  
見た顔。

私は、その者の名を叫んだ。

「青葉!？」

と。すると、彼女は嬉しそうに、

「ピンポーン、大正解。」

とだけ答えた。

## 第十話 若い葉っぱと私 3

第十話 若い葉っぱと私3

「黒くんは……黒くんはどうなったの!？」

美空は、目の前の存在に対し、問いかける様に言う。

「さあ？ 今ので消し飛んだんじゃない？」

眼前の少女……青葉は、最も絶望的な返答を行う。

「どうして……どうしてそんな事言うの？ どうして、こんな事したのよ!？」

「美空……アンタって、他人に聞いてばっかよね。でも、まあせっかくだし答えたげる。そうよ、私がやったの、アナタを追い詰める為に言ったの。」

「どうして？ どうしてよお！？」

「・・・いい加減、聞いてばっかは止めてくんない？ ウザイか

ら。」

と、青葉が言った時、左方で何かが粉塵を突き破り、彼女へ向け飛びかかって行く。

それは黒斗であった。

「おおおおオオオ！！」

「あら？ まだ生きてたの・・・しぶといわね。」

速度で勝負の武器である、黒斗の短刀。手数では劣る事はないだろう。

だが、青葉は素手であるにも係わらず、全ての攻撃を防ぎ切った。

そして簡単に、黒斗の両腕を掴み拘束すると、自身の胸部前方に光を収束させてゆく。

それは先程、今居る小屋の半分近くを削り取ったエネルギー波であり、この至近距離で受ければひとたまりもないだろう。

「ちゅ、どじするの？」

「くっ・・・そおオオオオ！！」

直後、黒斗の右手が肩口から数倍に膨れ上がる。

異形の手、それは正に魔族の腕。

それによって片腕の拘束を外し、姿勢を・・・。

間一髪、回避。

エネルギー波は一直線に、後方の壁を消し飛ばす。

「くっ・・・黒く・・・ん・・・その腕・・・。」

美空が、黒斗の変質した腕を目にする。

だが、口から出た言葉といえば・・・。

「カッ、カッコいい！！」

だった。

“……………”

沈黙……全くもつての静寂……。

「カッコいい？ フフ……そう、カッコいい……おもしろい  
事言うじゃない。」

「ツツ、みつ、美空っ、頼むからこんな時にだな……。」

「ご、ゴメン。」

「いいねえ美空、アンタ面白いよ、それでエンゲージがちゃんと  
使えりゃ文句ないのに。」

「エンゲージ？ さっきの……？」

「言ったでしょ、聞いてばっかじゃダメだってさあ……！」

瞬間、青葉が黒斗に肉迫する。

「チイツー！」

対し、巨大化した右腕を振り下ろし、迎撃する黒斗。

彼女は避けず、あえて受け止める。足元、露出した地面が瞬間的な応力によってひび割れた。

「よっ……いしょおー！」

彼の巨大化した腕、それを両の手にて掴み、引き。

黒斗は身体ごと青葉の側に引っ張られ、そして彼女の拳が彼の腹部を打つ。

黒斗は、あっという間にその場に崩れた。

「黒くんー！」

美空が叫ぶ。

彼女は気付いていなかったのだが、さっきまで目で追う事も出来

なかった攻防が、今や一撃一撃はつきりと見えていた。

見えて、いたのだ。

そして今、青葉は倒れ伏した黒斗の首を掴み持ち上げ、再び胸部にエネルギーを収束させている。

彼女は、わざと見え易く彼の最期を演出しようとしている。

見せしめだ。わざと、美空を追い詰めているのだ。

黒斗にはもう、避けるすべなどない。

「止めて、黒くんを……。」

「聞こえない、聞こえない。私、耳が遠くて。」

違う、言葉で届く訳はない。

やらなくては……そうだ、私がやらなくて誰がやる。

黒くんや青葉の言ったエンゲージって力、使えなくても、黒くんを……黒くんを……。





だが、まだまだ、剣はこの際捨てて・・・肩から青葉に突っ込む。

だけど、剣を手放した途端に青葉に力負けした。

ほんの少し、彼女が力を行使しただけで、私は弾かれた様に吹き飛び、重なる干し草に衝突した。

もう、青葉の胸部からは光は消え失せ、その顔には失意と絶望にも似た表情が張り付く。

「美空・・・もういい、もういいわ、ようやく来てくれたと思ったら・・・発動までこんなに時間がかかって、拳句は満足に発現していない。どんだけダメでグズなのよアンタ。」

青葉は、美空の剣を投げ捨てると、吐き捨てる様に語りだす。

「なっ・・・。」

「エンゲージを自分から手放した。アンタは、あれがないと何一つ出来はしない、弱虫、役立たず。戦う事も意味もエンゲージも、何も知らないただの小娘。だから、そんな事が出来る、そんな下らない選択が出来る！！」

青葉は、右手を突き出すと、今度は手のひらに光を集める。

「やがてそれは形を成す。」

剣、大剣・・・そう、それは美空のものと全く同様の形をした剣であつた。

彼女は、それを手に取り、軽く一振り。

剣の速度が凄まじい為だろう、僅かな風が美空の髪を撫でる。

「やめ・・・ろ・・・青葉・・・。」

息も絶え絶えに黒斗が言う。だがそれは、彼女の耳に届きもしない。ゆつくりと、美空目がけ歩を進め、やがて、間合いに入ると足を止める。

「もう止め、期待外れ、もうやめ、もうダメ、そう、クズが・・・私の期待にも答えられないお前は、私の汚点となる。ならば、汚点たりえなくするにはどうしたらいい？ 答えは、一つ・・・。」

青葉が、剣を振りかぶる。

「殺してしまえ!!！」

(殺してしまえ!!!)

と、その時、青葉の言葉に被って、私の中の誰かが叫び、私を追  
いやった。

外へ。

内の奥深くへ……。

「!!!」

その瞬間ばかりは、青葉や黒斗をもってしても、何が起きたのか  
理解出来なかった。

何故、どうして青葉が、どうして……倒れ伏しているのだ？

そう、青葉はうつ伏せに倒れていた、美空の足元に。

一体、何が……。

「分かった？ 今の。分かんなかったでしょう、青葉。」

今、言葉を発したのは・・・美空であった。

倒れる青葉を見下ろす、美空であったのだ。その表情には笑みが・  
・それは美空のものではなかった。

「フフ・・・そう、美空・・・ようやくのアンタかあ!!」

「あら、私を待ってたって訳？」

「その通り!!」

正面、青葉は跳ね起き、剣を振るう。

回避。

美空、駆け、剣取得。

振るう、ぶつかる、火花散らす、振るう振るう、振るう、ぶつか  
る、ぶつかる、ぶつかる。

「じっちよ。」

「いいや違うね。」

足元からの斬撃、下から上へ、前髪をかすめる。

突き、腹部をかすめる。

青葉は、飛び退き、間合いを確保、そして……。

「分かったわ美空、前言撤回、お前は成功かもしれない。いいわ、いいわよアナタ。」

「成功だ失敗だあ何様？ コレで消し飛びたい？」

美空の、胸部前部に収束する光。それは青葉が乱発してみせた技、  
“B・O・D”。

「まあ待ちなさい、今はまだ……あの刻まで、それまで生かしてあげる。」

「生かしてもらえちゃうんだ、らっきー。」



## 第十一話 泣かない私

### 第十一話 泣かない私

「ん・・・うん？」

空が見える。

青い空が見えた。

そして流れてゆく雲が見えた。

ひとつ、ふたつ・・・数える程しか雲はない。

丸い雲、でこぼこ雲、消えそうな雲・・・いつかおじいちゃんやおばあちゃんのウチに、遊びに行った時に見た空みたいだった。

ゆっくりと、身体を起こして周りを見渡してみた。

何も無いなあ・・・。

地平線の彼方まで、緑色の・・・あつ、青々とした草が芝生みたくいになつてて、ずううつと続いている。



他には、特に何も見えなかった。

「あれ？ 私、なんでこんな所に？」

どうして私は、こんな所に居るのだろう？

いくら考えをめぐらせてみても、全くもって分からない。

まるで、頭の中をいじられて、記憶を都合よく書き換えられたみたいだ。

とりあえずは立ち上がり、歩いてみる事にした。

足首より高く伸びる草々が、靴下の繊維を通り抜けて、足をくすぐってくる。

あぁっ、もう・・・地面が良く見えないし、もの凄く歩きづらい。

あれから、五分は歩いた時だったろうか、私は見つけてしまった。

それは最初、草原の遙か向こう側にゴマつぶ程しか見えなかったのだが、やがて高速度でこちらに向かって来た。

だんだんと、その何かは大きく見えていって……しまいには私の背より高くなった。

それとは、黒い球だった。

何て表現したらいいんだろ……輪郭のぼやけてる穴無しのボーリングの球、とかかな。

それが……えっ、えっ!? 私に向かって来て……えええ!?

私は咄嗟に飛び退いて、そのボーリングの球のタックルを回避した。

トロい私でも、かなりの遠くから、一直線に向かってくるものを、避けるくらいの事は出来たらしい。

その、何だかよく分からないものか通過した後には、草や地面がえぐり返され、キレイなラインが引かれてしまっているではないか。

「死ぬ死ぬ、当たったら絶対死ぬう!!」

衝撃波が、身体を襲った時の恐ろしさといったら……F1カーが真横を通り過ぎたみたいだった。

ビュン、とか音たててた、あんな丸いものが。

そんな球は、すぐにブレーキをかけて、そのまままた突っ込んでくる。

どっちが前で、どっちが後ろとかは無いらしい。

それはそうかもしれない、顔も何も無い、丸い球なんだから。

この、一撃もなんとか・・・本当にギリギリ避けた。

だけど、火事場の馬鹿力もこれでおしまい、もう避けれないと身体が、足が言っていた。

なんて体力がないんだろうか、私は。

あの球は狙いを定め、そして三度、こちらに突進して来る。

ダメだ・・・今度は正面から、真ん中にぶち当たってしまう。

あれは、硬いのだろうか？ 見た感じは金属みたいだけど。

そんなものが、あの速度。

粉々だ、想像されたのは最悪の結末。

私の身体はへしゃげて、粉々にされてしまっ。

こんな時程、私は声一つあげられず、両手で顔を覆っただけ、うずくまるだけ。

何の為の防御体勢だろう、全くもつての無意味な行動だ。

(・・・・・・・・・・・・・・・・?)

私は、待っていなかったけど、待っていた。

この身を衝撃が襲っのを。

だが、それはいつまで経っても、いつまで待とうと訪れなかった。

あの、風切る音でさえ聞こえてこない。

代わりていつてはアレだけど・・・ズシイン、と・・・ズウウウン、と、身体全体を震わせるサウンド。

とてつもなく重たい何かか地面に落下でもしたかの様な、凄まじい轟音と振動が私を襲っ。

「キヤツア、あ、あああ、あ、あー！」

悲鳴をあげながらも、私はどうにか目を開いた。

舞飛ぶ草、土くれ、小石に砂ぼこり。

中心に、爆心にあったのは、毛むくじやらの、巨大な銀色の柱。

いや、それは生き物の脚であった、前脚であった。

見上げた。

毛むくじやらの、四本脚の、銀色の毛の生き物……。

いつ、犬!?

いや、オオカミかな？

でも……それにしてもデカ過ぎる。

高さが、私の……えーっと……四倍近くある、大体五メートルくらいだ。

そして、そのワンちゃん？ は、前脚をもって、ボーリング球にも似たそれを、踏みつけていた。

逃れようと、必死に抵抗する、球。

だが、オオカミさん？ の脚は微動だにせず、どんどん球を押し潰し、そして・・・プチッ、となった。

・・・うーん・・・やっぱり、オオカミだろうな、犬っぽいけどもっと言つと柴犬っぽいけど。

全身を銀一色のふさふさした毛で覆われた、すっごく可愛い子。

大きさは小さければ、頭撫でたり、抱いたり出来るのに！！

尻尾をパタパタ振ってるだけで、結構な風が起こっちゃってるし。

でも、どうしてだろうか、私、敵か味方が分からないこの子、見た瞬間から安心していた。

「この子は私に危害を加えてこないと、何故か安心出来たのだ。」

私が、オオカミさん？ を見ていると、彼？ はゆっくりと身体を伏せて来て、その場にフサァッ、と座り込んだ。

こっちを、じっと見て、がうつ、と一吠え。

ホンツト、犬だ。

かつ、可愛い過ぎる。

何だか、スフィンクスみたいなポーズ。

しばらく眺めていたい、ほのぼのしていたい。

けど、彼？ はまた、がうつ、と吠えて、顔を自分の背中に向けて、くいくいつ、と二、三回動作。

うんうん、可愛い。分かってるよ、君は可愛い。

がうつ。

えっ、違うのかな？ 可愛さアピールタイムじゃない？

がっがっがっがっ。

ん？ えっと……？

ついに彼？ は前脚を器用に曲げて、背中をちょいちょい、っと指し示す。

「えっ？ うあ……えっと……せっ、背中に乗れっ事、かな？」

すると彼は、フンッ、と鼻を鳴らし、一回頷いた。

言葉分かるの！？ この子？

すごいすごい、そして今の動作、メチャ可愛い！！

ケータイあったら、絶対撮ってる、待ち受けにする！！

がっっ！！

あ、ゴメンなさい、乗ります。



でわでわ、失礼します……。

うふうお!! ふああああああああああ!!

いいっ、すぐいい!!

この柔らかい、ふさふさした銀毛、いいっ、良過ぎる!!

ありとあらゆる、どんな絨毯や毛布よりいい!!

あったかくてふわっとふさふさと……うふうおおおお、スリ  
スリしたい!!

うつ伏せに乗って、全身に快楽を受けている美空に対し、彼は、  
少しピクピクツと、微かに震えながら立ち上がり、のそっ、と歩  
きだした。

ちょっと、いいかなあ……スリスリっ。

すると彼は、わふう!! と短く鳴いた後、がっつ!! と一回  
強く吠えた。

「ごめん、もうしません。」

ああ・・・それにしても、凄い、いい・・・。

すご・・・いい・・・。

美空は、眠った。

ふつかふかの最高級の布団の上で。

無理もなかるう、本人は気付いていなかった様だが、疲労困憊している筈だから。

彼？ オオカミさん？ ワンちゃん？ は、美空を起こさない様に、そつとそつと、草原を歩いて行った。

ふわりっ、と、銀毛が風に揺れた。



## 第十二話 犬と私

### 第十二話 犬と私

「ふあーあー・・・。」

私は、あくびをした。

誰の目もはばからない、乙女的にはどうかという、大きなあくびである。

私は、相変わらず最高級の毛布の中に居た。

そう、大きなワンちゃんの中居るのだ。

高さにして五メートル前後、頭から尻尾までは、私の他にも十人位は寝そべれるのではなからうかという長さ。

ふさふさの銀色毛。

ワンちゃん、なんて可愛らしく呼ぶのも難だけど・・・事実として愛くるしい顔をしているのだから仕方がない。

さて、私が彼の背中のふさふさを楽しんでいた時である。

彼は、がうつ、と一吠えし、身体をゆっくりと慎重に伏せて、今度はちょいちょい、と地面の方向、草の方を前脚で器用に指し示す。

うん、これは分かる。降りろって事だよな。

私は、名残惜しくもふさふさから離れ、彼の背中を降りた。

すると、彼は体躯をぐぐぐつ、と沈めていって、体重を後ろに移動・・・うわっ、またまた待ち受けにしたいポーズを！！

と思っていたら、後ろ脚を蹴り、彼は飛び出した。

加速。

草々を切り裂き、ずたずたにし、地面をえぐり散らして、駆けて行った。

うわぁ、速っ！！

背中に乗ってた時、あれで走られてたら一秒で振り落とされてた。

でも・・・どこ行ったんだろ。おトイレ？

あつ、そういえば私も……。

……。

今の内にいろいろと済ませとこ。抵抗あるけど。

・

十分、経過

あ、ものすごい地鳴りがする、地震みたいな。

帰って来のね。

一際大きな振動の後、彼は私の目の前に居た。

相変わらずの、圧倒的な存在感。

彼、は、口に何かをくわえている様だが……って、うあー！  
これ、青葉が従えてた魔族じゃない！？

うん、間違いない。で、問題はそれ……を……どうしたいの？

まさか、食べ・・・？

いや、そつ、そつよ、くわえているからといって先入観はよくないよ。

別に、お食事タイムって訳じゃあ・・・。

がっつ。

えええー！・・・望みが潰えた。

食べちゃってるよ、この子。

あれ？　なんか二等分（グロい！！）してるけれど、もしか・・・。

彼はすぐに食べ終えて、そして・・・。

残った魔族の身体を、前脚で器用に持ち上げて・・・。

喰えつてののか！？

嫌、イヤ、いやや、ホンマに嫌や、せめて原形留めてなかったら食べれてたかもしれないけれどっ!!

すると彼は、私の前に差出してたそれをよそに向けて、そして何と、口からブレスを吐く。

ブレス・・・それは空気とかじゃない、真っ赤な炎だ。

それをもって、あっという間に魔族をこんがり焼くと、一旦、草の上に置いてから長くて尖った爪で、一口大に切り裂いた。

うわっ、マジで親切、この子。

一口大・・・サイコロステーキみたいになってる。

これ、ここまでしてくれたんだし、食べないと失礼だよ。

うっ、うん、いけるよいける、わたしワイルド。

見た目、美味しそうに仕上がってるし、ワイルドバンザイ!!

元は何、なんて野暮だぜヤッホオオオオ!!



サイコロステーキ、元も今も肉、ステーキ。

いただきかせていただきとうございます!!

ワイルドな私は、手掴みでそれを口に含んだ。

・・・ごめんなさい、リアクションは苦手なの、散々期待させちゃったけど。

でも、肉にも責任はある。何なの、この美味しい訳でもなければ、極端に不味い訳でもない中途半端さは？ 微妙さは？

あえて言うなら、“美味しく・・・ないよ・・・。”だ。

パッサパサ、味しない。

いや、肉って何の味付けもせずに食べたらこんな味なの？

空腹スパイスも利きやしてないし。

今、私は求める、切実に・・・塩くれ塩オ!! 塩分!!

うああ、しかもこんな微妙なものが、結構あるし。

塩分だけじゃねえ、水も、水分も青々野菜もくれええええ!!

・・・ああ、おいしかったあ!!

おいしくなかったけどおいしそうなりアクションをとらなければ  
ならないこのじょうきょう!!

「あああ、おいしかったあなあ!!」

がふん。

・・・何、そのリアクション。

どうでもいいもの見たってリアクションじゃない。

あー、はいはい、正直に言います。

「イマイチだったけど・・・ありがとう。」

がうつ。

ああ、正直に言ってくれて感じたのね。

イマイチは本心、ありがとうも本心、ガチ本心だからね。

うん、元気が出て来たよ、ありがとう。

ところで話題は変わるけど、いつまで日が・・・じゃない、陽があるのだろうか？

白夜とかじゃないよね、と思っていると、途端に真っ暗になった。途端に、っていったけど、そんな急に真っ暗になった訳じゃないよ。

三十分程の間で、急速に陽が傾いて、沈んじやった訳で。

秋の陽はつるべ落とし、って言うしね、秋じゃないけど。

さて、暗くなってしまった。空には月はないし、星すらないよ？

本気で真っ暗、闇の中。

どうする？ 見えない見えない……。

がっつ。

あっ、そういやこの子、火のブレスがあつた。

周りが、明るく照らされる。

そして、いつの間にか伏せていた彼は、背中をちよいちよいと。

乗りますよ、いよっし。

ふかふか、再来。

やっぱり、彼は慎重に身体を持ち上げた。

そしてのそつ、と、貴重品でも背に乗せているかの様な歩き方をし、進む。

……そういえば私、ワンちゃんとまともな会話をしてないな。

仕方ないかも、相手は動物だし。

まあ、言葉は分かってくれてるみたいだけど。

いよし、会話を試みて、答えを予測してみよう。

問い一。

「ねえ、アナタはどうして私を助けてくれた上、こんなに世話をしてくれるの？」

がっ、がっがっがっ、がっ。

(えーっと……あの下向いて、吐き捨てる様な感じで、がっがっがっ、だから……“べっ、別に。そう見えたか？”とかだろうな。よし、次。)

問い二。

「ワンちゃん、名前はなんていうの？」

.....

(無言かぁ・・・“ワガハイは犬、名は無き故。”とかかな・・・  
著しいなあ、キャラ崩壊が。)

問い三。

「ねえ、どこに向かっているのかな？」

がふふう・・・。

(鼻息混じりに弱々しく?・・・風にでも聞いてくれ?とか  
.....)

よし、それじゃあラスト、ちょっと込み入った事を。

ファイナルクエスチョン。

「ねえ、オオカミさん、私の事、好き？」

!!!・・・がつ、がつがつがつ!!!

(んーっと、驚いた風で、その後何度か強く鳴いたから・・・  
“ なっ、何言ってるやがる、んな訳ねえだろうが!! ” とか・・・だ  
ったりして。素直じゃないんだから。 )

・・・はあ、止めよう。むなし過ぎる。

ドクタードリトルじゃあるまいし、会話なんて無理無理。

せめて、どこに向かっていて、私をどうするつもりなのかくらい  
は知りたかったんだけどなあ。

182

永遠に続くとも思える、二人の旅。一人と、一匹の旅。

だが、それも間もなく終わってしまう。

簡単に・・・。

・

「ほらっ、また乱れてる。ダメじゃないか、エンゲージ使用中は集中してないと!!」

「ごっ、ゴメン。」

今しがた声をあげたのは、華夏、そして忍である。

ここは、廃墟群と化したこの街の中で唯一、整備され、ゴミ一つ落ちていないグラウンドである。

そう、自分達の通っていた学校のグラウンドの様に、横に長い楕円形・・・というか、遊具がないのを除けば、まんまである。

そこで二人は、華夏と弟の勇は、忍と紅葉をコーチにエンゲージ武器の扱いにおける指導を受けていた。

「エンゲージってものは結局のところ、現れた武器の形の維持が基本なんだ。油断すると、ほらっ、すぐに・・・。」

と、膝を付いた華夏の手元、そこにある武器を示し、言った。

「ああっ、私の弓が!!」

弓、と彼女は自らの武器を表現しているが、正にその通り。



ただの弓にしか見えない、それ・・・竹っばい材質だし、弓弦もただの糸っばい。

とてもとても、この世の、よく見られる武器であり、とても威力はなさそう。

ともかく、一メートル弱の弓が、先端より金色の光の粒子となつて、ばらけ、消えていった。

「またやっちゃった・・・弓って当てにくいから、どうも焦っちゃって・・・。」

「まあ、あんまり気にするなよ力ナっち。まだ二日じゃないか。俺らは・・・えーっ・・・いつからだっただか知らないけど、だいぶ長い事、訓練してきたからなあ。扱えて当然なんだ。」

「うん、まあ・・・ところで勇はどうっ?」

「ああ、あいつだったら、なかなかよくやってるよ。紅葉相手にな。」

「うっ、うおおおっ！！」

「しっかりしろ、勇。」

この二人、華夏の弟である勇と、忍のパートナーである紅葉は、グラウンドの隅の方で訓練を行っていた。

先に言っておくが、千秋姉弟は、極めてイマイチである。

何がイマイチか？

それは、エンゲージによって現れたモノの、性能や性質についてである。

姉である華夏は、弓であった。

一発一発、発射にわざわざ弦を引かねばならない、弓であった。

そして弟の勇は、武器ですらなかった。

シールド、つまりは盾である。

身の丈と比較し、三分の二をキレイに隠せる、隠せてしまっ、ラージサイズの盾。

そして、そんな勇の訓練とは、紅葉な太刀より繰り出される斬撃を、ひたすら盾に受け、耐えるという、まさかの不動。

まあ、練習用のマト役、とも言う。

「どうした勇、お前の根性はその程度か？」

「うオオオオオオおっ、おおおおおおお、おっ!?! おおお  
おおおおやってられるかああアアアアアア!?!」

「盾は投げるものじゃない、防ぐものだ。」

「違アアう!! なんで俺だけ盾え!?! 大剣はあ? 太刀はラ  
ンスはハンマーはああ!?! もっとカッコいい武器くれええええ!  
」!

「仕方ないだろう、華夏と手をつないだ時点で、お前のエモノは  
決まっていた。」

「チキシヨオオオオ!?!?!」

その後、四人は一旦訓練を切り上げ、休憩しようかと合流したその時である。

タイミングをはかっていたのかは知らないが、彼女が現れた。

彼女は、一見して小学生の中学年位に見え、ツインテールという髪型が、より幼さを強調、白のワンピースに白のスカート、人形のように変化しない表情・・・コトノハである。

「皆さん、お揃いですね。」

相も変わらず、音程の上下や感情の欠片を一切感じさせない喋り方であった。

「どうしたんだ、コトノハ？」

珍しい客に、忍は問う。

彼の記憶では、コトノハという奴は、余程の事がない限り自分の拠点から出たりはしない筈である。

少なくとも、こんな四人の為に外出する奴ではない、部下に言伝を頼む筈だ。

・・・そういえば、華夏と勇は、コトノハが外出していた際に連れて来たとか・・・。

「急な話で申し訳ありませんが、これから、魔界に攻め入ります。」

コトノハは言った、とんでもない事を、平然と。

魔界っていったら・・・あいつらの、魔族らの本拠地じゃないか！！

「なっ、何だと！？ それはいくら何でも急過ぎ・・・。」

「時間がなくなりました。猶予も。全戦力をもって、早急に奴らを殲滅する必要があります。」

「コトノハ、それは完全に自殺行為なのは・・・。」

忍だけではない、紅葉もまた、異を唱える。

しかしコトノハは、意に介さず、続ける。

「先発隊として、五十二名を既に向わせました。残り、あなた達を含めた、二百十一名は、私と共に魔界へと行きましょう。今より、一時間後の出発となりますので、準備をお願いします。」

有無を言わず彼女は告げると、グラウンドを去って行った。

「クツ・・・クソツタレ・・・遂に来ちまったか・・・。」

「忍、二人を頼む。私は一足先に行く。」

「・・・ああ・・・。」

紅葉もまた、三人を残し、グラウンドを駆けて行った。

「ね、ねえ忍っち、もしかして・・・。」

華夏が、下を向き、俯き気味に言った。

「・・・戦争、になる・・・。」

「ねえ、オオカミさん、あれは一体……。」

私の問い掛けには、オオカミさんは何一つ、答えてはくれなかった。

ただ、ううー、と唸るだけ。

暗闇の中、明々と、色鮮やかに、その集落は照らされていた。

明々と、赤々と……炎で真っ赤に……。

## 第十三話 真っ赤な炎の中の私

### 第十三話 真っ赤な炎の中の私

私の目に、それははつきりと映っていた。

真っ赤な炎に包まれる、一つの集落がだ。

形ある建物は、見える限り全て炎にのまれていた。

私は初め、もしかしたら私を乗せて歩く巨大なワンちゃん、彼の仕業じゃないのかと思った。

だってこのワンちゃんは、単独行動していた時間があったし、炎のプレスが吐けるし。

でも、すぐに思い直す。

この子がそんな事をする筈ないじゃない、私の面倒をしつかりとみてくれた、とってでもいい子なんだよ？

おっと、ワンちゃん、



「ストップストップ!」

彼はキチンと反応して、脚を止めた。よしよし、いい子いい子。

ちゃんと前見て。

ほら、前脚がめらめら燃えてる家に突っ込んだじゃうところだった。

「ワンちゃんゴメン、ちょっと降ろして。」

と、私は言う。

彼は、ふううん？ と、疑問型で返事をしながらも、言われた通りに身体をゆっくりと伏せてくれた。

よし、ありがと……。

私は、昔からそうだった。トロイクセに、何も出来ないクセに、厄介事に首を積極的に突っ込んで、厄介事を追加する。

それは分かっているし、自覚もしている。だけれども、見てみぬフリをしたくないのも私。

では、ただの女子中学生が、この燃えている街へと入り、何をす  
るのか？

そう、とりあえずは入ってみて・・・何も考えてないや。

だけど、現場を見て、状況を知って、出来る事をしたい。

そう、それだけなのだ。

ワンちゃんには、そのの、集落の入口辺りで待っててもらおう。

毛が燃えちゃったら、大変だしね。

・・・私は、燃える集落へと、足を踏み入れた。

すごい勢いで燃え盛る炎は、一切のためらいなく、全てを飲み込  
みつつある。

学校の制服姿（しかも夏服）の私は、一応、慎重に周りを見渡し  
ながらメインストリートを早足で駆けて行った。

襲い来る熱風を、あたかも無いかの様に。

熱風？

一つ目の交差点、東西方向と南北方向の道が十字にクロスするそこを左に曲がったところで、私は段階をいくつも飛ばし、見てしまった。

おぞましい光景だった。

それは、倒壊した家屋の下敷きになって、全身が……。

「うっ……あぁっ……。」

私は、思わず目を逸らしてしまう。直視出来ない。

すぐに、その通りを引き返した。

今度は真っ直ぐ、最初来た方向からいったら右側である。

しかしそちらにも……多分、あの奥に居るのを助けようとして、そのまま一緒に焼けて……。

「ひ……どい……。」

目を背け、顔を覆ってしまいたい光景。

イヤだ、イヤだ・・・みんな、みんな燃えている・・・。

こんな近くに、死が口を開けている。

「お前、魔族か？」

「!？」

と、その時、声が聞こえた。多分、男の子の声・・・が、あの、燃えている中、炎に包まれた建物の中から聞こえて来たのだ。

聞き間違えかとも思った。だけど、確かにあっちから・・・。

と、考えていたら、やはり、炎の中から、

「答える。」

と聞こえ、やがて炎の中から少年が歩み出て来た。

燃え盛る炎の中、真っ赤になった建物の中から少年が歩み出て来たのだ。

一見した年齢は、私と同じか年下くらいだと思う。

まだあどけなさを表情に残した、ボサボサ髪、ボロボロの服を身に付けた、褐色肌の少年である。

そして、その手に持っているのは……私でも分かる、あれはピストルだ。

「わっ、私は、魔族じゃない……。」

どうにかそう答えたが……何なの……この子、怖い……。

「なら、なんでここに居る？」

「そ、それは……。」

答えあぐねる私に、少年はピストルをこちらに向け、引き金に指をかける。

マズい、何とかしないと……何とか……。

がっつっっ！！

「なっ!?!?」

「えっ、この声・・・ワンちゃん!？」

それは一瞬だった。

どこからかワンちゃんが現れて、丸太が如き前脚で少年を攻撃した。

跳ね飛ばしたのだ。

悲鳴すらあがらない。少年は、出現した際とは反対に、炎の中へと消えていった。

「ああ・・・ああ・・・。」

がっつ、がっつがっつがっつ!!

ワンちゃんが、ひたすらに吠えた。

何を言っているのかは分かんないけど、雰囲気と、吠えている様子とで大体分かる。

早く、ここから離れよう、とかそんな感じだろう。

何かがおかしい……ここは……。

「オイ、魔族だ、魔族がいるぜ!！」

この時、この一言から、美空の世界は崩壊する。

いいや、始まったのか、とにかく、何かと何か.gzレ込む様な、違和感。

背後、突然響いた声。

「ああ、確認した。間違いねえな。」

二人? いや、

「ようやくコイツの性能を試せるって訳だ。」

三人、そして、

「一気に行くか？ それとも……。」

四人。

四人居た。全員が、先程のピストルの少年とどこか似た雰囲気を持っている。

いいや、さっきの子よりも、もっと危ない気がする……。

よくよく見れば、現れたのは少年だけではない。彼らの後方、燃え盛る炎の中に、更に四人。

少年らより背の高い、全身を黒い布で覆った、目元しか見えぬ……多分、民族衣装だろう、を身に付けている女性だ。

そして彼……リーダー格と思われる男の子が、こちらへとゆっくり歩いて来る。

そんな彼の足元には、魔族の死体が転がる。

だが、お構い無しだった。彼は、進行方向上の死体を、まるでゴムの様に踏み付けた。

「……！」



死体を、踏み付けた。

この子達は……どうして、こんな事が……。

四人全員は、物騒な武器を持っている。

大きな銃を二人が、大砲みたいなものを持つのが一人、ボウガンが一人。

ああ、そうか……この集落は、この子達が……。

「アナタ達がやったのね……この火事も、魔族の人たちを殺したのも……アナタ達が……。」

「あつ？ 何言つてやがんだこの女。」

何言つてやがるのはアナタ達の方だ！！ どうしてこんな事を平然と出来る……違う、アナタ達は間違っている！！

「オイ、アルフレッド、女はほっとけえ、化物が来るぞおー！！」

この子達は間違っている、本当の……。

がうううっ！！

彼、銀色の毛の犬は、駆け出していた。

同時、少年の火器、アルフレッドのアサルトライフルが火を噴く。

犬は、跳躍し回避。

上空を駆け、少年らの傍に着地。地鳴りが、振動が辺りに響く。

彼らは既に散開、一斉にバラバラの方向へ。

風を裂き、瞬時に振り抜かれる、犬の前脚。

それは、一瞬反応の遅れた、ボウガンの少年を弾き飛ばす。

彼は、その凄まじい力に吹き飛ばされ、地面を転がり、やがて停止。

ピクリとも、動かなくなった。

「チイイツ、やられちまってやんの、あのバカ。」

アルフレッドの口からは、安否を気遣う言葉など出て来ない。

むしろ、ほぼ気にすらしてはいない。

アサルトライフル、スナイパーライフル型のエンゲージウェポンが火を噴く。

断続的な発砲音。

犬は即座に移動、あの巨体にもかかわらず、一発たりとて当たってはいない。

地を穿つ弾丸、またもや上空に逃れた犬は、口を開くと、ブレスを放つ。

炎の玉、火球。

狙いは、スナイパーライフル持つ者である。

だが、少年のエンゲージウェポンに変化が生じた。

「エンゲージ、モード、ライフル“ソルデナス”!!!」

彼の武器は一旦ほどけ、光の粒に。そして配列や位置を変えて再構築。

大口径の対魔族ライフル“ソルデナス”へと変化した。

発射。

放たれたゴールドブレットが火球を貫き、衝撃波によって掻き消す。

同時に、灼熱の黄金の弾は、犬の右脇腹へ。

その一撃が、犬の肉をえぐり、半円状に削ぎ落とした。

ぎゃん、と、悲鳴にも似た声をあげ、姿勢を崩し落下、地面に叩きつけられる犬。

黒い体液が飛び散った。

そしてその時、犬の目に入って来たもの……それは、三人目のバズーカ持つ者が、武器を向ける相手……!!!?

ターゲットは美空であるらしかった。

美空は、動かない。少年は、バズーカ型のエンゲージウエポンの引き金を引いた。

白煙が尾を引く、砲弾。直撃コース。美空目がけて。

いけない！！ いけないいけないいけない！！！！！！！！！！

俺は、美空を守る、守らなければならない！！ あの時から、そうだったから！！

.

飛来する砲弾、見えている。でも、動けない。飛んで来る、動けない、飛んで……。

がっつがっつ！！

だが、前に、眼前に立ちほだけり、視界を遮る……それは、

「ワン……ちゃん……！！？」

えっ！？

爆音、煙、土の欠片、爆風、そして……倒れて来る彼、犬、ワンちゃん。

押し潰される……そう思った時、彼は、犬は縮んでゆく。

何がつてサイズがだ。

どんどんどん、縮む、小さく縮む。

もう、犬ではない、人の形。

人の形となつたけど、腕、右の腕だけは、犬の前脚のそれであつた。

背中に爆発を受け、致命傷を負い、もがき苦しむ、片腕だけが巨大な魔族の腕の男の子……。

うっあ、うあ、あっ……あれ、黒……知らない、知らない美空。

違う、分からない。黒、分からないの。黒、男の子、同級生になった、違う、知らない分からない。

あれ？ あれ？ あれ？ 引き出せない、いや、いいや、いや、黒く、違う、知らない男子、見た事もない、はたまた面識もない、どうしようもない、違う、黒。

黒……黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒あああ。

ちがうちがうちがうちがうくるじゃないくるじゃない、知らない、アナタは知らないの、その男の子を。いや、知ってる。

私をを！！知らない分からない自分。

かばってええ！！ちがうちがうちがう。

倒れてる！！まちがいかんちがい分からないきおく。

黒くん！！ああ・・・。

黒くん、黒くん黒くん！！ああ・・・。

私が、黒くん、という真実に辿り着いた直後、アルフレッドのエ  
ンゲージウエポンが、倒れ伏す黒くんにトドメをさした。

ガガガガガツ・・・黒色の体液、赤色の体液。

全身を、穴だらけ・・・死・・・。

うあっ、うああああっ、うあああああ！！ 黒くん黒くん黒  
くん黒くん黒くん黒くうううん！！

異変、異変。

黒斗、その骸が、ほどける。

金色の、見慣れた粒子へと姿を変える。

全てが粒子となり、それは美空を目がけ突撃、彼女の中へと入ってゆく。

染み込んでゆく。

皮肉な事だが、これで完成だった。美空が、黒斗の命を取り込んだ、その時が。

「うあああああああああああ！……！」

「あら、ようやく私の番かしらね。全く、美空ったら戦闘はいつも、この私に任せちゃってまあ……。」

(……)

“えっ!?”



(お前なんかいらぬ、お前はもういらぬ、黒くん、黒くん、黒くん黒くうううん!!)

“うあつ、なつ、何だつて、私が負ける？ 身体が、エンゲージ粒子に・・・みつ、美空、アンター一体!?”

(わあああああ!!)

“私が消えるう!?! そんな、そんなバカなつ、この私があ!?!”

「ギヤーギヤーわめいてんじゃねえ、お前もすぐに彼氏のトコへ送ってやるよオ、魔族の化物共オ!!」

アルフレッドは、粒子と化した黒斗の異変も、“魔族であるから、こちらの常識など通じないから”と断じ、美空へ、自身のエンゲージウエポンの銃口を向ける。

「化物は……。」

「あん？ 何だつて？」

「化物はお前らだ、お前らの方だぁぁ!!！」

と直後、美空から光がほとばしる。

目の覚める様な、圧倒的な光量。

まるで、スタン・グレネードみたいだと、アルフレッドは経験から思った。

その光は、アルフレッドはもちろんの事、スナイパーライフルの者、バズーカの者、そして黒い布で全身を覆う女性四名を、包み込み……一瞬の後に、光は消え失せる。

光が止み、視界が晴れた。

アルフレッドは、相も変わらず眼前につつ立っている女を視野に捉え、エンゲージウエポンの引き金を引いた。

「死になぁ、クソ魔族う!!！」

だが、いくら、引き金を引こうが、

弾は出なかった。

引き金を引いた、つもりだった。

引き金は、まるで、砂の様な茶色い粒と化し、サラサラと崩れた。

いいや、それだけではない。自身のアサルトライフルが、端面から中心へと、風化しボロボロになった岩石の様に、砕けてゆく。

「なっ！？ オツ、オイ、何してやがる、きちんとエンゲージの維持につとめねえかこのボケェ！！」

アルフレッドは、美空に背を向け駆け出したかと思うと、自身のパートナーと思われる女性を殴り倒し、蹴りつけた。

腹部を、肩を、そしてしまいには顔面を、容赦なく蹴っていた。

時折、鈍い音が響く。

衝撃が、内部にまで浸透した様な、そんな音だった。

その行為は、美空の怒りを更に膨れ上がらせた。

ひどい、ひどい、ひどいひどい！！

「そうよ・・・自分のパートナーですら、そんな風にしか扱えないから・・・。」

最早、美空の感情は最高潮だった。

「だから、生きている命の、その重さも分からない、分かりはしないい！！！」

発射されるバズーカ砲弾、迫る大口徑ライフル弾。

残る二名の攻撃だ。

しかし、それらは、美空に触れる事さえ出来ずに・・・彼女の直前で、ぼろぼろと崩壊する。

ぱらっ、と、金の弾丸も砲弾も、今やただのコシヨウみたいにな  
った。

そして、その攻撃を最後に、二人のエンゲージウエポンもまた、  
砂状の物質へと姿を変え手をすり抜けてゆく。

「うあああああああああ！！！！！！」

今度は、美空の手元へと光が集まる。

それは、ある形を描き出す、ある一つの形を成す。

それは大剣。

美空の身の丈はある、大剣であった。

彼女は、宙に浮くそれを、左手一本で掴み、軽々と持ち上げた。

その剣・・・“エル・ナーフィ”を。

背中には翼……一對二枚の純白の翼が、存在している。

生えている訳ではない。

ほんの少し、背中から隙間を開けて、そこに存在しているのだ。

「許さない、私は……お前らを殺す!! 殺おおおおおす  
!!」

## 第十四話 空飛ぶ私

### 第十四話 空飛ぶ私

「許さない・・・私は、お前らを殺す・・・殺おおおす!!」

美空は宣言した。

それは、彼女が絶対に口にしなかった言葉であり、また言わない様に、ある意味努力していた言葉だった。

激情、溢れだす、沸き上がる激情、殺意。

目の前で敵は、黒斗を殺した。大切な人の命を、容赦なく奪っていったのだ。

人の命を何とも思わない外道、決して許容出来ない、許す事など出来ないのだ。

だから、彼らの存在を許しては・・・いけない。

美空は、大剣“エル・ナーフィ”を片手でスツ、と前方へ突き出す。

刃先を、相手へと向けたのだ。

美空の身の丈はある、一点を引き伸ばした立体のひし形の、刃・  
・アルフレッドを初めとした面々の恐怖心をおおるには十分であつた。

「くっそオオオオ！　早く、早くエンゲージを出せよお、やられちまうだろうがああああ！！」

アルフレッドのパートナーに対する暴力は、追い詰められるがごとくに、焦りがのぞくことに激しくなつてゆく。

黒い布纏う女性は、ただ、なすがまま、されるがままである。

(許さないいいいい！！！)

美空の手に、足に力がこもる。

もう、燃えている建物も、魔族の死体も、彼女の目には写らない。

「あああああああああ！！！」



地を、一蹴り。

土を粉碎し、音を、大気を置いてきぼりにして、加速。

もう、一瞬の後にはアルフレッドの顔を正面から眺めていた。

それは移動した、なんてものではない。テレポート、瞬間移動と表現した方が相応しい、凄まじい速度であった。

「ひっ……。」

直後、アルフレッドの身体が宙を舞う。

強烈な横向きベクトル、頬から全身へと走る、鋭い痛み。

冗談みたいに、重量を感じさせずに、アルフレッドは遙か彼方へと吹き飛んだのだ。

圧倒的……絶対的な力を、ただの一動作二動作で残りの敵に示したのだ。

「うっ……うあああああー!!」

残り二人は、どうにか恐怖を断ち、逃げにまわる。

かなわない、かなう訳がない。

目で捉える事が出来ない・・・第一、エンゲージウエポンは失われたのだ。

「逃がすものかあ!!」

今の美空から逃れる事など、例え天地がひっくり返ったとしても不可能だろう。

正面に、美空が、何の前触れもなく現れた時には、肝を握り潰される心地だったに違いない。

もう、その手中の大剣は振りかぶられていて・・・。

「だああああああ!!」

一閃。

その太刀筋は、目に捉えられるレベルのものではない。

人間の反応速度を超越し、繰り出されたものである。

空気を割り、摩擦で焦がす・・・それ程のものであった。

当然、そんなものを受けては、ひとたまりもなかった。

先程までバズーカを所持していた少年は、上半身と下半身を、一切の抵抗なく両断され、地面に崩れ落ちる前に金色の粒子と化し、消え去った。

最後の一人、スナイパーライフルの少年とて、逃げ切る事はかなわなかった。

直上、頭上……彼の、逃げ惑う彼の真上に、出現、割砕の構えの美空。

そのまま、落下するスピード、力、剣の重量を加えた斬撃を繰り出す。

少年は、頭頂部から股下までをキレイに両断。

身体を左右対称に割られ、やはり光となり消える。

そして、最後の仕上げと言わんばかりに、彼女は再度、地面を破砕し加速。

またもや、消失と見紛う機動を披露した。

「ぐっ……ああ……。」

何が起こったのか、全く理解が及ばなかった。

あの女が突然、目の前に現れて……何かを喰らって吹っ飛ばされた。

しかし……魔族ってのは、こんなにも恐るべきものだったというのか？

しかも、エンゲージウエポンらしいものを使った。

マズい……意識が保たないかも……。

目が霞んでゆく。少しずつ、ゆっくりと。

痛みは、だんだんと鈍痛に変化してゆく。

心音が、あまりに大きく聞こえ、反対に周囲の音はシャットアウトされてゆく。

かつて一度だけ……腹を撃たれた時に味わった感触にも似ていた。

少年兵士の頃の、あの生と死を彷徨った時の感触に……。

足音が、聞こえた。

こちらに向かう、足音が。

あの女がトドメをさしにきたのかと思った。

処刑人が、武器を片手に向かつて来ている、と。

顔、が視界に現れた。

それは、あの女じゃなかった。

目だけを露出させ、他を黒の布・・・チャドルによって覆う女。

俺のパートナー・・・エンゲージ相手であった。

「しっかり・・・しっかりして、ラーシード!」

ラーシード・・・それは俺、アルフレッドの本名である。

アルフレッドというのは、一種の憧れから名乗っていた。あの時、手にかけて、どこの国の者とも知らない、白人ホワイトの兵士。

その者の名が、アルフレッドであった。

と……思い出に浸る暇もないらしい。

パートナーの背後に、あの女が、やはり何の前兆もなく現れた。

巨大な剣を振り上げて、殺意に満ちたその眼で睨む。

ああ……やばい、終わっちまう……。

「どいて!! 私、そいつを殺す!! 黒くんを殺したそいつを殺おす!!」

美空は、振り上げた剣をそのままに、叫ぶ。黒い布纏う女性目がけて。

狙いは、あくまで手を下した少年一人であるから。

しかし女性は、両の手を広げ、少年の前にはだかる壁となる。首を横に振り、拒否の意を明確にした。

「どうして……どうして!! そいつは黒くんを……そしてアナタにもお!!」

それでも女性は動かない。それどころか美空を、唯一露出してい

る目をもって、精一杯、威嚇した。

「それでも息子はやらせない!! この子はあ!!」

息子・・・女性はそう言った。

だが、美空には関係などない。それで何かが変わる訳ではないのだ。

頭に血の昇った、現美空には。

「うるさいい!! 早くどいてえ!! じゃないとアナタもおおお!!」

だが、やはり女性は首を左右に振った。

(マッ・・・ママ・・・)

アルフレッド・・・いやラーシードもまた、目を見開くと、ゆっくりと身体を起こした。

今、目の前に居る女性・・・それは、エンゲージパートナーでも、武器でも道具でもない・・・母であった。

息子が為に、その身を壁とする母親であったのだ。

あの女でも、コトノハでもない、本当の母。

「ぐっ……どうして!?! どうしてそんな奴をを!?! もういい、もういい!?!」

美空の手に、力がこもる。

今、剣が振り下ろされようかという、正にその時であった。

「美空アアアア!?!」

「!?!?」

剣が、止まる。その、聞き覚えある声に。

それは、友人の声。

「しっ、忍……紅葉……。」

忍と紅葉……友人であったのだ。



「美空ア、止めるオオオオ!! お前、何してんのか分かってんのかあ!!」

「・・・ジャパ・・・ニーズ・・・の連中・・・か・・・。」

確か、フィノブと・・・モミディだったか、とラーシードは思った。

「分かってる・・・コイツらは黒くんを殺した。だから、私はコイツらを・・・殺す!!」

「止めてよ美空!! そんなの全然、美空らしくない!!」

「華夏・・・勇まで・・・。そうなんだ、皆、みんな知ってたんだ・・・知らなかったの、私だけだったんだ・・・。」

「美空、落ち着け。話をしよう。大丈夫、俺達はお前に危害を加えるつもりはない、頼む、一緒に来てくれ!!」

忍が言う。

だが、美空の返答はハッキリとしていた。

「イヤ・・・イヤだ！！ アナタ達はこれからも、コイツらみたいに罪の無い魔族の人たちを殺す！！ だから、一緒に行きたくない！！」

「それは違う！！ 魔族はなあ、人間の世界を乗っ取るのが目的なんだよ、ヒトを抹殺するのが目的なんだよ！！」

「違う、そんなんじゃない！！ 魔族の人たちの事もよく知らないクセに、いい加減な事を言わないで！！」

美空は、今度はゆっくりとエル・ナーフィの刃先を、紅葉らへ向けた。

それは決別か、はたまた裏切りか・・・。

美空の目からこぼれた雫が、頬を伝う。

怒りは、流れない。

良心ばかりが流れてゆく。

躊躇いも、戸惑いも、迷いも、そんなモノを全て押し流す様な、

雫であつた。

「ダメか・・・華夏、勇、下がって。もうダメ、美空は私達の敵になつた、衝突は避けられない。」

「でもっ!!」

「華夏、ち下がれ、来る!!」

正面、美空は駆け出した。ダツシュだ。目に捉えられる程度のダツシュ。

それでもヒトより、あるいは少々の魔族よりは速い。

「チイッ!!」

紅葉が、忍が前面へ。

かつての友人、かつての友達。

大剣が、太刀が、拳が・・・。

火花散らす。

## 第十五話 一人きりの私

### 第十五話 一人きりの私

火花が散る。轟音、金属音。

第一撃目にて、紅葉は力負けを実感した。

どうにか美空の全身の、全体の動作から、凄まじい速度で繰り出された斬撃に対応した。

剣先を見ている様では、あれはさばけない。

自身のエンゲージウェポン、太刀の刀身にて振り下ろされた一撃を受け止めはしたのだが・・・大鎚を叩きつけられたが如く衝撃が、全身を駆ける。

「ぐあっ・・・。」

思わず、声が漏れる。

足元の土壌がひび割れ、僅かにへこむ。

あの時・・・学校の屋上で対峙した時などは、比にならない威力であった。

「うおおおおお！！」

サイド、右方向より駆けて来る忍。

彼のエンゲージウエポンは拳に付随するナックルダスターである。

右ストレートを美空目がけたたき込む。

それはあっさりと、美空の脇腹を捉える。

だが・・・。

「ぐうああ！？」

悲鳴をあげたのは忍の方だった。

まるで、巨大な鉄塊を殴り付けた様な感触、同時に右手エンゲージウエポングが砕け散った。

「忍！？ クッ・・・。」

紅葉は、動けもしない。力が拮抗どころか、下向きの力に押し潰されそうなのだ。

美空の、空いた右手の掌が、忍の方を向く。

集まる光、それはエネルギー波、B・O・D。

エンゲージ粒子を集め、ビーム状にして放つ技である。

「くっ……そぉお、忍、避ける!!」

「言われなくてもオ、エンゲージ、“ソルティア”!!」

残った、左手に被さるエンゲージウエポンが、金色に輝く。

エンゲージ、第二段階、それはスナイパーライフルの者も使用していた、様は、エンゲージの性質を変化させる行為の内の、第二段階である。

この場合の、忍の“ソルティア”は、パンチ力を犠牲にする代わりに、自身の速度を向上させる。

すなわち……。

「あああああああああ!!」

放たれる、B・O・D、ブラスト・オーバー・ドライブエンジン。  
ジ。

だが、忍は既に射線軸より離脱している。

外れたエネルギー波は、地面に大穴を開けた。

「オオオオオオ！！」

忍は、すぐに地を蹴る。美空の注意が、かつての忍の位置に向いている間にだ。

彼は瞬時に美空の左サイドに回り込み、加速をプラスした左腕による一撃を、大剣、エル・ナーフィにたたき込む。

それにより僅かに横ズレした大剣は、紅葉の刀を外れ、地を砕く。土煙が、岩石が巻き上がる。あれを、もしもマトモに身体に受けていたら・・・と思うとぞっ、とする。

紅葉は、忍に抱えられ美空の間合いを脱した。

その様子に美空は、特に焦りもせず、ゆっくりと剣を持ち上げる。ひどく、ゆっくりとだ。



「ハア・・・ハア・・・美空の奴、桁外れじゃねえか・・・どうりでアルフレッド達がやられてる訳だ。」

「私が動けなかったのだ、パワーもスピードも、違い過ぎる。」

紅葉をそつと下ろすと、再度の戦闘スタイル。

「しかしどういう訳だ？ 美空は一人でエンゲージウエポンを使ってる。そんなの聞いた事もねえ。」

「・・・分かってる。だけど、そんな事は今はいい、問題はいかにしてあの化物を沈黙させるかという事だ。」

「・・・ああ!！」

（・・・忍・・・紅葉・・・美空・・・私は、どうしたらいい？  
どうしたら・・・。）

華夏は立ち尽くし、後方から見守っていた。

自分に何が出来たのか・・・いろんな事に頭の中をまぜくり返され、迷い、戸惑っている。

それもその筈である、自分はその戦いに参加してもダメだと分かっってしまったているから。

速過ぎて、強過ぎて、レベル高過ぎて・・・つい二日前、エンゲージウエポンを扱い始めた自分に何が出来たのかと、そういう事だ。

( 怖い・・・忍も紅葉も美空も・・・怖い、怖いよ、私の知っている皆じゃないよ・・・どうして、どうして皆が戦うなんて事になっちゃったのよお。 )

つい、ちょっと前までは、皆一緒に学校に通ってたじゃない。どうして、どうして、と、そんな事ばかりが頭を駆けた。

手も足も、震えていた。血の気が引いていった。

息苦しい、重い・・・どうして私はここに居るのだろう、と。見ている事しかしていなくてもいいのかな・・・私は、本当は・・・。

「姉ちゃん、俺は行くよ。」

唐突に、声が聞こえた。これは弟の、勇の声であった。

「勇、勇！？何を言ってる……。」

「俺は美空を止める、あの分ならず屋を……！」

「でっ、でも、どうやって？勇のエンゲージって盾じゃない。」

「ぐっ……たっ、盾でも、美空の攻撃を受け止めて受け止めてえ、防ぎきってやらああ……！」

「止めなさいよ勇、見たでしょ、皆の戦いを……私達が行っても邪魔になるだけ……。」

「邪魔じゃねえ、プラスイチになる……イチじゃなくても、どんなに小さくても、プラスには違いねえんだ……！」

なっ、なんて前向きな……だけ……。

「だけど、これは遊びでもテレビゲームでも訓練でもない、本物のよ、全部全部……！」

「分かってらあ！！ 怪我もするし、血も出る、もしかしたら死んでしまうかもしれないねえんだろ！？ だけど、それを一番味わってるのはあの二人なんだよ！！ そんな二人に背中向けてて友達なんて、格好悪くて言えねえだろうがあ！！」

なんと・・・勇、我が弟ながら、なんて男前な発言を！！

くそうっ、格好良すぎる・・・これで武器がマトモなら、なお格好良かったんだけどね。

だけど、しかし、あっさりと私の躊躇いを払ってくれたあたりは、さすが姉弟である。

「・・・そっかあ、そうよね、美空を止めて二人を助けたげない  
と・・・私達、友達だからっ！！」

勇にだけやらせる訳にはいかない、私もやる、当然だ。

「じゃ勇、行くよ、手を出して。」

「おっ、おっ、じゃあ・・・いくぞ！！」

「「エンゲージ！！」」

「わあああああああああー!!」

振り下ろされた・・・であろう大剣。

であろう、というのも、エンゲージによって強化された動体視力をもつてしても捉えられないのだ。あの斬撃は。

辛うじて回避・・・出来た。

ブウツ、という大気を押し退ける音が、真横を通過したのだ。

危なかった、エンゲージ第二段階でなければ、今頃腕の一本でも落とされていたかもしれない。

とっ、安心はダメだ、美空は外したとみるやいなや、すぐに剣を止め、横に薙ぐ。

飛び退き、斬撃を紙一重で回避。

(くっそおお・・・コレじゃ、近寄るのも簡単じゃない。)

速度を強化していても、どうやら美空には及んでいないらしい。  
反応され、反撃される。

普段の彼女のどんくさい所など、微塵もないのだ。

「エンゲージ、モード“チドリ”！！」

紅葉もまた、自身のエンゲージウェポンを第二段階へ。刀身が青  
白く神秘的に輝き、紫電が走る。

そのまま太刀を一旦鞘に納刀し、美空との間合いを瞬時に詰める。

そこから抜刀、居合い抜き的要領で前方へと一閃。

しかし歪む・・・美空の前方の大気が歪み、彼女の斬撃、そして  
ほとばしる雷撃を霧散させた。

「ぐっ・・・何だというのだ、これは・・・。」

「B・O・D・・・。」

美空の両手に集まる光、それを彼女は地面目がけ叩きつける。

すると直後、間合いをとった紅葉の足元に、異変が起こる。

それは地面を破碎し、飛び出した。幾筋ものエネルギー波、紅葉を囲う様に現れ、上昇。次に、降り注ぐ。

(避け切れ、ない……。)

「紅葉いいいい!!」

彼女の救出に、忍がビームの檻へと飛び込む。

破壊の雨中。

エネルギー波の雨に、二人は肌を打たれ、武器はあっさり砕かれて、全ての戦闘能力を奪われる。

二人の悲鳴も、降り注ぐ破壊の雨音によって掻き消された。

やがて、雨は止む。

後に残ったのは、エンゲージウェポンを完全に砕かれた、ダメーシだらけの二人。

もう、動く事さえままならない様だ。

「ぐっ、ううう……。」

「あああ……。」

少しずつ光に還る、武器。

ダメだ……差があり過ぎる。

こんな所で、負けてしまうのか。

美空は、倒れる二人に対し、再々度、手に光を集中させる。

これで、トドメをさすつもりなのだろう。

「クソオ……クソツ、美いつ、空アアア……。」

美空は、表情を変化させる事さえ忘れてしまっている様であったが、その目からは常に雫が流れていた。

一滴、また地面に落ちる。また、一滴、また……。

やがて光は限界近くまで収束され、次の瞬間放たれた。

エネルギー波、金色のエネルギー波は一目散に二人を指す。



忍、紅葉両名の視界を、完全に塞ぐエネルギー波。

エンゲージウエポン無き今、対抗手段すら無い。

打つ手なし、万事休す、そんな言葉がピッタリで……。

「させるかあああああ!!!」

忍と紅葉、その二人の視界は金色一色から一つの影によって埋められる。

あれは誰かの影、盾の後ろに立つ一人の人物の影であった。

「ゆっ、勇か!？」

二人の前に立ちはだかった人物、それは千秋 勇である。その手には巨大な盾、エンゲージウエポンの盾があった。

盾は、襲い来るエネルギー波を弾き、何と、防ぎきったのである。

「大丈夫か、二人共!？」

「俺らは、大丈夫だつ。それよりも美空から目を外すな!！」

「えっ……!？」

正面、美空はもう、そこには居ない。

彼女は、空中に居た。ジャンプ、をしていた。

そこから、勇目がけ落下、重力を加えた斬撃。

「うおっ!？」

どうにか反応し、回避。

続けざまに繰り返される回し蹴り、盾によりブロック。

防ぎはしたが、その場から歩数十数歩程度、後退させられる。

(グッ……なんて威力だよ。)

盾に響いた衝撃、それは紅葉の斬撃など比にならないものであった。

忍のストレートパンチとて、この一撃には及んでいないだろう。というか、遙か上を行っている。

「盾……ならば……。」

と、美空は言つと、彼女剣に、光が集まり始めた。

何故だろうか、とてつもない危機感が、皆を襲う。あれは、規模の大き過ぎる一撃を放とうとしていると。

その証拠に、手から放ったあれ、B・O・Dの光とは比べものならぬ光量を剣に蓄えつつある。

「あああああ……。」

一転、美空は目を閉じ、剣のコントロールに集中していた。

次第に光纏う剣は、形を崩し、光そのものとなって、どんどんとその長さを増してゆく。

「じょ……冗談だろ……?」

もう、彼女の剣の先端は、目に映らなかった。

それ程までに、伸び続けた金色の剣。

まさか美空は、そんなモノを自分らに対して……。

当然、振り下ろすつもりだろう、あんなモノを喰らっては……  
どうなるか分かったものではない。

阻止しなければならない。だが、どうやって？

紅葉や忍は無理だ、エンゲージを再構成する時間を貰えるとは思えない。

勇は？ 盾だ。美空を揺るがせる事は出来ない。

と、なれば……

「姉ちゃあああん、頼むー！」

剣が、振り下ろされる。

「間に合ええええ、エンゲージ、モード“アルテミス”！！！」

その声と同時に、それまで美空の背後に居た華夏のエンゲージウエポンから、一本の弓矢が放たれる。

轟音。

この日、この大地に、数百メートルに渡る地割れが発生した。

第十六話 一人・・・ぼっちの、私

第十六話 一人・・・ぼっちの、私

ようやく視界がはっきりとして来た。

紅葉は、忍は、勇は、ようやく、目を開く事が出来たのだ。

さっきまで、まるで嵐の中の様であった。

轟音が鳴り響き、激しい縦揺れが身体の芯までを襲い、土くれや砂、石が飛来して、砂煙が視界を遮った。

ごく近くで大爆発が起こったかのような錯覚に陥る。

耳が、キンキンする。

勇のエンゲージウエポン、ウエポンとはいえ盾なのだが、それがひび割れ砕け、光に還る。

維持する為の、意識の集中、そしてパートナーからの精神リンクを自ら、断ってしまった。危機的状況の故に。

さて、土煙が完全に消え失せる。

三人は、ほんの少し、チラツ、と横に目をやる。

これは、大変だ……。

皆は驚愕する。

あと、二歩……。

いや、一歩半、あちら側に居たら……。

一歩半、あちら側には谷が出来上がっていた。

幅、一メートル弱。

深く深く……惑星の中心まで到達してんじゃない？ というのはさすがに大袈裟だが、少なくとも底は見えない。

クレバス？ 断崖絶壁？

ともかく、前方に立ち尽くす美空から一直線に、ずつと伸びる谷。

あの、光と化した大剣によるものであるが、いくら何でも桁が違い過ぎた。

これではまるで、神か、はたまた邪神か・・・それ程の力であった。

だがしかし、その神だか邪神だかのレベルの彼女、美空は血を流していた。

ダメージを負っていた。

弓矢が、彼女の左肩を貫いていたのだ。

どくどくと、流れだす真っ赤な血。

制服は、中学の制服はビリビリに裂けて、カッターシャツの肩から腕、袖まで、そして腰までが真っ赤に染まっているのが露出した。

肩を弓矢によって貫いたのは、華夏である。

美空が、光の剣を振り下ろす直前に放たれた一本の弓矢、“アルテミス”。

それが、美空の背後より飛来、例の歪む空間に阻まれず、直撃した。それによって動作を乱し、皆に光の剣が命中するのを阻止したのだ。



だが、華夏は、それで笑みを浮かべられる訳もない。

いくら、皆を攻撃していたからって・・・彼女は、美空は友達だった。

その友達を、華夏は射ち、友達は血を流した。

三人は助かったけれど、一人が血を流したのだ。

苦しいばかりだった。

.

左の肩が、べっとりとしていた。濡れている様だった。

手を、恐る恐る、ゆっくりと触れてみる。

すると、真っ赤な液体が、まんべんなく右の手の平を染め上げた。

ああ、私は血を流していると、思った。

よく見たら肩に、穴が空いていた。貫かれたんだ・・・。

振り返る。そこには、光に還りつつある弓を持った、華夏が居た。

華夏が射つたの？

華夏は、表情を曇らせたままだ。

そうよね、そうだよね、あのままじゃあ私、三人を殺してたかもしれないからよね。

・・・あーあ、私、なんて事しちゃったんだろ。

黒くんが居なくなつて、悲しくて、暴れちゃつて・・・二人殺して、皆に攻撃して。

ははっ、私って、最低。

マジで、サイテー。

自分の事しか、考えてなかったじゃん・・・。

もみじやしのぶやかなやゆつに、ここまではやらせさちゃってませ

。

どうしてだろ、痛い。全部痛い。

もう、いいや……。ゴメンね黒くん、私はもう……。

「四人共、よくやりました。」

と、突然に響いた、高いトーンの声。それは少女か、幼子か、そんな声。

それは天使か、はたまた……。

現れたのは、一見して小学生も低学年かという外見の、上下ともに白一色の洋服で統一した、ツインテールが特徴の女の子。

その表情は、まるで仮面の様に無表情であり、また不変であった。

「コトノハ……。」

忍が言った。コトノハ……と。

よくよく見れば、地面から靴一足分浮いていて、足を動かさず事な

く移動している。

ただ者ではない、それはすぐに分かる事。

あの女の子の全身から、強い圧迫感を感じる。殺気の様でもあった。

「後は、私が始末をつけましょう。貴方は一旦、下がり傷を癒して下さい。」

そのコトノハの発言は、恐ろしいまでに感情、そういうモノが抜け落ちていた。

「始末って……美空をどうするの？」

「カナ、ご安心を。悪い様にはしませんよ。……お前達、四人を我々の拠点へと退避させてあげて下さい。」

その命令に、コトノハと共に現れた、いずれも美空らと同じ年位の少女少女ら十数名が駆けて来て、紅葉を、忍を、勇を、華夏を連れて行く。

連れて行く……とはいっても、一人に対し三、四人で……連行している、と表現した方が適切かもしれない。

手を、足を、つまりは多人数で抵抗を封じ、強引に歩かせている  
といった具合だ。

「ちよっ、な、何よ、一人で歩けるからぁ!!」

「華夏っち、止める。おとなしくしていてくれ。」

「ああ、勇もだ。」

「……分かってるよ……。」

四人は、やがて見えなくなった。

コトノハは、残った、百近くはいるであろう少年少女らも下がら  
せ、美空の正面に、スッ、と降り立った。

「ミソラ、と言いましたか……。」

私は、答えたくなかった。というか、喋りたくなかった。

「貴方の力は危険です。我々の魔族討伐に、大きな障害となると  
判断いたしました。」

「……………」

「申し訳ありませんが、魔族としてここで死んで頂きたい。」

やっぱり……大抵、こういった展開ならそうなるんだよね。

それで、私を倒して、なんか記憶とかを操作されて、仮面的なものをつけられて、部下とかにさせられちゃって……とかなるんだよね。

「鋭いですね。そうです、貴方には魔族討伐の一兵士として、仮面の人Aとして、生きて貰おうかとも考えておりました。」

「そう……言いたい事、それだけ……？」

「はい。」

「魔族の人達、殺させるんだ、私に。」

「はい。」

「紅葉や華夏達にも、殺させるんだ？」

「はい。」

何の前触れもなく、前置きもなく、私は動いた。

もう、手を抜いたり、力をセーブしたりしない。全てにおいて全力だ。

テレポート、瞬間移動といってもいい速度で、美空はコトノハの眼前に現れると、拳を振り抜く。

最早、建物も残骸も、死体ですらも一切存在しない、この、ただの荒野の上で……。

コトノハは、その一撃を正面より受け、凄まじい速度で吹き飛んで行き、遙か彼方に存在する山へと衝突。

美空の位置からはよく見えぬものの、クレーターが一つ、山腹に出来上がる。

だがそれは、ダメージとなっていないらしい。

すぐさま、クレーターからエネルギー波が発生し放たれた。

瞬く間に、エネルギー粒子の乱流は美空を飲み込む。

弾いた。

美空と、その足元の土壌だけを残し、周囲の地はえぐれる。巨大ドーナツの出来上がりだ。

そして気付いたら、もう目の前にコトノハが居た。

視線が、交差する。

一瞬、ほんの一瞬の静寂。

直後、振り出される剣、エル・ナーフィ。

直後、受け止めるコトノハの大気の壁。

彼女の周囲にも、壁があった。弾かれる、剣。

風切る、コトノハの拳。

直撃。

吹き飛びはしない、美空の身体。

頬打つ打撃は、重かった。吹き飛ばす、という軽さではない、その場に釘付ける、重い重い一撃。



「がつッ!？」

続け、下から上へのキック。

これまた、吹き飛ばさせてはくれない。内側へ、ダメージが浸透してゆく。

外見によらず、徒手空拳という戦闘スタイル、肉体派……？

あの軽そうな身体、細い手足からは、想像も及ばない打撃力。

強い……かなり。

浮かされた身体に、正面から手の平が……、トン、と、制服越しに胸の上に乗せられる。

と、同時に、手の平に集う金の粒。

「B・O・D。」

その吹き通り、手の平より走るエネルギー波。

それをゼロ距離にて、美空に叩き込む。

壁が、機能しない。

完全に、その全てをその身に受ける。

エネルギー波に連れて行かれ、今度は美空が吹き飛ば番だった。

「うっ、あああああああああ！！」

彼女は、森の中へと消える。

閃光。

大爆発。

コトノハは飛翔し、すぐに森を、ひいては爆心を眼下に捉える。

既に、彼女の両の手には、光が集っていた。

「容赦は致しません・・・EB。」

発生したのは球。

小さな、バレーボール程の、エネルギー球体である。

「発射。」

その一言により、球は幾筋ものエネルギー波へと変化し、森へと一斉に降り注いだ。

着弾。

すると、ドーム状に爆炎が拡がり、後には何も残さなかった。

森を焼いた、消した、えぐった。

鬱蒼うつそうと生い茂る森林を、その一撃により、三分の一程荒野とした。

クレーター、クレータークレータークレーター……たこ焼きの鉄板みたいになってしまっていた。

残存する木々は、紅蓮に焼け落ちる。

「……………」

おかしい、何のリアクションもない。

……そうか、死んでしまったのか、もしくは気絶したか動けな

いか。

いずれにしても、終わったらしい。対象を回収して……。

高度を下ろす。ゆっくりと、辺りを見渡しながら。

燃え盛る木々を横目に、更に降下。

地に、足をつく。音もなく、水面にさざ波すら立てぬ風にだ。

僅かに首を動かした時、倒れた美空を発見した。

ボロボロの破れ、原型留めぬ制服、真っ赤に染まるカッターシャツ、間違いなく美空である。

気を、失っているらしかった。

接近し、一気に捕縛するか？

否、油断はいけない。

何度目か、コトノハは手をかざす。

念のため、エンゲージを封じておこう。

そうすれば、美空はもはや、ただの女子中学生でしかない。

エンゲージとは、所詮は与えられたモノ、どのような経緯でこの力

を手に入れたかは知らないが、この私の前には如何なるエンゲージも……。

「コトノハ……だっけ？」

「!？」

「なっ……？」

美空が、居ない！？　そして背後で声。もう、美空はコトノハの背後をとっていた。

「あああああああああ!!！」

コトノハが振り返ろうとしたその刹那にもう、B・O・Dは放たれていた。

ブラスト・オーバー・ドライヴエンゲージ。

壁を、形成する暇などなかった。

「うわあああああ!!！」

木々を突き破り、彼方へと、その小さな身体は吹き飛んでゆく。  
すぐに、見えなくなった。

美空は、そこから駆け出した。コトノハの消えた方向とは真逆へと。

気休めについていたと思われた翼をはためかせてみれば、身体は浮いた。やがて空を飛ぶ。

こうして私は空を駆け、この場を離れた。

途中、眼下に友達だった皆が見えた。

皆は、気付かなかった、気づきもしなかった。

だけど、その方がよかったのかもしれない。

一人、私は飛んで行く。どこか、羽根を休められる場所を探して。

もう、戻る事は出来ないだろうと、頭の片隅で思った。

黒くんも、もう居ない。今更ながらまた、涙が滲んで来た。

いつそのこと、蒸発でもしてしまいたい。

あの空気のように、ただただ、漂っていられたら……。

「美空ちゃん。」

と、唐突に、空飛ぶ私に、真横から声をかけてくる者が居た。

この声は……そして、その者の顔を見た時、確信を得た。

「リース……さん？」

「ええ。ついでにリムもいるわよ。」

コウモリにも似た漆黒の翼をためかせ、飛んでいたのは、この世界に来たての時に世話になった人。

魔族の双子……リースさんとリムさんであった。

## 第十七話 お休み中の私

### 第十七話 お休み中の私

「へえーっ、それは大変だったわねえ、美空ちゃん。」

と、リースさんは言った。

リースさんは、初めてこの世界に来た時、お世話になった魔族のお姉さんで、一見、人間の女性と大差ないのがポイントだ。

あえて違いを指摘するのなら、頭に生えた二本の角に、背中のコウモリみたいな羽根、典型的な、先っぽがハート型の尻尾。

だが、それよりも特徴的なのは、おっきな胸部の二つのそれ、くびれ、アンザンガタといわれるお尻・・・それらを惜し気もなくアピールするギリギリ服、というか最早黒い下着・・・妖艶で、美しい顔・・・。

リムさんの方も、ほとんど一緒の紹介で差し支えないだろう。姉妹というだけあって、本当にそっくりだ。

しかし・・・相変わらず、女としての自信を地の底まで叩き落としてくれる方々だなと思う。



「でも……本当に、良かったです……リースさんやリムさんが無事で……。」

ほっとしたし、安心出来た。ほんの少ししか一緒に居られなかったけど、顔見知りっていうのは、本当にありがたいのだなと改めて思えた。

「心配どうもありがと。……美空、私達が誰だか本当に覚えてるのね?」

「? ……え、はい、忘れる訳ないじゃないですか。」

「やっぱりねえ。アナタには、私達の小手先の技なんて通用しなかった、という訳ねえ。」

「……?」

「ああ、大丈夫よお、今からリムが説明してくれるから。」

「リムさんが?」

と話を振られたリムは、居心地悪そうに下を向いて、もじもじしていたが、やがて顔を上げると言った。

「まずは謝るわ・・・美空、ゴメンなさい。」

リムは、頭をぺこりと下げ謝罪の言葉を口にしたのだ。

予想外で唐突の謝罪に、美空は困惑するばかりだった。

「えっ、えっ！？ どうしたんですかリムさん。」

「実はね、私は相手の思考をほんの少し、大雑把にだけど読む事が出来るの。読心術、って奴よ。でも問題はそこじゃないの、私は・・・。」

一旦、リムは言葉を切った。

今更であるが、声が、反響した声が何度も耳に入ってくる。

ここは、二人と遭遇した所から、山を二つ越えた先にあった木々の一本もない山、その山腹にでかでかと口を開けていた、洞窟の中である。

洞窟内とはいえ、明るさは外と大差ない。

足を踏み入れた瞬間に、壁につけられた松明たいまつが、一斉に火を灯し、洞窟の奥の奥までを照らした。

凄い仕組みだったなあ、あれ……。

「聞いている？」

「あつ、すいません。どうぞ。」

「私は、他人の記憶に干渉して一部消去や改ざんが出来るのよ。だから、美空にはいろいろ忘れてもらったし、いろいろと間違ってもらったの。」

「えっ！？ 読心術は大体分かってたけど、そんな能力まで！？ 予想外です。」

「ズレてるわよ、論点が。」

空気が、一気に緩む。リムの罪の意識をも吹き飛ばしかねない発言であった。

だが、美空効果はリムの表情を幾分かやわらげた。

「気にしないの？ 私はアナタの頭の中をいじくってたって意味  
なんだけど……。」

「ああ！……内容にもよります。」

「内容って……そうね、例えば青葉や黒斗の事だとか……ア  
ナタが、アナタの世界で見た魔族の記憶とかね。まあ、どうしてか  
思い出しちゃってるみたいだけど。」

「……ちょっと、許せないかもしれませぬ。特に黒くん関係は。」

「……そうね、アナタからすれば、嫌悪すべき行為かもしれな  
いわ。だけどね、黒斗からお願いされたのよ、記憶操作に関しては。」

「黒くんが？ あり得ませぬ！！！」

「即答したね。でも事実なのよ、それに……言いくいんだけ  
ど、アナタの為を思っただけじゃないの？」

「私の為を？ ……それは一体どういう……。」

「それについてはあくまで、アナタの記憶や黒斗の言い分からの推測でしかないんだけど・・・何を言われても驚かない自信ある？」

「・・・はい。」

「分かった、実はもしかしたら・・・。」

リムは、ある種の緊張を持って、語りだす。もしかしたら、美空は知るべきでは・・・思い出すべきではなかったのかもしれないのだ。

・

流れ行く、澄んだ水。小規模の川のへり、その間近のスペース、そこにテント群が乱立していた。

内、まばらに点在する、赤と白色の縞模様鮮やかなテントの中で、怪我人である四人は、仮設ベッドに寝かしつけられていた。

紅葉に忍、華夏に勇である。

そう、この目立つテントは、一応の救護所である。彼らは、二二二で傷を癒しているのだ。

傷自体は皆、深くはないから、すぐにでも作戦再開であろう。

「美空……どうなったんだろ。」

華夏が、不意に口を開いた。彼女は、このメンバーの中で唯一怪我一つないのだが、一応、ここに収容されている。

そんな彼女の声に、一つ飛ばして隣のベッドに寝転がる忍が、答えた。

「大丈夫、きっとコトノハがうまくやってくれるぞ。」

と。

だが、そう発言した本人は半信半疑……いや、それどころか二信八疑くらいだった。

それはそうだ、美空の圧倒的過ぎる力を、この目でしかと見てしまっている。

コトノハは確かに高い戦闘能力を持っているが……それでも足りないのではないか？

他に百以上の奴らも一緒だったが、皆殺しとかいう事も、あの状態の美空ならばやりかねないし。

「止めるよ姉ちゃん、忍さん。敵の話は。」

と、二人の会話に対し、勇が不快感もあらわに言った。

「ゆっ、勇、そんな・・・敵だなんて・・・。」

「華夏、勇の言う通りだ。アイツは既に最大の敵、私達を確実に殺しに来た最大の壁だ。・・・四人が帰ってない、一人が重体だぞうだぞ。」

華夏言葉を遮り、紅葉が言う。淡々と、昨日の出来事でも報告している風に。

「確かにそうだけどさ・・・美空、凄く怒ってた。何か事情が・・・。」

「アルフレッドは言っていたぞ、自分らは確かに美空と一緒に居た魔族を一体、倒したが、そもそもはあちらから仕掛けて来た、と。」

「・・・一緒に居た魔族？ そいつはもしかしたら、あの転校生

だったんじゃないか？」

「忍さん、転校生っていうのは？」

「勇はよく知らないんだっただか・・・俺達や美空が居なくなった日の朝、俺達のクラスに来た奴だよ。ほら、一緒に登校してた時、校門のトコで見慣れない奴がいたじゃないか。」

「ああ、アイツか。」

「で、そいつ・・・確か、黒斗とか言ったか・・・ともかく転校生は、美空と昔からの友達か何かだったらしい、それも相当に親密だな。で、実は転校生の正体、魔族だったんだよ。それで、何か性格変わった美空と一緒に姿を消したという訳さ。」

「成程、そいつを目の前で殺されたからブチギレたと。だから魔族をかばう様な事を言ってたと。」

「多分な。」

「だからどうだと？」



「……俺だって、この中の誰かが同じような目に合わされたら、  
分かんないって事だよ。」

「友達に刃を向けるまでになる、って事？」

「……分かんねえよ、そんなの。」

「美空、あなたは生みの親かもしれないの。この世界と、魔族の。」

リムは、言った。あまりに突拍子もない事を。

あまりに突然だったので、美空も、思わず無言のまま首をかしげるだけというリアクションしか取れない。

「えっと……一体、どういう事ですか、リムさん……。」

「もう一度言うよ？ この世界とか、私達含む魔族だとかは、全部アナタが作ったみたいなのよ。」

荒唐無稽、ぶっ飛んだ、現実味の一切ない話であった。

それはつまり、私がこの世界の・・・創造者って事になるのでは？

「そんなバカな・・・ある訳ないじゃないですか、第一、この世界は四万七千年前までは一つの世界で、二人組の子供がエンゲージで世界を分断・・・。」

「ねえ美空ちゃん、それは誰から聞いたの？」

「え？ えつと・・・ええ・・・誰だったかな？」

「アナタが以前に考えた設定じゃない。一つの世界が、エンゲージによって分断されて、ヒトだけの世界と魔族だけの世界が出来上がった。」

「えつ・・・ええと？」

「美空、アナタの頭の中にあつたのよ。世界を描くアナタの記憶が・・・今、見せてあげる。」

と、リムさんは私の頭・・・こめかみを、そっと手で掴むと、何やら呪文を唱え始めた。

しかし、そのスペルが一言、一言と進むたび、私は眠くなっている。少しずつ……少しずつ……。

・

日常、いつも通りの日々が、また今日もやって来る。

私は、そんな日々が好きでもなく、嫌いでもなかったが、少し物足りなくもあつた。

手を伸ばせば、何でも手に入る様になつたし、大きな争い事がある訳でもないこの世界で、私は求めていたかもしれないのだ。

冒険。

いつか本で読んだ、ドキドキワクワクする、そんな冒険を……。

えっとねえ、私が最強のヒロインでえ、すごい魔法を使う。

えっと、武器はおっきな剣でえ……。

今日は四月の四日だから、七日に、パートナーの男の子が現れる。

銀色の髪の毛の、カッコいい男の子・・・黒斗って名前の男の子。  
私を守ってくれる王子様。

二人が手をつないだら、エンゲージって力が発動して・・・。

魔族って敵がいて、この世界にいっぱいいて、人間を苦しめていて、昔のエンゲージ使いが世界を二つに分けた。

“あの日の話。”

美空、七歳。

私が、一人ぼっちで砂場で遊んでいた。

四月七日。

小学校の入学式を抜け出して、遊んでいたら、男の子が一人歩いて来て、遊ぼう、と言ってくれた。

近所の子じゃないし、見た事もない子、銀色の髪の男の子。

黒斗くんだと、一目で分かった。

私がパートナーとして考えた男の子だった。

あの日から、私は学校が終わると毎日、砂場に行った。

来た。

黒斗くんはいつも、同じ時間に現れて、私と遊んでくれた。

私が帰る前に、心配したお父さんやお母さんが迎えに来る前に、彼は帰って行った。

入学しても友達を作らなかった私の、たった一人の友達だったのだ。

「黒くんは、どこに住んでるの？」

黒くん、と呼び始めたのはこの頃からだ。

さて、彼はこの質問には断じて答えてはくれなかった。

他の事は答えてくれたのに……。

「ねえ、黒くんはどうして私と遊んでくれるの?」

「別に、そう見えたか?」

「あの、黒くんはあの黒くん? 私のお話……。」

「……それはどんな黒斗かは知らないが、似ているのなら、そうだろうな……。」

「ねえ、黒くん、私の事、好き?」

「なっ……何を急に、んな訳はないだろうが……嫌いじゃないが。」

「黒くんは、どこに住んでるの?」

「………すまない。」

「住まない？ お家がないって事？」

「いや、ごめんなさいの意味だ。だが・・・それも正しいのかもな。」

よく分からなかった。

一人ぼっちの帰り道、黒くんはどこからともなく現れて、一緒に帰ってくれた。

彼は隣町の小学校に通っているのかなと思っていた。

雨が降って来て、傘を忘れて濡れながら帰る私に、彼は傘をぶん投げてくれた。

体育の時だったか、一人余った私に、何故か、何処からか現れた黒くとコンビを組んで・・・地獄のスパルタを喰らった。

黒くんのお家の場所が知りたくて、後をつけて行った事もあったけど、絶対に見失った。まるで消えちゃったみたいだ。

そういえばその頃だったか、やけに両親や先生が心配してくれてた様な・・・。

「美空、黒くんってどんな子なんだい？」

「どこの子なの？」

「本当に、居る子なのかい？」

「誰か、他の子とも遊んでいるの？ 黒くんって子は。」

「よく考えて、美空、ほらっ、他の子と遊びなさい。」

「美空ちゃん、ほら、あの子達と遊ばないの？」

黒くんがいるから、平気。

黒くんがいるから、大丈夫。

黒くんと遊ぶの、黒くんと・・・黒くんと。

えっと、刀を使う子が居たり、弓を使う子が居たり・・・力を授



ける神様が居たりして、一緒に旅をするの。

青葉っていう強い敵がいて、武器は私と同じ武器を使ってる。

魔族にもいい人が居て、えっと・・・、ああ、このお話の、この双子の悪魔キャラクターにそっくりな二人が仲間になって・・・。

だが、突然に黒くんは居なくなった。

黒くんは、現れなくなったのだ。

どうして、どうして・・・？

私は、とても悲しかった。

大人は、ほつとした様な顔をしていた。

同時に、私のお話しも、そこで終わっていた。

確か、青葉が出てきて、黒くんがやられかけた頃に、お話は終わっていたのだ。

やがて中学生になった時である。再び、物語は再生された。

けれど、物語は迷走し、創造主の意図せぬ物語が作られている。

彼女の考えて、始めた世界が、彼女の手を離れてしまった。

そう、独り歩き。

歯車が狂ったまま、物語は動き出した……。

## 第十八話 お休み後の私

第十八話 お休み後の私

「・・・・・・・・・・!?!?」

私は、目を覚ました。

どうやら、催眠状態となっていたらしい。

最初に視界に入ったのはリースさんの顔であり、ついでリムさんの顔が写る。

私はどうやら、リースさんに膝枕してもらってるみたいだ。

「お目覚めみたいねえ・・・・・・・・どうだった美空ちゃん、少しは分かったんじゃないかしら。」

私は、最初完全につわの空で、リースさんが何を言ったのか、よく聞き取れなかった。



と、直後、リースが美空の視界より消失する。そして次の瞬間には、美空を背後から抱き抱えていた。

「なっ？ 何を……。」

「落ち着ける様に、身体と身体のスキンシップよお。私はこう見えても沢山の魔族の母親だからねえ。……美空ちゃん、アナタが私達をも生み出したにしろ、私達にはちゃんとした骨格があった。何かを参考に生み出された私達は、ストーリーにのまれる事かったし、むしろクリエイターを突き止めて記憶を操作し、どうにかしよう時まで考えてた訳よお。」

お母さんのいい匂い、とでもいうものなのだろうか、濃密で、でも柔らかな香りが、ふわりと漂って来る。

美空のたかぶった感情は、いとも簡単に鎮められてしまったのだ。

「気持ちには分かるけど、クールダウンよ美空ちゃん。アナタが何者かなんて分からない、知っているのはアナタ自身とアナタの親御さんだけじゃないかしら？ それよりも、今はこちらを優先して欲しいの……アナタが魔族の世界を作った結果……ヒトの世界とつながって、元々ありもしなかった四万七千年前の出来事とやらが再現されようとしている、という事を。」

・・・それも結局は、私の招いた事だ。

ストーリーを放置した結果、ストーリーが独り歩きをした。

まるで不完全な部分を、埋めてゆく様に。

だから黒くんは、凶弾に倒れた。

私は、一体何をしたらよいのだろう。

リースさんの言う通りなら、魔族がいずれ現実の世界へと解き放たれ、溢れてしまう。

私の妄想と、現実とが混ざっていつている。

どうして私は・・・。

どうして私は、次の言葉を言えないのだろう。

どうして私は、黙ったままなのだろう。

どうして私が止めるしかないと、言えないのだろう。

私は、この物語の主人公であって、最強の力を持った者なのだ。

責任者であり、管理者……。

言い換えれば、もう私はこの物語を終了させる、完結させる義務があるのである。

ストーリーテラーの私だけだ。

放置し続ければ、終わらせる事すら出来なくなるかもしれない。

人が、魔族が入り交じって争う、そんな未来しかない。

暗く冷たい、冷えきった鉛色の空しかないのだ。

私には分かる、そうなってしまふ。

私の考えた、四万七千年前。

そして、極めつけは青葉の存在である。

青葉……そう、私と同等の力を持つ魔族のリーダー。

あれには、私の中の設定が、キチンと生きている。最初、私と黒くんを設定した時に、考えたラスボスだったのだ、彼女は。

以下、美空設定から抜粋。

名前 青葉

武器 私と同じく大剣使い、ダークエル・ナーフィ

目的 魔族を操り、人間の世界を滅ぼそうとする、実質上の魔族の頂点。

特記 コトノハと対なす存在、キサラギのというのがいる。コトノハが人類を率いて魔族を滅ぼすのが目的である様に、キサラギは魔族を率いて戦う、外見はコトノハに酷似した少女である。そんな彼女は、魔族側に味方した青葉に、エンゲージを授けた。だが、青葉の裏切りにより死亡、その身を取り込まれ、青葉と一体となっている。つまり、私と同じく、単身によるエンゲージを行使可能なのである。

こんな事なら、ラスボスなんて考えるんじゃないかった。

過去の私にも、自分だけが最強という設定を不自然に感じる頭はあったらしい。最後の敵は、思い切り強くしている。



だが、彼女さえ倒してしまえば、もしかしたら終わりが見えるかもしれない。

この、変なストーリーを。

「美空がそう思うんなら、それしかないのかもね。」

リムが言う。

そうか、彼女は私の考えている事が分かるんだ。

・・・もう、受け入れようよ。

私は妄想した、あまり良くない頭をフル回転させて生み出した世界が、現実問題として全てを危機へと向かわせているのなら、それを完結させるのだ。

私だけにしか出来ない。

この世界の、原作者である私だけにしか出来ないのだ。

「リースさん、リムさん、突然で悪いんですが、カッコいい事があります!!! これからやるのに必要な事なんです、私なりの気合い

の注入です。」

彼女らは返事をしなかった。かわりに、二人同じタイミングでこくりと頷く。

私は、宣言する。

お話を意識した言葉を。 お話の為の言葉を。

「私はこの世界を、この手で完結させます。私が何もしないという事は、世界の潰し合いを滅ぼし合いを生み続けるという事。私は幸いながら主人公であり、強力な力を持ったお姫様です。ならば、私のやるべき事は一つ、ラスボスを倒し、この世界を完結させるのです!!!」

どうかな・・・？

「終わりい？ なら早速・・・。」

「ちょっと待って下さい、やっぱり、もっと言わせて下さい!!! えーっと、実は私の剣に斬られた者は光になって、元の世界に元の生活に戻るのです。救済処置です。つまり、私が倒せば、それは私の妄想から抜け出せる、だからっ!!!」

「だからあ？」

「私は斬ります。倒します、一人残らず。彼らを助けるためなら、私は鬼にでも修羅にでも悪鬼にでもなりましょう。人斬りと化します、大量殺戮者になります。皆を、元の世界に戻してあげます！」

「それはいいんだけどねえ、この世界、消しちゃうのよねえ？」

「だったら、私達も消えちゃうって事？ せつかく生まれたのにい？」

「うっ……そっ、そうなっちゃいますよね、やっぱり……。」

「まっ、別にいいんだけどお、アナタが生み出した訳だし。」

「……そうか、消したらまた作ります、再構成します。アナタ達だけが、平和に生きていける世界を。」

「ダメだったら、リセットしてやり直せばいい……そんな考えしたらダメ、と言いたいところだけど、好きになさい、アナタはこの世界の住人の命を、その手に持っている訳なんだから。」

「……すいません。自分勝手、好き放題、とんでもない悪女、世界を滅ぼした悪魔……そんなモノで、私を語り継いで頂いても結構です。」

「冗談よお。じゃ、美空、次の世界を絶対作ってね、忘れちゃあよ。」

「はい!! では、私はもう、行きますね・・・もう迷いません。」

「行ってらっしゃーい。」

「じゃね、美空。」

「行ってきます!!」

私は、走りだした。

強引過ぎたと後悔もした。

手を振る二人には、もう会う事もないだろう、とそう思った。

生み出しておいて、こちらの都合で世界を壊す。

これでは、悪のラスボスそのものの考え方である。

最低の考え方である。

犠牲もやむなしという、本来ならば正義の味方に殴られてもおかしくない考え方である。

だが、私はどうやらこの世界を、再び作る気らしい。

確証も何もなしに、そう言った。

そう、言うしかなかった。

自分の中の、何やら神がかった力、それをあたりまえの様に行使して、命を弄ぶ。

力持つ者が行き着く、最終的な考えとは正にこれだろう。

私は、最低の事を考えて、最低の行いをして、最善だが最悪の結果を招こうとしている。

お姫様なんかじゃない。

神ならぬ、邪神だ。悪魔王、美空だ。

世界を、そこに住む人々を、虫ケラの様に消してしまうのだ。

こんな力を持ってしまったが、持ってしまったからこそ、こんな非人道的な答えに行き着いた。

自分に、そんな自分に嫌悪抱かぬ私がいる。

重ね重ね最悪だ。

最悪で最低な私は、だからこそ最低の行いを平然とやろう。

それをして世界を救い、多くの生み出したものを消そう。

犠牲を伴う勝利だ、犠牲を伴う決着だ。

勇者なら、本物の正義なら、一切の犠牲を出さずに皆を救うはずだ。

こんな手段しかない私は・・・やはり悪だ。

「リースさん、リムさん、魔族の皆さん、コトノハ、紅葉、忍、勇、華夏、青葉、エンゲージ使用者の皆さん、日常に生きる人達、そして・・・黒くん・・・ごめんなさい！！ 今、恐怖の大王は舞い降り、世界を丸一つ消し去ります。巻き込んで、本当にごめんなさい、全部、私が悪いんです、全部私のせいなんです、これから正しくてもダメな方法で世界を救います、本っ当に、ごめんなさいiiiiiiii！！」

洞窟を抜ける。

眼前には、明々と陽光によって輝く緑があった、茶があった、青があった。

（私は、これを滅ぼすのか・・・これを、全部・・・。）

背中から少し離れ、翼が開く。

私は、駆けて来た勢いそのままに、翼を広げ、宙を駆けた。

全ての者に対する脅威が、動き出した。

## 第十九話 嵐の前の私

### 第十九話 嵐の前の私

その日の朝・・・美空が飛び立つ二時間程前。

コトノハが、魔族討伐部隊の拠点であるテント群に戻って来たとのウワサが、広がっていた。

しかし、その内容といえばロクなものではない。

いわく、ボロボロであったとか、歩くのもやっとであったとか、血まみれであった等々・・・いずれにしたって、ピンピンしている訳ではない様だ。

そんなウワサは、すぐに休養中の四人の耳にも入る。

その頃には、ウワサの内容は大袈裟に改変されており、コトノハが生死の境を彷徨っている、という内容にまでなっていた。

四人、紅葉と忍と華夏と勇は、怪我の事など忘れてベッドから飛び起きると、すぐにコトノハが収容されているテントを探した。



そのテントの場所、それはすぐに分かった。

赤白の縞模様が特徴の、医療用のテント、その内の一つに、人だかりが出来ていたからである。

押し退けようにも無駄であった。皆が皆、我先にコトノハの元へと向かっている様だからだ。

だが直後、あれ程うるさかった周りが、一瞬にして、しん、と静まりかえる。

ざわざわとも、ひそひそとも、聞こえない。

「皆さん、ご心配をおかけしました。」

静寂を裂き、聞こえた声。

これは間違いなく、コトノハの声だ。

人混みの、頭と頭の隙間からよくよく見れば、テントの中からコトノハ本人が、ゆっくりと歩み出て来ていた。

一見して、何の変わりもない風で、背筋は必要以上に真っ直ぐ、ピンと伸び、相も変わらずの無表情。

何度見ても、無機質感の漂う少女だった。

「私は、見ての通り何のダメージもありません。大丈夫です、何の心配もありませんよ。・・・魔族殲滅作戦も、スケジュール変更は一切必要としません、今より一時間後、予定通りの出撃をいたしますので、各人準備を進めて頂きたい。」

その言葉で、全員が全員、一切の騒めきもなく持ち場へと帰ってゆく。改めてコトノハという存在の強大さを実感した瞬間だった。

こうして五分も経たない内に、テントの周りから人影は消える。四人を除いて。

その四人とは、決まっている、紅葉ら一行である。

華夏が真っ先に、コトノハを目がけ駆けて行った。

すると、コトノハの両隣にたたずんでいた女性が二人、コトノハの前に立ちはだかる。

彼女らは医療担当の、この討伐隊には珍しい大人の女性である。

「コトノ八様は、この後少し休まれる。お前達は早く持ち場へと戻るのだ・・・出発は一時間後である。」

「ちょっと待って下さい！！ コトノ八、聞きたい事があるの！！」

「止めないか！！ 早く持ち場へ・・・。」

「構いませんよ。丁度、そちらの四人と話をしようかと思っ  
ていましたし・・・むしろ、貴方達の方が下がって下さい。」

「しかし、コトノ八様・・・。」

「私に意見しますか？」

「・・・分かりました。我々は準備を進めます。」

医療担当の二人は、コトノ八に一礼をすると、そそくさと去っていった。

彼女らが見えなくなってから、コトノ八は四人を手招きし、縞模様  
のテントの中へと入って行く。

四人は互いに頷き合うと、遅れ、テントの中へ消える。

さてテントの中は、忍らが寝かされていたものと、ほぼ変わらない構成であった。

てつきり、コトノハ専用の最先端医療技術の粋を集めた設備でもあるのかと思っていたが……。

コトノハは直立したまま、皆に、どこかその辺りにでも座ってくれと言った。

忍は、カルテか何かが置かれている机の隅に。紅葉は、仮設のベッドに、勇はたまたま一つだけあったパイプイスに、華夏は紅葉とは別の仮設ベッドに、それぞれ腰を下ろす。

全員が腰を下ろしたところで、早速華夏がコトノハに言った。

「あのっ、コトノハ……美空はどうなったの？」

と。コトノハは、表情も声のトーンも変えず、あっさりと答えた。

「健在です。私は負けました。」

「・・・そう。」

何とも言えない、複雑な心境である。

美空が生きている、その事実だけは素直にほっとした。

だがそれは、魔族以上の脅威が生存しているという事であり、いつかまた戦わなければならないのかと、不安や恐怖を増大させる事実でもあった。

「皆さん、よく聞いて頂きたいのですが・・・私は、もう長くありません。」

「・・・えっ?」

コトノハの発言が、さらに大気を重く、冷ややかにしてしまった。

長くない? 長くないとは一体、どういう意味なのだろうか?

「コトノハ、それは、命が長くないって事なのか?」

忍が言う。あまりにも唐突な言葉だ、聞き返さずにはいられな

った。

「はい。保つてあと二、三日でしょう。私としたことが、致命傷を負ってしまいました。」

証拠です、と彼女は言う、おもむろに純白のワンピースを脱ぎ始めた。

忍と勇は、条件反射なのか、慌ててコトノハから目を逸らす。

「……コトノハ……それは……。」

紅葉の、狼狽した声が聞こえた。華夏は怯えきつているのか、言葉にならぬ、悲鳴の様な声で呻いていた。

そのあまりの様子に、男性陣は恐る恐る振り返る。

するとそこには、ワンピースを脱衣し、背中を向けるコトノハの姿があった。

あつたのだが……何というのだろうか……背中は無かったのだ。

「!!!？」

「うっ、ぶ……。」

忍は、そんなコトノハの異様な背中に目を離せなくなってしまい、勇は、込み上げる吐瀉物としゃぶつを堪えるのに必死だった。

本来、背中があるべきスペース、そこには、焼き焦げたのか薄茶色に変色した、骨格のみが存在していた。

皮や肉はどこにもない、えぐり取られた格好となっている。

そして、あの、見えているのは身体の前側の筋肉や肉なのだろうが、真っ黒に炭化しかかっていた。

「ご理解頂けたでしょうか、実の所、腕の一本を動かすにも相当に必死なのです。身体を前に倒そうものなら、起き上がれなくなりましょう、背筋、ありませんから。」

だから……コトノハは背を常にピンと、伸ばしていたのだ。

だからコトノハは、直立不動のままなのだ。

「どうして……どうしてそんなになってまで平気ぶるのよ!?!?早く手当てしないと……アナタ、死んじゃったらどうするのよ

オ!？」

「・・・言ったでしょう、手遅れなのです。どうあがこうが、二、三日の命なのです。私が消えてしまえば、エンゲージは消滅し、戦うすべは失われてしまう・・・つまりは、タイムリミットが出来てしまったのですよ・・・私の命尽きるまでという、タイムリミットが・・・。」

「手遅れ・・・か、ならば、その二、三日の間に私達は何をすればいいのだ?」

紅葉が言う。彼女は、感情を表情に出す方ではないため、一見し落ち着き払っている。だが内心は、気が気でないのだ。

「魔族を統率するリーダーを倒します。その者の名はキサラギ・・・私が、人類を導き魔族を倒すのを目的としている様に、キサラギは魔族を率いてヒトの殲滅を目論む者。あれさえ倒せれば、魔族達も力を失っていくでしょう。」

と、そこまで言うと、コトノハはこちらに向き直り、しかし・・・と、続ける。

「キサラギは強大です。私と同等か、それ以上の力を持っている・・・今の私よりはね。どうせ私が交戦した所で、勝てはしないでし



よう。断言します。ですから・・・今から私が、貴方達のエンゲージを最大まで開放いたします。貴方達全員の力を開放し合わせれば・・・キサラギとて互角以上に戦えるはずです。」

と、彼女は一旦言葉を切る。そして、四人を見渡した。

四人は、頭を垂れて、一言も発しはしなかった。だが、次第に一人、また一人と決意の目を開き顔を上げる。

その様子に、コトノハは初めて満足そうな・・・満ち足りた様な表情をした。自らの死を自覚するとヒトが変わるというが、その類であろうか。

「ありがとうございます。では、貴方達四名と私は、直接キサラギの元へと向かいます。丸一日を要すれば到着出来ます。その間、魔族の殲滅は他の者達に任せましょう、リーダーは選出済みですから・・・では、エンゲージを最終段階まで開放いたしますので、こちらへ・・・。」

まずは、紅葉、そして忍がコトノハの元へと歩み寄る。

「手を・・・それぞれの、つなぐ方の手を出して下さい。」

紅葉は左手を、忍は右手をそれぞれ差し出す。

「二つを並べて。そう、そうです。」

きちつと並べられた二つの手の甲、その二つを繋ぐ様に、コトノハの小さな手が横向きに重ねられる。

コトノハの手は、少しずつ、小規模の光をぼおっと放ち、熱を帯びてくる。

不思議と、心地よい熱であった。ぬるめの風呂位の熱さ、というよりは暖かさだ。

「しかしコトノハ、どうしてそんな重要な役目に、俺達を選んだんだ？」

この言葉は、忍が発したものである。

「・・・貴方達は知っています、圧倒的な実力の差を。美空が如何にしてあの様な力を入手したかは分かりませんが、キサラギも、ああいった規模の力の持ち主ですから・・・直接目にし、体験している分には最適と判断しました。」

やがて、光が止んだ。見た目にも、また内面的にも変化は感じられないが、手の甲に残る僅かな熱が、期待を持たせてくれた。

「ではカナ、ユウ、お願いします。」

コトノハに言われ、二人もまた歩み寄る。

さっき、紅葉と忍がした様に手を並べると、やはりコトノハは二つの手に自身の手を重ねた。

同様の発光現象が起こり、ゆっくりと、じんわりと暖まってゆく。

「コトノハ……どうしたら美空は止められるのかな？」

「……どうすれば、ですか……。私は、美空という人間をよく知りません、力づくで止めるのが不可能であるのなら、貴方達の方がよく分かるのではないでしょうか。どうすればよいのかは。」

華夏が、頷く。すると今度は、勇が口を開いた。

「コトノハ、俺の盾なんだけどさあ、エンゲージ武器。パワーアップしたらどうにかなるのか？ シールドからビームが出るとかトゲが出るとか、オマケで何か武器が付いてくるとかあ……！」

「盾は盾でしょう。防御しか出来ないと思いますが。」

「チクショーー!!」

光が止んだ。

千秋姉弟の場合、パワーアップしたという自覚が、ハッキリと現れた。

今までの、どんな時より身体が熱くなり、力が、溢れて来る様な感覚が身を包む。

今なら、誰にも負けそうにないとさえ感じた。(腕相撲とかで)

「開放は完了しましたよ。では、今後の事は暫定リーダーへと引き継ぎますので、私達は本隊と別行動をとるとしましょう。時間がありませんので。」

感情の乗らぬ調子で、コトノハは言う。しかし、今度のは違った、明らかに。感情こそ感じられはしないが、重みの加わった発言であったのだ。

「はい。」

「おうー!」

「うん!!」

「行くぜ!!」

四人は誓う。絶望の道だろうと、踏み出す事をだ。

コトノハは、強く頷いた。

## 第二十話 私クエスト 1

### 第二十話 私クエスト1

「ほらほらあ、急いで急いで！！ 今日中には魔界の三分の一を落とすんだから、トロトロしないで迅速に行動しろよお！！」

数百名の魔族討伐部隊、それを本日付けで指揮を取る様、コトノハより直接任命されたのは、今しがた怒鳴り声をあげた男、アンゲルであった。

彼は十七、という年齢には不釣り合いとも思える長身の男で、この部隊内のどこを歩いていようが、肩より上がはみ出してしまふ。

ヨーロッパ系であるらしく、金色の髪の毛にブルーの瞳、細長い体軀ではあるが、しっかりと筋肉のついた腕部を持つのが特徴である。

振る舞いは、いかにも権力者、という様子だ。

「そんなに急かしちゃダメじゃない。底辺の連中に合わせてあげるのも指揮官殿のつとめじゃなくて？」

アンゲルのエンゲージパートナー、ジェニファが言った。

アンゲルが美男であるとするならば、ジェニファはモデル級の美女であった。

ニットキャップからはみ出る、さらさらのやはり金髪をポニーテールにし、へそ出しのノースリーブという上着にショートパンツというスタイル。

長いまつ毛と高い鼻、厚めの唇が、本人いわくのチャームポイントらしい。

「フン、トロくさい連中が悪いんじゃないか。スケジュールに少しでも遅延が認められてしまったら、睨まれるのはこの僕だろう。全力で出来る事やってるつもりさ。」

「何を怯えてるんだか。それなら、あのコトノ八ってガキぶっ倒してさあ、アンタが最高責任者になればあ？」

「バカかね君は。確かにあのガキに従うのは癪ではあるが、エンゲージが使えるのはアイツのお陰だぞ。下手に関係を悪くすれば、力を切られる可能性があるじゃないか。」

この返答に、ジェニファはフン、と鼻を鳴らし、よそを向く。

一方のアンゲルは気にも止めず、再び声を張り上げて指揮官という立場に酔いしれる。

そんな調子だから当然といえば当然なのだが、異を唱え、反発する者がすぐに現れる。

二組の、見た目十二、三歳の少年少女らであった。

「おやおや、コトノハが任命した指揮官たる僕に逆らうのかい？ そんな事をしてても時間の無駄だと分からないあたり、物分かりの悪い有色人種らしいといえばらしいけど。」

成程、確かに彼らはアジア系で、黄色おうじやくに分類される者達である。

「うるさい白人野郎！！ 少し休ませてくれよつ、俺のパートナーは魔族にやられて足を悪くしてるんだ！！」

と、少年は肩を貸している少女を示し、言った。

彼女は、太ももと足首に包帯を巻いていて、ヨロヨロと頼りなげに歩いていた。

だが、そんな二人を見下ろしながら、アンゲルは吐き捨てる。



「休みたければ休めばいいじゃないかね。ただし、戦列を乱す者を待つ程、僕達は暇ではない。置いていくよ、足手まといは。」

置いていく、と言われ、二人は顔を青くした。こんな、いつ魔族が群れをなし襲って来るのかも分からない世界に、置いてきぼりにされるのだ。

恐怖でしかない。

「テメエエエエ!! 訂正しやがれ!!」

アングルの発言を受け、もう一組、恐らくはこの二人と親しい者らであろう、が、手を繋ぐ。

エンゲージを使用したのだ。

繋がれた手と手が光を放ち、球状となって二人の空いた手へと移動。

型をなす、武器、エンゲージウエポン。

出刃包丁にも似たダガー、そしてごくごく普通のリボルバー拳銃である。

「やれやれ、随分と貧弱なエモノじゃないか。いいだろう、教育してあげるよ・・・ジエニファ。」

「はいはいっと、じゃ・・・エンゲージい!!」

今度は、彼らの側から光が放たれる。しかしそれは、少年らのものと比にならぬ強烈で濃密な光であり、それが止むと、光は二人の武器となっていた。

「フン・・・どうだい？」

アングルの手中に現れるは、一振りの剣である。

片刃の曲剣・・・それからは、圧倒的ともいえるオーラが立ち上っていた。

そしてジェニファのエンゲージウェポンは、一言で言えば槍・・・先端が三つ又に分かれる、フォークの様な形状をしている槍であった。

「そのオモチャと、僕らのエンゲージウェポン、“アスカロン”に“トライデント”・・・比べてみるかい？」

その迫力はオーラは極めて強く、少年らは正に蛇に睨まれたカエル状態であった事だろう。

「ぐっ、そオオオオ・・・。」

少年らのエンゲージウエポンがほどけ、光に戻り消滅する。戦ってもかなう訳がないと、瞬間的に察知出来てしまったのだ。

「分かればいいのさ。よかったよ、ムダな運動をせずに済んでさ。もう一度言うけど、休むのは勝手だ、だけど置いていくという事だよ。分かったかい？」

「・・・・・・・・。」

彼らは何の反論せず、アンゲルに背中を向けると、とぼとぼと歩き出し、列へと戻っていった。

その負け犬の背中に、アンゲルは満足を、そして自らの権力と実力の強大さにいささかの興奮を覚えた。

そう、自分がかねてより最強の呼び名高い戦士であり、コトノハの信頼を最もかわれている者なのだ、と。

その証拠に、コトノハも指揮官にこの僕を選んだのだ、いや、全くもって正し過ぎる人選だ。

「ねえ、本当によかったの？　なんか弱いものイジメみたいだっ

たけど……。」

「ふん、ジエニファ、らしくないな。弱者は地に這いつくばるのみなんだよ。僕は、その事をよく知っているから……。」

一瞬、アングルの顔に影が走る。忌々しさを込めた、憤怒の目であつた。

「まあ、いいわ……それよりも……。」

と、ジエニファがさりげなく話題を変えようかと切り出した、その時である。

何かが、大気を切り裂き飛来、頭上を通過したのは。

ゴツ、とジェット機を彷彿させる音、一瞬遅れて走る衝撃波。何名かがよろめいた。

そして数百の人間の存在する本隊列の中央に、超高速移動物体は墜落した。

地面が揺れる。

爆音に似た凄まじい音、多量の土砂を土煙を巻き上げて、何かは墜落した。

奇跡的に、誰一人巻き込まれてはいない様だが、何だ何だと辺りは騒然とし、隊列は大きく乱れた。当然だ。

皆の視線が、その土煙あがる一点に注がれた。

ジェニファも、もちろんアンゲルも、群がる者をすり抜け、真っ先に二人が墜落地点の間近に移動。

エンゲージウェポンをしっかりと構え、慎重に爆心を凝視する。

隕石の類ならば、迷惑この上ないが、魔族であるという可能性もある。

だが、高速で飛来したモノ・・・それは明らかにヒトの形であったと、一部の連中がしきりに口に行っているのが耳に入った。

ヒト・・・だというのか？ そんなバカな・・・。

土煙が大気の流れにより、じわじわと霧散してゆく。少しずつ、中央にシルエットが見えて来た。

間違いない、ヒト型の何かであった。

やがて完全に土煙が散った時、その正体に、アンゲルは我が目を疑った。

「おっ、女？」

そこに立っていたのは、一人の少女であった。

明らかに自分より年下の少女で・・・黒髪を風になびかせる、スクールの制服らしいものを身に付けた、黄色の肌の少女。

手中には、巨大な剣。彼女の背丈ほどもある、巨大な剣が握られていた。

（エンゲージウエポン？ と、いう事は少なくとも、敵ではないのか？）

そう、少女はエンゲージウエポンらしいものを所持している。つまりは、コトノハから力を授かったと解釈出来る。ならば、

「おい、お前・・・派手な登場、ご苦労様。僕はコトノハから直接、指揮を任されているエンゲルという者だ。君の実力は相当なもの見受けるが、今からは僕の指揮下に・・・。」

と、早速エンゲルが権力をしめそうとした時である。

突然、眼前の少女、美空は彼の言葉を遮り、叫んだ。

「皆さん、皆さんにお伝えします！！ 私・・・いや我は、

全てを滅ぼす破壊の王にして、全てを喰らう大食王なり。我は、この世界に蠢く、生きとし生ける者全てを、滅つする者なり！！我が名は美空・・・創造神美空なり！！”以上、終わり。”

「はあっ?」

アンゲルが今、リアクションに困っている様に、ここに居る全員、少なくとも声のとどく範囲に居た者達は、口を開き、ただポカンとするだけだ。

あ、頭のネジ一本どころか、重要なパーツでも外れてんじゃないのか、この女はあ!?

「では、名乗りも終わつたし・・・今から私は行動に移ります。B・O・D・・・」

美空は、そう呟くと、左手を前方へとかざす。

その手中には、未知の光が収束し始めていた。

その様子に、アンゲルは言い知れぬ危機を感じ、咄嗟に美空の正面から飛び退く。

「発射アアアア!!!」

その声と共に、美空の手の平から正面、一直線に金色の光が走る。  
ビーム砲の様な一撃。

アンゲルは、そしてジェニファはすんでの所で、それを避けた。

真横を通過する、圧倒的なエネルギーの乱流、ブラスト・オーバ  
ー・ドライブヴェンゲージ。

後方、三十名ばかりだったか・・・戦闘要員だけでなく、テント  
やら何やらを運搬する者達の一部を巻き込んで、通過するエネルギ  
ー波。

アンゲルは、恐る恐る振り返ってみる。すると・・・。

地に刻まれた、直線の溝。そして、前までそこに存在していたと  
いう形跡を一切消された人々。

骨すら残さず、消滅してしまっていた。

「なっ・・・ななっ・・・。」

「行きます、ごめんなさい。」



「て、敵襲う、敵襲だああ！！ た、対応急げええええ！！」

陣内でいくつもあがる、エンジン発生光。

美空は、背の翼を広げる。天より舞い降りた天使が如く、純白の翼を展開し、彼女は動いた。

直後、一人・・・上半と下半のパーツにキレイに分けられ、光となり消える。

「えっ・・・？」

その少年のパートナーの少女は、何が起きたのか分かりもしなかった。恐らくは、消滅した少年本人も同様であったのではなからうか。

それだけにとどまらない。二人、三人と次々に、身体のいずれかを切り裂かれ、一撃にて光と消える。

「B・O・D・・・」

上空に美空は現れた。

高速の、光速のトンネルを抜けて。

日輪をバツクに翼を広げるその姿は、正しく神そのものの様であった。

「拡散モード、発射ア！！」

手元の、球状に収束した光より、幾筋ものビームが放たれ、あちらこちらに降り注ぐ。

コトノハはE・B、“エンシエント・ブラスター”と呼称していた術である。

着弾するたび、ドーム状にエネルギーが広がり、それが引いた後にはクレーターの様になった地面が、ただ残るばかりだ。

だが、やられっぱなしではいられない。上空の美空に、攻撃が殺到したのだ。

飛び道具持つ者の攻撃である。弾丸が、ミサイルが、あげくはレーザーが飛来。

だが、全ての弾の交差点上にはもう、神の姿はない。

彼らにしてみれば、消え失せた。美空にしてみれば、移動して回避した。

そして彼らは今、光に包まれた、と自覚する。

またしてもB・O・D。

さらに数十の人数が消し飛んでしまい、もう本隊は壊滅といつてもあながち間違いでない状態となってしまうっていた。

三分の二が、もういなくなった。

アンゲルは、こんな化物一人に出会うくらいなら、魔族の大軍とやりあった方が幾分でも楽だったではないか、と思った。

そつと地面に降り立つ美空。最早、討伐隊のほぼ全員が戦意を根こそぎちぎり取られてしまっている。

「…………ごめんなさい、…………ごめんなさい…………ごめんなさい。私は、殺戮王だから、ごめんなさい。」

美空のこの呟きを、聞き取る事は不可能である。小声であるのも理由の一つだが、怒号、罵声に悲鳴によって掻き消されているのだ。

クリエイターの嘆きは、誰の耳にも入らない。

倒れ伏す、少年が居た。もういないパートナーを探す、少女が居た。なおもエンゲージウェポンを構える者達が居た。

そんな連中にも、美空は分け隔てなく、公平に消滅を与える。

剣が切り裂く、光が包む。

翼を広げたまま、次々と葬り去ってゆく姿にはムダがなく、美しいとさえ思える。まるで、討伐隊側が悪であるかの様な光景なのだ。

と、美空は足を止め、剣を構える。

正面に、これまでと違う者が二人、立っていたからだ。

「よくもオ・・・よくも僕のメンツを潰してくれたなあ！！ 許さん、許さんぞ、この“アスカロン”の鎧にしてくれる！！」

「止めてえアンゲル、この娘は普通じゃない！！」

「うるさいい！！ ジェニア、エンゲージを乱すなあ！！ コイツの行動を見ただろう、皆殺しだ、僕達を皆殺しにする気だ！！ やられる訳にはいかないんだよ、僕はコイツを倒して生き延びるろう、それしかないんだよオオ！！」

「・・・イヤッ、ダメよ、私達が勝てる訳があー!!」

「僕が負けてたまるかあー!!」

そんな二人をよそに、美空は思案している。

(アスカロン?・・・確かゲオルギウスの・・・?)

等と、である。

アンゲルは狂った様な叫びをあげ、美空へと突撃を敢行する。剣を片手に。

確かに、速かった。

魔族の連中より速い。

あの小屋の時、ナイフ片手に戦った黒くんにも匹敵する程はあるう。

だがそれも、今の美空にはスローモーションでしかなかった。

「うおあああああああ！！」

アスカロンに、光が灯る。神秘的な、月色の斬撃である。

だがそれは、美空には、かすりもしなかった。僅か横を逸れてゆく。

美空じゃない、大気を切り裂いてしまった。

そして直後アンゲルは、アスカロンごと身体を真っ二つになった。

感覚がない。自覚がない。切られたという。

外した、方向転換しようにも、足がない。

えっ？

あれ？

アンゲルは光に還った。そしてジェニファも、己の武器の力を発揮する前に、美空に肉迫されていて、それで……。

悲鳴をあげるヒマすらなく、彼女も光となった。

そこからはもう、敵はいなかった。

一人残らず、美空は光に還えした。

気分のいいものではない。

しかし同時に、美空は気分良くもあつた。

自らがヒトに押し付けた苦難、それから解放したという事実があるからである。破壊王に殺戮王。

「そういえば、コトノハも華夏達もいない・・・と、いう事はもしかして直接・・・？」

彼女は再び、翼を広げる。すぐに、身体は宙に浮き、飛行、加速。

（私が、全部終わらせる・・・誰も、巻き込ませない。）

## 第二十一話 私クエスト 2

### 第二十一話 私クエスト2

魔族討伐部隊、本隊強襲と、ほぼ同時刻。

「ねえコトノハ、本当にこの方向でいいの？」

華夏が言う。

彼女は、不安からこう発言した訳であり、理由は分からなくもない。

今、華夏を含む五人が歩いているのは、暗い暗い森の中だからである。

鬱蒼と茂る木々、その枝葉が日光を遮り、見事な暗黒を生み出している。

だが、道なりは困難という訳ではない。

木々はアーチ状になって左右に均等に植えられていて、中央には整備された一本の獣道？ が、真っ直ぐに伸びているからだ。



しかも、相当に幅のある、それこそ車線が八つは取れそうな程広い。

迷子にならぬ様、配慮でもされているかの様な道だ。

「私は嘘は言いませんよ。私自身に残された時間もありませんしね。」

「あつ……う、疑ってゴメン……。」

華夏は、自身の発言を恥じ、後悔した。

そうだった……コトノハは、あと少ししか、その命が保たない。

嘘や冗談を言って彼女が得する事など、何一つないのだ。

「不安になる気持ちは分かりますよ、こつも暗くてはね。」

「……だが、コトノハ、この森は何だ？ 自然にこうなったというのは考えられないが。それに、何故キサラギとやらの居場所が分かる？」

「成程、紅葉の疑問はもつともですね。ならば……最後に語っ

ておくのも悪くはない・・・話しましょう、私が何者であり、何故、キサラギの居場所を知っているのかを。」

四人は歩きながら聞き、一人は地から足を、身体を浮かばせ直立のまま移動しながら、語る事にする。

「今の所の、この争いは四万七千年前からの続きであるという事を、以前私は語りましたよね。」

忍と紅葉は、こくりと頷く。

「ああ、それってエンゲージを使って魔族を全滅させたって奴だろ?」

「はい。真実をぼかして語った私の話です。正しくは全滅させたのではなく切り離した、という訳です。」

「切り離した・・・?」

ええ、とコトノハは言い、少々長くなりますがと前置きをしてから、相変わらずの無感動ボイスで語りだす。

「今から四万七千年前、世界は二つに分断されました。ヒトの世界と魔族の世界。これは、長く続いたヒトと魔族の戦争を終わらせる最終手段でありました。それを行ったのは、ヒトの神“ストラ”と魔族の神“クルガ”。二人は、互いの力を、手を繋ぐという方法から収束、増大させ放ち、世界の全てを光に包んだ。そしてヒトの神ストラはヒトの世界に、魔族の神クルガは魔族の世界へと住み、それぞれの星の住人らの行く末を、命ある限り眺め続けた・・・単刀直入に言いますと、私が二代目ストラであり、キサラギが二代目クルガとなります。」

エンゲージの始祖ともいえる光は、全世界をもの数秒で呑み込んだ。金色の光だった。

人々は、あまりの眩しさに目を閉じ・・・更に数秒後、光が引いて、目を開けた人々は眼前の状況に歓喜し、また愕然とした。

魔族は、消え失せた。

だが同時に、人々の文明の証もまた、消え失せていた。

ストラは、人々のおごりを戒めると共に、人類をより、良い方向へと導こうとした。

魔族の者々が、あまりの眩しさに眼を閉じ・・・更に数秒後、光が引いて、眼を開けた魔族らは、眼前の状況に、ただ歓喜した。

侵略者たるヒトは消え失せ、青々と広がる大自然、失われた風景が戻って来たからである。

クルガは、魔族らと共に、平穩に暮らそうとしていた。

.

だが、キサラギは・・・ここ数年の間、不穩な動きを見せ始めた。

度々、魔族の尖兵をヒトの世界へ送り込み始めたのだ。

何が目的なのかは分からない。

だがコトノハは、それを放置する訳にもいかず、対応を考えた。

それが、自らの力をヒトの子に分け与え、世界各地に現れる魔族を始末させる事だった。

そして魔族を目撃してしまった一般人や、建造物に対する被害はコトノハが対処した。

だから、翌日には人々は何事もなかったかの様に暮らせたのだ。

「……やがてキサラギは、ヒトの抹殺が目的だと宣言する訳ですが……目的は何なのか分からずじまいなのです。」

何ともムチャクチャな話であるが……不思議と説得力がある。一切の迷いなく淡々とコトノハが語っているせいもあるう。

「でもコトノハ、私と勇は、周りの皆と違って二、三日経っても美空や紅葉や魔族の事、覚えてたけど……。」

華夏が言う。

確かに学校中の皆は、屋上の一件の翌日には既に、美空や転入生の黒斗の事、紅葉や忍の事を知らないと言っていた。

そのせいで自分らは、コトノハに出会うまでの間、言い知れぬ恐怖に怯えていたのだ。

「たまたま、貴方達二人に関しては、対応が遅れたのです。」

「たまたま……ね。まあ、そういう事にしといてやるよ。」

勇があの時を思い出したのか、不機嫌面で言った。

「そして、何故キサラギの居場所を知っているのか・・・それこそ、ごく簡単な話で、私はストラと共に度々、この世界に遊びに来ていますから。昔はキサラギともよく遊んだものですよ・・・。」

「ん？ 別に仲が悪い訳じゃないのか、お前らつて。」

「言ったでしょう、あくまでそれは昔の話、五百年前の話です。」

五百年・・・それは彼女の年齢が五百以上であるという告白なのであるが、誰一人そこに触れはしなかった。

「・・・じゃあコトノハ・・・そんな仲のキサラギを、殺しちゃうの？」

友達、だったんだよね、五百年前は・・・と、華夏が言う。

「ええ、殺します・・・場合によっては。」

場合によっては・・・そこで華夏は気付いた。

コトノハは出来れば、というかやっぱりキサラギを、その手に掛けたくないのだと。

それはそうだろう、今は敵だったとしても、よく知っている者なのだ、友達だったのだ。

そんな相手を好き好んで攻撃するなど・・・出来るハズもないではないか。コトノハは、感情のないロボットじゃあないのだ。

分かり合う事は、簡単な様でとても難しいけれど、いつかは分かり合える時が来ると、信じながら・・・。

「華夏つち、魔族の大軍がおいでなすつたぞ。・・・一気にけるんだな、コトノハ？」

美空、私、アナタから逃げないよ。真っ正面から向き合って、絶対に・・・。

「ええ、今の貴方達ならば、あの程度・・・たかだか五百五十二体位、大丈夫です。」

アナタを、助ける。

「姉ちゃん、行くぞおおお！！！」

勇や紅葉や忍や、コトノハと一緒に。

「うん、エンゲージイイイ！！」

辺りを包む、エンゲージ発生光。

「俺らも行くぞ、紅葉イ！！」

「ああ、エンゲージ。」

濃密でいて、質量を伴う金色の光は津波となり、魔族らを薙払い、吹き飛ばす。

そこから数秒・・・各々のエンゲージウェポンが形を成す。

皆、同時に手に取った。

「ファイナルエンゲージ！！ モード、“ガンディーヴァ”！  
」！

華夏が、神弓をその手に収める。手にした時、それは青々と輝き、



同時に力が全身を駆けてゆく。

「ファイナルエンゲージイ！！ “ イージスシールドオオ ” ！！」

勇が、神盾を、その手中に収める。鏡の様に磨き上げられた表面が、敵らの姿を映し出し、妖しく輝いた。

「ファイナルエンゲージ、モード、“エンペルトウス”！！」

忍が、神拳をその手に装備する。途端に真っ赤に熱を帯び、やがて燃え上がる。全てを燃やし尽くす、灼熱の拳である。

「ファイナルエンゲージ、モード、アメノムラクモノツルギ天叢雲剣！！」

紅葉が神刀を、その手に所持する。すると、いなびかり稲光が突然発生、刀目がけ落下し、刀身は凄まじい紫電を走らせ、バチバチと叫びをあげる。

スウ・・・と、コトノハは静かに息を吸い込む。

肺がいつぱいになった所で、それを言葉と共に、一気に、

「GO FIGHT!!」

吐き出した。

「うおおおおお!!」

忍が、紅葉が、目にも止まらぬ速度で飛び出し、魔族らの中へと突っ込んで行く。

一足遅れ、勇もまた突撃。

華夏は、その場に留まり、空を目がけ一本の弓を射った。

空高くそれは舞い上がり、雲を突き破り更に上昇してゆく。

次に、空が金色に輝いたかと思うと、一気に、大量の弓矢が、文字通り雨の様に降り注いだ。

圧倒的過ぎる物量。超広範囲にわたる弾幕は、次々と魔族らを貫き、光に還す。

「おおおおお、プロミネンスウ、パニッシャアアアア!

「！」

忍が、降り注ぐ弓矢を回避しつつ、眼前の魔族一体へと、灼熱の拳を叩き込む。

ぐにやり、と熱で歪む魔族・・・と同時に獄炎が拳よりほとばしり、一直線上の、後方の魔族らを塵も残さずに焼き尽くした。

「チクシヨオオオオ、イージスウ、リフレクション！！」

上空より降り注ぐ弓矢、それは勇の構えるシールドに触れた瞬間、オレンジ色に発光し、真正面の魔族ら目がけて方向を変え、飛行してゆく。

その弓矢は、魔族らに突き刺さった瞬間破裂し、身体を内側から破壊した。

・・・正直、コンビネーション、と言ってしまえばよく聞こえるのだが、悪く言えば地味な事極まりなかった。

「斬・・・。」

一閃。

魔族が、周囲の木々が、紅葉を中心に、半径にして五十メートル

圏内の存在全てが、上半、下半に分かれ、消えてゆく。

一種の、衝撃波・・・ソニックブームの類であろう。

あまりに瞬間的なものであった為、ただ消滅した様にしか見えなかった。

とにかく一方的であり、圧倒的過ぎる内容であった。

時間にして、ものの数分。

コトノハが正確に数えた、五百五十二体はもう、一体も存在していなかった。

「すっ・・・いっ・・・すっすぎるよ、これ・・・。」

自分の手中の武器を眺め、華夏は言った。

皆、そう言いたいのは間違いはない。

「これなら・・・行ける!!!」

紅葉が、珍しく興奮気味に言う。

そっだ、彼女がそう感じている様に、もうこの世界には敵などいない、とさえ思えた。

「……もういいよ、盾でもお、盾サイコー!」

「よし、いよっし、どっどっ行くぞ、時間ねえからなあ!」

イケイケムードである。

今のままの勢いならば、一気に、この事態ですら解決出来そうなの……いや、出来ると確信にすら感じる。

「では……行きましょう、皆さん。」

コトノハが、平坦な声で言った。

コトノハ……さっきは、初めて叫んだのだろうか……しかも、GO FIGHT だなんて……。

でもよかった、コトノハも叫ぶ事をするんだと、分かったから。

あれからしばらく・・・どの位、どれだけの時間を歩いたかは分からないが、ようやく森は終わった。

周りの木々がキレイになくなり、一本道だけが残される。

木の代わりに、広い広い平地・・・だだっ広い草原が存在していた。

まだまだ歩くと、芝生はやがて花に変わる。

ムラサキ色に、白色の、名も知らない小さな花。

花畑の中心に伸びる、一本道。

ヒトが、立っていた。

一本道の、その上に、一人のヒトが立っていた。

その者は、こちらの五人を目に捉えると、自らの手中の武器を構えた。

大きな剣、大剣である。

「美空……。」

皆が言う様に、その人物とは美空であった。

彼女は、武器を構えたまま、言った。

「私は破壊王……殺戮王、美空……。」

と。

## 第二十二話 私クエスト 3

### 第二十二話 私クエスト3

咲き乱れる、名も知らぬ花達。

その花々を分ける様に、中心を通る獣道。

今、私、春野 美空の目の前には、かつての友達が居た。

忍に紅葉、華夏に勇・・・同じ学校に通っていた、友達である。

そして四人の後ろには少女コトノハ。ヒトを束ね、魔族らに戦いを挑む、ヒトの神様・・・という設定。

コトノハはヒトの子供にエンゲージを与え、地球を救おうとしている存在。

私と共に戦うハズだった存在。

今の状況がお話しの延長であったとするならば、フィクションであったとするならば、遅くはない。分かり合って、共闘して。

だが違う。



今や私の妄想の産物であるストーリーが、現実に溢れ、フィクションでないノンフィクションな地球の危機が迫りつつあるのだ。

この事態は、誰が何と言おうが私一人の責任である。

私が終わらせなければならぬのだ、このストーリーを。

皆はただ巻き込まれ、偽りの指令と使命に従って役を演じているだけなのだ。

だから私は、気の毒な彼女らを解き放つ。この私の、頭のなかの様な世界から。

「美空……そこをどいてくれ、私達には重要な役目がある。」

紅葉が言った。

彼女は既に、臨戦態勢に入っている。いつでも私は戦えるぞ、と。

だが私は、その場からピクリとも動かさずに言う。

「それは出来ないよ。私にも役目くらいはあるから。」

と。

そうだ、彼女らをここから先に通す訳にはいかない。

この先の、魔族王の城、恐らくはそこに居るであろう、青葉。

彼女は特殊である。

私が倒した者はこの世界から解放され、元の世界、すなわち現実へと帰る事が出来る。

だが、青葉・・・私と同じくエル・ナーフィを持つ者に倒されてしまったならば、どうなるか分からないのである。

もしかしたら、この世界で死んでしまいかもしれないのだ。

第一、現時点で紅葉達のレベルは相当なものだろうけど、多分、まだ青葉には届かない。

彼女らをみすみす死なせに行く訳にはいかないんだ。

「美空ア、お前の役目がどんなモンかは知らないけどよ、世界を救う事以上に大切な事なのかよ、それはあー!!」

忍が珍しく、口汚く言った。それだけ怒っているのだろう。

無理もないだろうな・・・。

「……………」

私はあえて答えない。いや事実、何と答えようが無駄だろうなと思っただからだ。

「コトノハはなあ、お前にやられてあと二日しか保たねえんだとよー！ 魔族倒せねえと人間は滅ぼされちまうんだ、誰が正しい事してるかなんて俺にははつきり分かんたよおー！！」

コトノハが死んでしまえば、エンゲージは使用不能となる。

そうなれば、魔族に対抗する手段が失われるのだ。幸いにも私は、コトノハからの供給でないから、大丈夫なのだけれど……。

「何とか言ええー！！」

「……無駄だ勇、美空は敵、敵なんだ。」

そう、紅葉、アナタ達からすれば、私は障害でしかない。

全ての者に対する脅威、破壊王殺戮王。それが今の私。

「美空っ、本当に私達、戦うしかないの!？」

華夏・・・もしかして、泣いてるの？

「何か理由があるんでしょ!？ そうよね!？ じゃなきゃ、あの美空がこんな事をする筈ないもの、溜め込んでないで言っつてよ、皆で一緒に解決しようよ、一人で苦しまないで!！」

違う・・・違うよ華夏。皆と一緒に居たらダメなのよ。これは、私だけの問題、アナタ達は本来、全くの無関係。

「私達が力を合わせれば、きっと・・・。」

「それは、できないよ華夏。ゴメン、何が何でもアナタ達は通せない。それだけ。」

「・・・美空・・・。」

私は、アナタ達を戦わせない。

どんな言葉も、どんな形も、もう届かせない。

私は破壊王だ、殺戮王だ、涙は流さない、心も持たない。

……お願いだから無慈悲でいて。罰は後でいくらでも受けるから……今、これからこの瞬間だけは、無慈悲でいて……!

「アナタ達は、ここで倒す……!」

私はそう宣言し、動いた。

このメンバーの中での、最脅威は、前回の戦いにおいて、私の肩を貫き、ダメージを与えてきた華夏であろう。

まずは彼女から……。

「させるかあ……!」

華夏へと向かう私の前に立ちはだかったのは、忍である。

速い。拳をもって、迎撃態勢。

構わない、押し切ってやる……!

剣を、横薙ぎに繰り出す。風を裂き、忍を捉える筈だった刃。

接触。

「!?!」

剣は、忍の身体を捉えない。

真っ向から繰り出された彼の拳に受け止められ、停止してしまっていた。

いや、それだけではない。少しずつだがエル・ナーフィが押し返されている!?!

力負け!?!

「ずあらあああ!?!」

飛ばされる・・・剣ごと押し返され、吹き飛ばされる私。

どうにか踏ん張り、身体を止める。

だが、直後、上空に紅葉の姿。既に彼女は追撃に入っている。

「えっ!?!」

振り下ろされる一撃、剣でブロック。

紅葉の武器は、軽量で細身の刀だというのに・・・エル・ナーフ  
イに走った衝撃は、大鎚か、重量剣か、とさえ思える程のものだっ  
た。

たったの一発で、両手が痺れる。

「奥義、雷刃!!」

体軀を沈める紅葉。獲物に飛び掛かる寸前の虎の様であった。

すぐさま、接近からの身体のバネを効かせた、雷纏う刃が繰り出  
される。

一撃でない。

二撃でない。

瞬間的に、数えきれない斬撃が走る。私の剣が幾度も幾度も叩い  
ては、衝撃を喰らわせてくる。

いくつめの衝撃だったか、ついに私の手からエル・ナーフイは弾  
かれ、光となり消え失せた。

「おオっ!!」

打撃、刀背打ち（みねうち）。

私はキレイに直撃を喰らい、またしても吹き飛ばされた。遙か、上空へ。

「美空、ごめんねえ！！ ガーンディーヴァー！！」

華夏が、空中の私目がけ弓矢を放つ。

音速を超え飛来する、神弓。

「くうっ、B・O・D！！」

私の手中に集まる光、それをすぐさま光線として放つ。ブラスト・オーバー・ドライヴエンジン。

しかし、華夏の弓矢は、B・O・Dを真つ二つに割りながら、私の元へと確実に飛来した。

「！？」

直、撃？



上空、美空の居たポイントの僅かに手前にて、爆発が起こる。

青色に弾け飛ぶ光、舞い上がる爆煙。

美空は死にはしない筈だ。

直前でガンディーヴァの弓矢を、わざと爆散させたのだ。

何も華夏だけでない、ここに居る全員が本気でなかった。

「美空……。」

華夏が不安げに声を洩らす。手を抜いたとはいえ、出力は絞って  
いなかった。果たして、彼女は無事なのだろうか、と。

丁度、彼女がそう思った時だ、目の前に美空は、ダンツ、と着地  
した。

彼女は一見し、衣服は少々ボロくなっではいたが、本人には特に  
ダメージはないらしい。

既に、手の平には例の光を集め、すぐに再度のB・O・Dを放つ  
てくる。

「俺に任せろオ、イー吉斯・リフレクション!!」

三人の前に立つ、勇。

シールドがみるみる内に巨大化し、自身は無論の事、残りのメンバー全員を覆う。

B・O・Dが、シールドに触れる。光線は、盾の表面部に、あるう事が停止。そして……。

「オオオ、行っけえええー!!」

反射。

B・O・Dが、そのまんまの出力をもって、美空へと返って来た。すんでの所で、自身の攻撃を回避。

ヨロヨロと、美空は体勢をどうにか整えた。

「美空、もう分かっただろう。私達はお前よりも強い。お前が何を考えているのかは知らないが、これ以上邪魔立てするのなら容赦しない。」

紅葉が言う。

確かに、美空は強いだろう。だけど、一人だ、一人で事を成すなど甘い考えだ。

何を気取っている、何様のつもりだ。

王を・・・神を気取る奴に、次などないのだ。

「降参して通してくれるんなら、もう何もしねえよ。こちらとしても、消耗は避けたいんだ、美空。」

その忍の言葉には、祈りにも似た何かが含まれていた。

まるで諭す様に、穏やかに言うのだ。

「美空・・・もう止めて、お願いだから・・・。」

彼女こそ、祈っていた。傷付いてゆく友人を見たくないというのもある、コトノハの使命を果たさなければという責任感もある。

だからこそ、美空に退いてほしい。

「見たる？ お前のビーム反射したの。もうお前の攻撃は通用しない・・・それでもヤルってのかよ!？」

勇が、喧嘩腰に言う。だがこれは彼なりに、抵抗を止めて欲しいという意思の表れだ。

だが、それでも美空は頑な（かたく）であった。

なまじ、この世界の意義、皆の目的の正体、全てを知っているが故、クリエーター故に、退く訳にはいかなかったのだ。

「……どかない、通さない。私のせいだから、私の責任だから、皆がこうして戦っているのも全部、私のせいだから……。」

「だからっ、どうしてそう分からず屋なんだ美空ア！！ 皆お前のせいで、確かに迷惑してるよ、訳分かんねえ、ダメならダメなりの理由を言え、理由を！！」

叫び声が虚しく響く。

これは、彼らの最終警告にも同じ言葉だったと思う。

対して、美空の答えは……。

「だから、私は・・・エンゲージセカンド、モード、エル・ナー  
FINE NEXT。」

で、あつた。

「何イ!？」

途端に、美空は光に包まれる。

エンゲージセカンド？

第二段階？

そんな・・・美空はあれでまだ、初期段階であつたとしても？

光は、やけにあっさりど、手っ取り早く引く。

ほんの一瞬の出来事だつた。

美空は、あの大剣を、持っていた。

本人や剣には特に変化は見られない。

だが、目に見えない部分、まがまがしい、気にも似た何かと表現出来るものは、より強く、より激しく、より強固となってしまうていた。

と、直後、美空は無言のまま剣を振り上げる。

来る！？

地面に、そのまま剣を、叩きつける様に振り下ろす彼女。

すると、地をなめる様なオレンジ色の衝撃波が、こちらへと向かって来る。

「チイイ、イージスウ・リフレクション！！」

再び、盾を巨大化、防御態勢の勇。

直後、衝撃。

あの、光線とは比にならぬ一撃であった。

反射はムリだっ、せめて防ぎきる！！

「ぐっ……うううオオオ!!」

弾けた、防げた。どうにか。

だが……。

一瞬の後、シールドは砕けた。

粉々に。

そして、シールドを貫いた何かが、勇の身体をも貫く。

それは、美空の拳であった。

「がつ!?!」

「勇!?!?!」

## 第二十三話 私クエスト 4

### 第二十三話 私クエスト4

「もうすぐ、やってくるよアイツが……。」

魔族の城……その最上階に座する少女、青葉は言った。

「美空がやってくる……真のエンゲージに目覚めたアイツが。」

誰に言う訳でなく、虚空を仰ぎ、彼女は呟く。

待ち焦がれた者が、もうすぐやってくる。

あるのは歓喜、あるのは狂喜。

世界でただ一人、私と同等の力持つ者。

「フフ、まだかなまだかな、早く来て早く来て、私のライバル私の宿敵、私の怨敵私の天敵……春野つ、美空あ。」



彼女は待っている。空高くそびえる、この城のてっぺんで。

ただ一人を、ただ一人だけを待っている。

.

「がつ……!?!?」

「勇!?!?」

それは華夏にとって、あまりに衝撃的な事だった。

弟の勇の盾が、友人であった美空の手によって破壊され、更には勇の身体をも拳が貫いた様に見えたからである。

勇が、華夏の足元まで、吹き飛ばされてきた。

「勇、しっかりして勇!?!?」

「つつ……お、俺は、大丈夫……だけど……。」

ああ、よかった・・・身体は貫ぬかれてはいない。美空の拳は、勇の腹部をかすめ通過していただけだった。

華夏の角度からでは、貫かれた風に見えただけなのだ。

「だけど・・・ファイナルエンゲージが、あんな簡単に・・・。」

勇ははつきりと、目に見えて震えていた。

それはそうだ、先程まで防ぐだけでなく、攻撃を跳ね返す余裕まであった盾が、拳で粉碎されてしまったのだから。

目を美空の側へと戻せば、既に忍、そして紅葉が交戦に入っている。

「ゆっ、勇、とりあえずもう一回エンゲージを・・・。」

「それが・・・ダメなんだ、俺、分かっちゃまった。もう、俺はエンゲージが使えねえ、沸き上がって来ないんだ!!」

「えっ・・・!?!」

そういえば、勇のエンゲージは消滅してしまっているのに、パー

トナーの私のエンゲージウエポンは消えていない……。

どういう事だろう？

片側の精神リンクが乱れたら、もう片側にも、少なからず影響はあるものだけど……。

「ぐあぁっ!!！」

と、直後、忍が地面に叩きつけられているのが見えた。

そうだった、今はそんな事を考えている場合じゃないんだ!!!

「ゴメン勇、私行くから!!！」

「ねっ、姉ちゃん!!！」

勇が、強い口調で言う。華夏は一瞬だけ足を止めたが、すぐに、振り向きもせずに駆けて行く。

美空の元へと。

「姉ちゃん止める、死んじまうぞオ！！ 美空には勝てない、無理だ、実力が違い過ぎる！！」

しかしもう、勇の言葉は姉に届いていなかった。

「ううう ああああ！！」

紅葉の斬撃が、神速にて繰り出される。

雷纏う、刀。

だが、先程までとは状況が違い過ぎていた。

どの一撃も、美空にはかすりもしなくなってしまうていたのだ。

前と、速度もキレも、何一つ変わらない筈なのに。

「くそオオオオ、秘技、雷光落雷！！」

秘技の名の通り、雷が、幾筋も敵を、すなわち美空を目がけ降り

注ぐ。

自然現象をも操る大技であったが……。

「……………」

美空は、回避すらしなかった。

いや、それどころか術の一つも使わない。その場に立ち尽くすのみ。

だが……。

「バカ、な……。」

雷そのものの刃は、美空に触れる事すら出来ず、ただ地面だけを派手に吹き飛ばす。

雷中を悠々と歩き、向かって来る彼女。

（紅葉……もう終わってる、終わらせるよ、先に元の世界へ……）

ようやく、駆け出した美空。

紅葉もまた、正面から美空目がけ駆けてゆく。

互いに、自らの武器を、同時に振り抜く。

「大体、何故私達が戦わなくてはならない!? 必要はないのだ、やはりお前は魔族らに魂を売り渡してしまったのだろう!?」

「そう考えてる時点で、戦う理由が出来ているよ……。」

刀と剣がぶつかり合い、交差する。

だが、力は、パワーは美空の方が遙かに上、踏張れずに、ずりずりと押されている。

「魔族も人も同じなの、良い個人が居れば、悪い個人だっている、一方的に魔族は悪と決め付けちゃダメなの。」

「そんな事分かってるよ!! でもなあ美空っ、両親を魔族に殺されたんだ、私はっ!!」

剣を振り抜くと、紅葉はいとも簡単に飛ばされる。

空中で一回転、態勢をどうにか整え着地。

流れる様に、再び攻撃。

「それでも魔族を憎むなと言うのか！！ いや、例え憎まずとも、全人類に死と破壊を撒き散らす連中を放置出来るのか、今私は個人的な感情を抜きにして戦っている！！」

武器同士が、接触しては火花を散らす。

一撃、次撃次撃。

正面からと思えば、上から下から左、秒とスキのない斬撃。

「お前は強い、強いよっ！！ もしかしたら私達四人よりもっ！！  
！ だけど、私達に刃を向けるお前の強さはどうだっ！？ 魔族は殺すぞ、私達のよく知る命も、全く知らない命も、何もかも全部、あの時みたいなの、感情持たぬ機械の様な眼で！！」

抜刀。

刀を鞘から抜く速度、その凄まじさを物語る、衝撃波、ソニックブームが、美空の左腕の薄皮一枚を切り裂く。

「私はもう、誰にも、私達のような気持ち味わって欲しくないんだ、それが今、私がこれを握りお前と対峙している理由だっ!!」  
お前の理由は、これよりも重いのか、大きいのか!? 答えて・・・  
答えるオオオオ!!」

更に、速度を増す斬撃。

火花が・・・顔が熱い。刃が欠け、破片となり、エンゲージ光となり、飛び散っているのだ。

だが、紅葉の刀は、強靱であった。欠けた部位はすぐにまた、次の光で補填される。

欠けては再生を繰り返す。

極めて高い精神力の為せる技だった。

「私は負けられないのだ、人類の存亡がかかっているから、この刃に乗っかっているから、だから美空・・・。」

これまでで、最も速く力の乗った一撃が、エル・ナーフィを打つ。

「!？」

ヒビが・・・エル・ナーフィにヒビが入る。



あり得ない事だった。

強度も性能も、粒子密度も、全てにおいてエル・ナーフィが勝っている筈なのに……。

「お前はここでえ!!」

次撃が、ヒビ部分を正確に打つ。

「消えるオオオオ!!」

ビシッ、ビシッ、と嫌な音。

そしてついに……エル・ナーフィは砕け散った。紅葉の、アメノムラ天叢雲剣もまた、光片となり、消え去る。クモノツルギ

「ううアアアアアア!!」

武器は消えた、だがまだ、紅葉には拳という武器がある。

咄嗟に来たそれに、美空は反応出来なかった。

頬を捉える一撃。



手を、差し伸べる忍。

その手を取り、立ち上がるうとする紅葉。

ようやく終わったかに思えた。

しかし・・・忍は見た。炎の中に揺らめく影を。

しまった、油断をしていた。

「紅葉いつ、逃げろ！！」

「えっ・・・？」

突き飛ばされた、忍にだ。彼の表情は、必死の形相とでも表現したのがいいのか、歪みきってしまっていた。

そして紅葉は知った。忍の行動の意味を。

エネルギーの乱流が、忍を飲み込んだ。

彼の顔も身体も、何もかもいっさいがっさいが、光の中へと消え失せる。

「エンゲージサード、モード、エル・ナーフィ、ドライ……。」

後には、何一つ残らない。かつて忍であつたものは、この世界からなくなった。

「えっ……ウ、ソ……忍？」

返答はない。ただ無音。

「忍……忍？」

答えはない。分かってしまつ、でも分かりたくない。絶望。

「し……。。。」

事実、ただ目の前には事実のみ。彼は、もう……。

「忍うううううううう!!」

（忍・・・ゴメンなさい。何も知らないアナタ達を巻き込んで、でも、一人目元の世界へと還す事が出来た。忍、最後までアナタは格好良かったよ・・・やっぱり、紅葉の王子様なんだね。）

最後に彼は、紅葉をかばい、その身にB・O・Dを受けた。

その姿は、紛れもない、忍という者を示す全てであったと思う。

さて、次は紅葉の番であった。彼女は既に、戦意を喪失してしまっている様であった。

ただ、忍の名を叫び続け、その場を動かこうとしない。

（紅葉・・・こんなにも嫌な思いをさせて、本当に申し訳ない。だけど、アナタは戻る。両親も、忍もちゃんと居る元の世界へ。そうしたら、復讐や憎悪を忘れて、幸せに生きて。）

美空の手の平に集まる光、B・O・D・E。

ブラスト・オーバー・ドライヴエンゲージ・エクステンド。

さて、それを放とうかというタイミングで、突如、弓矢が風を裂

き飛来する。

音速をも超えた、ガンディーヴァの弓矢。美空はそれを、なんなくエル・ナーフィで叩き落とす。

「美空っ、もう止めてえ！！ どうして手にかかる必要があるのよおー！！」

「華夏……。」

「アナタはもう、美空じゃない！！ 美空の形をした悪魔だ、美空はこんな事をして、平然としている訳がない！！ 美空じゃない、美空じゃない……。」

「華夏、私は……そうよ、アナタの知る美空じゃない。破壊王にして殺戮王、全ての者に対する脅威。」

「うう……ううああああー！！」

華夏が、次弾をその手に持つ。

これこそが、弓の弱点。どれだけ威力を強化されようと、弓故に生じるスキがある。

弓矢を取出し、つがえるという予備動作。

そのスキに美空は、紅葉の使用したのものにも似た、衝撃波を放った。

ガンディーヴァは、目に見えぬ刃によって、いとも簡単に破壊されたのだ。

そして、改めて紅葉を見定める。

「さようなら、紅葉。」

「止めっ……。」

B・O・D・Eの光が、紅葉を一瞬にして飲み込んだ。

消える。

紅葉の存在も、この世界から……。

次に、彼女は華夏を、その視野におさめる。

武器を失い、ただ怯えるだけの彼女に向かい、かつ、かつと歩いてゆく。

（華夏、学校生活に戻ったら、あの頃のまんまの明るい、いい子でいて。紅葉や忍とも仲良くやってて・・・私が、もしもそっちに戻る事が出来たら、また仲間に入れて欲しいけど・・・無理かな、こんなにやっちゃったら。）

「美空あああ、どうして、どうして紅葉や忍をを！！ 分からない、分からないよ、そうまでして何なの！？ 友達の命と引き換えにして、何をするつもりなのよ、命より重たいものなんかない！！ 人の命よりも重たいものなんてない！！」

美空は答えない。

彼女を、元の世界へと還せるのだ、躊躇いなど、罪悪など、持ちちゃダメなのだ。

剣を・・・エル・ナーフィドライを持つ手に、力がこもる。

ゆっくりと、それを頭上へ。華夏の声ももう、届きはしなかった。

「姉ちゃん！！」

と、二人の間に、勇が割って入る。

両の手を広げ、精一杯、姉をその身で隠した。



「勇！？ ダメ、逃げて!!！」

「んな事、出来るとでも思ってたのかあ!! 美空ああ、俺が居る限り、姉ちゃんには指一本触れさせねえ!! クソツタレ、来てみやがれ、お前の攻撃なんざ盾がなくても防いでやらああ!!！」

(勇・・・あつちに戻ったら、今みたいに華夏と仲良くね。言い合えばっかりしてちゃダメだよ・・・。)

美空は、剣を振り下ろした。

容易く、バターでも切るかの様に、勇を縦一閃に両断し、光へ還す。

そして華夏が悲鳴をあげるその前に、彼女も両断。やはり光となつて消え去る。

あつという間に、四人はここから排除されたのだった。

残るのは、コトノハだけだ。

彼女は、先程から一步も動かず、一言も発さず、ただ事の成り行きを傍観していた。直立不動のままである。

「美空・・・といいましたか・・・。アナタという人間が、少しばかり分かった様な気がします。」

全てを見透す、神を思わせる発言。しかし、それは皆を抹殺したという前提からなのか、それとも皆がどうなったのかを理解した上で発言なのかは、分からない。

「いずれにしろ、私達は負けました。私の残った力をほぼ全て注いだ彼女らが負けたのですから。ここに立っているのは、何の力もないただの、一人の女・・・。」

ただの一人の少女、ではなく女というあたり何だか不自然であるが、そういえば彼女は何千年と生きている設定であることを思い出し、一人納得する。

「美空、こうなった以上、仕方ありません。アナタに、少しでも人類を想う気持ちがあるのならば、アナタがキサラギを倒し、ヒトの世界を救って下さい。」

美空はやはり答えずに、コトノハの元へゆっくりと歩み寄って行く。

「そうしなければ、ヒトの文明は・・・。」

(コトノハ・・・大役に巻き込まれちゃった、女の子。ごめんね、本当ならアナタは、どこかで友達と遊んでいたんでしょうね・・・こんな、小さな子まで巻き込むお話しは、やはり早く終わらせなければならぬ。)

「美空、重ね重ねお願いします。どうか、私達に代わり世界を、ヒトの世界を救って頂けませんか？」

コトノハが、頭を下げて言った。

「元より、そのつもり・・・。」

私は、呟いた。

コトノハが、“えっ？”と洩らし、顔を上げる瞬間、美空はもう、コトノハの身体を両断していた。

コトノハは、光へと分解され、粒子の一粒一粒が風に乗る、消えていった。

これで、この世界にはもう残っていない。一人たりとも……いや、まだ居たか。

青葉、そしてキサラギ。この二人だけである。

この二人を倒し、私はいよいよ世界を壊す。

そして終わらせる……この、私クエストとでも呼ぶべきお話を。

美空は、背に翼を発生させ、はためかせ、飛行。

青葉の居る、魔族の城へと飛翔した。

発生した風に、いくらかの花が散った。

## 第二十四話 私クエスト 5

### 第二十四話 私クエスト5

魔族の城……どこにあるのかは、すぐに分かった。

その場所は、この世界における最果ての地、海上に存在する孤島、通称“だーくねすじま”（当時の私のネーミングセンスである。）。

その孤島の上空には、常に暗雲が渦を巻き、影をおとしている。

超高度より雲を見下ろし、私は決断する。急降下の開始だ。

暗雲を突き破り、島にかかる唯一の大橋、その内陸側に着地する。

轟音が、そして爆音に似た破碎音が辺りに響く。

さて、これ程派手に着地したのだ、大量のお出迎えを想像していたのだが……魔族どころか、生き物の一匹も現れない。

翼を収納し、周りを警戒しつつ、一步一步と踏み出してゆく。

分厚い雲は太陽光を完全に遮り、影のみを辺りに生む。

黒色の大地、黒色の大気、黒色の空。

何とも分かり易いラスボス住まう城は、モデルが存在する。

確か、“眠れる森の美女”の、いばらが覆っている、トゲトゲしい城だったかな？

いばらこそないが、無意味に突き出した尖塔の数々。

何か、真っ黒い、炭か何かで塗りたくられた様な色彩の外壁。

あー・・・本当に中途半端に出来ちゃってるなあ・・・。

どうにも私はラスボス周りから考えちゃってるからさあ、最後までストーリーを考えていなかったけど、設定だけはあるんだよね。

今、思い出したんだけど、魔族の戦闘タイプって、爪の長いクロタイプしかないんだよね。理由はなに、簡単な事で、明確に考えていたのがそいつだけだからだ。

おっと、雑念、雑念。

歩く。

確実に、城へと歩く。

警戒を緩めず、一歩一歩踏み出す。

分も経たぬうち、ウソの様に簡単に、城門へと辿り着けた。

私の警戒が、完全に無駄になった瞬間だ。

見上げる城門も黒一色。かろうじて、城本体との僅かな境目が見える。

炭とか言ったけど、近くでよく見るとクレヨンの黒で塗りつぶした様にも見える。

さて、扉を、城門を開けるとしよう。

あつと・・・開ける前に、一つだけ注意すべき事がある。

この、巨大な城門を、一気にだん、と開けてはならない。

今の私のパワーならば、木造のドアを開くが如く容易く開け放てる。

だが、それでは風情というものが著しく損なわれる。

ならばどうする？

そう、答えは、いかにも錆付き重そうに、ギギギツ、と音をたて  
ゆっくりと開くのだ。

これで雰囲気もバツチリ、ラストダンジョンに相応しいのだよ。

ギギギツ、とたてなくていい音をたて、城門はゆっくりと開く。

中は真っ暗であったが、門が開き切ると同時に、一斉に灯りが灯  
る。

両サイドの壁のろうそくに、一気に炎が灯ったのだ。

好きだなー、こっぴつ演出。

と、同時に、ゆらゆらと、多数の異形の影が揺らめく。

大量の魔族がそこに居た。私の考えた唯一の戦闘式クロータイプ  
が、そこいらにだ。

だが、身構えた私に対して、彼らは交戦の意志がまるでないよう  
だった。



皆、同時に壁ぎわへと移動し横一列に並んでみせると、うやうやしく頭を垂れる。

青葉の命令か、はたまた実力に差のあり過ぎる相手と戦うのを避けたいだけなのか……。

まあ、どちらでもいい。

私は、魔族の並ぶ姿を横目に、深紅の絨毯の上を歩み続ける。

彼ら？ はピクリとも動かず、無機質感を漂わせている。まるで、趣味の悪い城とかによくある悪魔石像みたいだ。

ずっと進んで行くと絨毯が途切れ、石造り（大理石かな？）の床を更に歩くと、階段が現れる。

階段は、一本の巨大な柱を中心に巻き付く様に螺旋状に伸びていて、遙か上は霞んで見えない。

それを、一段一段、登って行く。

……思い返せば、いろいろな事があつたなあ。

たった一週間位の冒険だったけど、私には何カ月にも、何年にも感じられている。

学校の屋上から始まった、私の物語。

ちよつとの人に会って、ちよつとだけの冒険をして・・・改めて思った事は、私にはお話しを作るセンスがないんだねという事だった。

しかし、それでも謎はいくつか残ってしまっている。その中でも最もたるものは、私は何者か、という事だ。

階段をトントンと登りながら、私は思索する。

ただ者ではないのだろう。

美空、春野 美空。

ハルノミソラとは誰、とかじゃなくて何者なのだろう。

ヒトというカテゴリーき当てはまるべき存在でない事は、自身の目にも明らかだったりする。

“クリエイター”、創造神と名乗った時もあったけど、その通りの可能性もある。

この世界、魔族は私が生み出したものだ。他の者達、コトノハを筆頭に人類側の人達は、その役に強引に当てはめられた、現実の人達。

何故、私が勝手に妄想していたモノに、皆がこれほど協力的なのか？

私の知らぬ間に、“私クエスト、スクールエンゲージ”は書籍化しベストセラー作品にでもなっていて、その熱狂的なファンが大掛かりな仕掛けをもって私のストーリーを再現し、壮大なドッキリに巻き込んでいるとかは考えられないだろうか？

いや、馬鹿らし過ぎる、あり得ないし。それに、どんだけ自意識過剰というやつなのだ、私は。

やはり私は、神にも近い何かなのだろうかねえ。

ヒトに拾われでもした神？　じゃあ、お父さんやお母さんは？

ただのヒトか、それとも神か・・・分からない。

はっ！？

もしかして夢オチ！？

全部私の夢でした、とかいうオチ！？　可能性ある！！

慌て、ほっぺたをつねる。

ああっ！？　いつ、痛い・・・。

夢才子説、消滅。

やっぱ私は、人智を超えた何か……。

まあ、どちらにしたって、やるべき事は変わらない。

この世界に残ったヒト、青葉、そしてキサラギの両名を倒し元の世界に還して、最後の仕上げに現実世界への干渉を始めた、この世界を滅ぼす。

これが私の、やるべき事、なすべき事、究極目的である。

……しかし、長いなあこの階段。

どれほど登ったかは知らないが、まだまだ上がある。

上を見ても下を見ても、暗黒と奈落が口を開けているのだ。

疲れはしないが、精神的には若干、辛いものがある。

しかも目を楽しませてくれるものもない。石、石、石階段。

「青葉は……この先に居るのだろうか？」

何となく、私は呟いてみた。本来ならば、仲間らとパーティらと交わす言葉である。

「分かってる。念には念を、でしょ。」

居るべきパーティのセリフを予想し妄想し脳内変換し……ははっ、虚しい。

「私達は絶対、世界を救うんだ！！」

おーっ、と……痛い人は止めておいて、どんどん行こうか。

ところで……飛んで一気に行けばいいじゃん、て言う人もいるのではなからうか？ それは、ダメである。

初期設定では、私は飛行能力などなかった。

皆と一緒に歩き、走り、冒険をしたかったというのもあったし、それに専用の乗り物（何か未知の技術で飛ぶ、小型の飛行艇みたいなやつ。）があったと思う。

まあとにかく、ここで飛ぶのはルール違反、野暮というものだろう。

私は歩く、意地でも歩く。かつかつかつ。

.....。

どれだけの時間、どれだけの高さまで歩んだのかは分からない。

だが、ようやく頭上に階段の終わりが見えた。

天の近くにまで登って来ている様な心地であった。

窓とかが一切ない道中だったから、外の景色が見えない。どの程度の高度か分からないのだ。

かつつ。

階段が終わる。ついに、いよいよ。

正面に見えるのは王の間か？ やはり深紅の絨毯がひかれ、その先に玉座らしいものがある。

RPGの基本、王のたたずむ玉座。

「ようやくのご到着か・・・待ってたよ、お前を。」

玉座に足を組み、頬杖をついて座る者が言った。

それは青葉。かつて私が紅葉と見間違えた、それ程によく似た少女であり、違いと言えば紅葉よりも若干人当たりの良さそうな柔らかい表情と、その名の通りの若葉色の髪の毛であるところ。

さて、彼女の服装は何故か私と同じ学校の制服を身に付けている。

あっ・・・。

こんな時に不謹慎なんだけど、彼女はスカートを折ってるか切り詰めてるかで丈を短くしている。

・・・青葉さん、そんなスカートで足を組んじゃダメでしょ。

パンツ・・・見えてますよ？

薄青色の、可愛いパンツが。

「さあ、始めようか。」

ダメだ、パンツに目が行ってしまう。ダメですよ、はしたない。これから最終決戦だつてのに。

「終わりの始まり、始まりの終わりを・・・とかさあ、何となく  
言ってみただけ私には似合わないわね・・・やっぱ難しいのはナシ。  
決着を着けましょう美空、これがラストバトル。」

ああ、立ち上がってくれた。よしよし、これで緊張感が持てる  
というもの。

「ヒトと魔族の因縁なんかは知ったこっちゃない、ついこの間ま  
では、私はただの女の子だったからね。」

一応、美空は形式にのっとり、言った。

「なら、アナタの戦う理由って何!？」

「・・・簡単な事だよ美空・・・自分一人だけが圧倒的な力を持  
っていればどうだ、これ程退屈な事はない。私は選ばれた、キサラ  
ギに、この私の中に居るキサラギにねえ。」

と、青葉は自身の胸部に手を当て、続ける。

「・・・パートナーを自身の中へと取り込む事で、真のエンゲイ



ジは完成する。美空、丁度アンタの身体の中に黒斗が居る様につ、心だけでない、身体までを一体とする、これこそが真の力！！」

真のエンゲージ。

本来の、手を繋ぎエンゲージを発動するやり方は、互いの間を粒子が行き来する際に、多少のエネルギー損失が生じる。

また、互いの感情に乱れがあれば、なお損失する。まあ、良くて元の五十パーセント程度。さらにそれを二つの武器に分ける。つまり最終的には二十五パーセント前後の出力しか得られない。

これ以上の数値を求めるのならば、双子に生まれ、小さい頃から同じ場所で同じ様に愛情受け育った者をオススメしよう。

もっと極端にいうならば、それに加え、感情の起伏が少ない、心を閉ざした様な者通しであるならば、更に優秀な人材となる。

だが・・・それでも八十前後が関の山である。

しかし、百パーセント、最大限の力を引き出すすべは存在するのだ。

なあと、簡単な事だ。エンゲージパートナーをエンゲージ粒子に変換し、体内に取り込んでしまえばいいのだよ。

そうすれば、エネルギーが行き来する際の損失は実質ゼロ、相手

に感情を合わせる必要もない。エネルギーを二で割る必要もなく、百のままを得られるのだ。

私が黒くんと一体になっている様に、青葉がキサラギと一体になっている様に・・・自分の中に、別の命を宿す。それこそが真のエンジンゲージ。

「真の力を持つ者が、ようやく私の前に現れた。私と同じレベルの力を持つ者がね。これで少しは退屈も紛れるわ・・・さア、私と戦いなさい美空・・・春野 美空ア!!!」

と、青葉は宣言すると、自らの手元に光を集める。

「青葉、私の為すべき事はただ一つ、アナタを倒す!!!」

美空も同じく、自らの手中に粒子を集める。

互いの光は、同様の型を成す。

身の丈近い大剣“エル・ナーフィ”、“ダークエル・ナーフィ。”

「魔族の神よ、私に力を。」

「黒くん、お願いね。」

互いの背に生まれる翼。

片や、天使が如き純白の翼。

片や、悪魔が如き黒色の翼。

「美空アアアア……。」

「青葉アアアア……。」

背に、粒子が収束してゆく、剣に光が灯ってゆく。

正面の倒すべき敵を見据え、エンゲージを最大限に練ってゆく。

稲光が、閃く。

それを合図に、どちらからともなく戦いは始まった。

さあ、最後の戦いだ、ラストバトルだ、始まりだ。どちらが制するのかわからない。それは運命しか知らぬ。

## 第二十五話 私クエスト 6

### 第二十五話 私クエスト6

互いの距離は、もう、ない。

交差する、大剣と大剣。

エル・ナーフィとダークエル・ナーフィが、ぶつかり合う。

つばせり合い・・・とはいかなかった。ほんの一瞬、ガンツ、と衝突した剣同士、刃と刃。

「ははハッ、弱い!!」

私の剣は跳ね退けられ、青葉の剣は振り抜かれる。

体勢を崩した間に、青葉は身体を一回転、遠心力を加えた次撃を繰り出す。

「弱いなあ、美空!!」

直撃する刃。

だが、それは私の身体を切り裂いたりはしない。

野球のバットの様な要領で、私をかつ飛ばした。

その鋭いスイングは、私というボールに凄まじいベクトルを与え、やがて壁へと、背中から衝突する。

「かつ!？」

何!？ 今、この一瞬の間に、私は壁に移動させられていて……!  
!？

「B・O・D、発射ア!!」

もう、追撃が目の前に迫っていた。速い……動作から判断から、  
全てが速い!!

「くつ……。」

防壁を……透明なガラス状の壁を展開する。もう、避けれない

から。

命中。

光が包む寸前、どうにか押し留めはしたが、その力に押されて・  
・少しづつ、背中が壁にめり込んでゆく。

ついに外へと、壁を突き破り弾き出された。

眼下には広大なっ……って、見てるヒマなんてない。翼、展開  
！！

ベクトルに対する芯をズラして……よし、B・O・Dを逸らし、  
姿勢を整える。

すぐに、魔族の城の方を見て……いや、もう眼下にゴマ粒程に  
しか見えない。

横には薄らと雲が見える。ああ、もうこんな所まで飛ばされたん  
だ。

しかし、さすがにラスボス、ハンパない。これまでみたいにいか  
ないよね、これは……。

「ヒイイイヤツホオオオオオ！！」

「!!」

しまった・・・雲を押し退け超高速で飛行、飛来して来るのは青葉。

咄嗟に私は横方に逃れる。一瞬前の私の位置を、青葉が通過。

キーン、という微かな音量。雲がバラバラに。

私も衝撃波を受け、その場に堪えようとするのに精一杯であった。

あら？　ここ、空中だから・・・踏ん張れるものがない!!

吹っ飛ばされる。

「クツ・・・ラスボスだからなあああ。」

多分、私の顔面はGによって凄い事になっているのではないだろうか。

それだけは乙女的にイヤだけでも。

「どうした美空、もっと速く動いてみせるよ。」



あつ、マズッ、私の行く先には、剣を振りかぶり待ち構える青葉。  
ちよっ、止まれ止まれ止まれええええ！！

「ぜえい！！」

無理でした……。

必死にもがいたものの気のきいた事は出来ず、直後、またしても私の身体を剣が打った。

今度は下向きのベクトルに翻弄される私。

ぎっ……ヤバッ……。

呼吸すら、ままならない。重力加速度も加わり、どんとどんとスピ  
ードが上がってゆく。

うあっ！！ ま、魔族の城がだんだん大きくなっていき、そして・  
。。。

「ひいやあああああ！！！！！！」

ゲキトツ！！

後頭部から城壁に衝突し、壁を突き破る。顔面を庇ったが故の悲劇だ。

更に、大理石？ の床を突き抜け、地盤の奥へ奥へ。多量の水の中へ出た所でようやく止まった。

何コレしょっぱい！！ 目が痛い、これって海水！？

ガホツ、いつ、息がっ……早く、浮上っ。

水の抵抗もあつてか、うまく上昇出来ない。(ちなみに、この時の私の顔は、さっきより凄い事になっているに違いない。)

どうにか水面まで辿り着き、すぐさま、大気へと飛び出す。

うっわ……やっぱり海だったんだ。

はつきりとは見えないが、広がる青、青。

はっ、青葉は？

メガネが濡れちゃってて良く見えないのだ。

それにしても、私ってタフだなと改めて思う。フツの人間なら、既に十回近くは死んでいるだろう。いくらエンジン発動中だからって異常じゃない？

等と考えながら、ふーっ、ふーっ、と息を吹き掛けレンズの水分を飛ばし、ようやくちゃんと見える様になった。

すると眼前には、海上にたたずむ青葉の姿がある。

「フン……少しは反撃してきてくれよ。一方的に攻撃するのも悪くはないが、齒ごたえが無さ過ぎるのもつまないからね。」

いや、そう言われても……反撃するスキがないんですけど、単純に。

「それじゃ、行くぞ。第二ラウンド開始だ。」

と、青葉は言い放つと、水上を駆けて来るといふ仙人みたいなマネをし、こちらに接近。

対し、私は……。

「エンゲージセカンド、モード、エル・ナーフィNEXT!!」

第二段階へエンゲージを強化する。今のままでは実力差があり過ぎるから。

二度目、ぶつかる刃。

だが今回は、私が剣を振り抜く番であった。

宙を舞うダークエル・ナーフィ。弾き飛ばす、相手の武器を。

やった、力では勝った、このまま一気に行く！！

「今度はこっちのっ！！」

「番だつて？」

力任せに一閃。横に薙ぐ。

だが、青葉はその渾身の一撃、パワーだけでない速度も強化された一撃を、体躯を沈め回避してみせると、ネコ科を思わせるしなやかな跳躍。

身体のパネを最大限に生かした飛び膝蹴りが叩き込まれる。

「ギヤアアア！！」

見事、キレイに直撃。

またまた私は吹き飛ばされると、海上をしばらく進んで行き、やがて陸地に。

何かをいくつか後頭部にぶつけ、ようやく止まる。

防壁があるとはいえ、タフとはいえ、いい加減頭を打ちすぎた。

くわんくわんするしフラフラしてきたしけしきがじゃっかんまわってきたよ……。

ところでここは……？

ん？ このイースター島のモアイ像に酷似した建造物は……？

ああ、思い出した！！ 冒険中のお楽しみ要素として、本編とは関係ない形でかなあーりあやふやに考えてたトコ、“ガラパゴスイースター大島”だ！！

好きだったんだよ、当時。イースターとかガラパゴスとかが！！

特に、ガラパゴスゾウガメとかイグアナとか！！

マジでペットにしたかった……お父さんやお母さんにムチャ言

ってたっけ……。

って、思い出にひたってる場合じゃないってば。正面、正面に注意を向ける。

青葉は来ない。だが、彼女は速い。いつ、どこから、どのようにして接近して来るか、全くもって予測出来ないのだ。

と、直撃、遠方、恐らくは海上から光の柱が立ち上る。ここから見えるのだ、長い……長い長い。

雲を突き抜けるあれは……以前、私が紅葉らに対し発動した大技、“I・B”インフィニティー・ブレード。

成層圏を突破した柱は、やがて倒れ始める。青葉が、振り下ろしたのだらう。

「わっ、ちよっ……。」

慌て飛び退く私。

その刹那、柱は海を、ガラパゴスイースター大島を両断し谷を作り出した。

分断された海は、すぐに元に戻るが……。

(.....)

私は口をパクパクさせ、切断面を・・・足から僅か二、三センチ先の谷を見る事しか出来なかった。

「mmMISそそ空アアアア!!!!」

わわっ、青葉来たっ!!!

私と対岸、両断されたガラパゴ以下略、反対側の陸地にドオオン、と着地。

不細工に転倒した私を見下ろし、彼女は言う。

「モノが違うのよ、美空。私の体内に居るのは、仮にも魔族の神キサラギだ。ヒトの神コトノハと対なす程の存在だな。だが、お前の体内に居るのは何だ？ 黒斗だろ、クロトっていうただの一体の魔族とヒトのハーフだ、そんなモノでは私と同等の力を得ているとは言えないだろうが。」

その通り、なのかもしれない。

私はキサラギと直接会っている訳ではないけれど、コトノハとは交戦経験がある。

あれと同等という位なのだから、相当なものだろう。当然だけど。黒くんには悪いけど・・・実力差は相当。真のエンゲージ同士ならば、単純に出力の差がモノを言うのだ。

何気に青葉は、いつの間にかエル・ナーFINEXTの黒い版を持っているし。

「なあア美空、お前は何故戦う?」

青葉が笑みを浮かべ、言う。・・・ボスっばいセリフだね。

「言ったところでどうせ理解出来ないよ、青葉には。」

更にボスっばいセリフで返答。すると青葉は、より笑みを強める。ヒトが本当に嬉しい時に浮かべる笑顔って・・・こんなのかな? 口の端を吊り上げ、目を細めて・・・。

「ハハはははは、言うじゃないか。でもね、私はお前程バカじゃないつもりだけど? どんくさくてダメでグズで・・・まあ、あの何も知らない時よりはだいぶマシみたいだけど。理解出来なくて結構結構、言うだけ言ってみるよ!」



「アナタ倒す、世界壊す、以上。満足？」

「はっ・・・アハハハハハハア、いいねえ、単純明快イ、ムツカシー事は抜きつて訳だ、大好きだよそーゆーのはさあ！！」

かなりハシヨったけど、結局のところの目的はそれに尽きるのだ。

なんか・・・青葉に気に入られた？

「好きだとも、愛してやってもいいくらいだあ！！」

告白まで！？ いやいや止めて止めて。

黒くん黒くん、助けて黒くん！！ 青葉、鼻息荒そうだから！！

「まあいいよ、要は私とアンタ、どっちが勝っても世界が滅ぶ。チップは世界そのもの、でっかいなあ・・・いろいろ燃えるなああ美空ア！！」

直後、青葉が動く。

剣を振り上げ、跳躍。空中から叩きつける要領で振り下ろす。

どうにか私は、回避する。

大地、島全体にヒビが、クラックが走り、ついに崩壊。ガラパ以下略はただの無数の足場と化した。

でも私は、足をつきその上を飛び移りつつ戦ったりはしない。

私には・・・私達には翼がある。

「再び空へと舞い上がる、私。」

いろんなポーズ、角度で飛ぶもんだから、視点が目まぐるしく変わり、一時的にどちらが上か下か、右か左かがあやふやになった。

だが不思議と三半規管には何の影響もないらしい。

「フン・・・E・B、発射ア！！」

E・B、エンシエント・ブラスターを青葉は両の手より放つ。

B・O・Dを拡散させ、追尾性、ホーミング機能を特化させた粒子ビーム攻撃である。

それが下から左右から、一斉に襲い掛かる。私は以前、あの細っちょろいビームの命中した箇所が、小規模ではあるがクレーターとなつたのを思い出す。

冗談じゃない!! 全身を意識して覆う防壁を作るには時間がかかるし……。

攻撃は私より僅かに速い、少しずつ追い付かれる。

ええい、仕方ない!!

「エンゲージサード、モード、エル・ナーフィドライ!!」

エンゲージを第三段階まで強化。途端、私は急加速しビームを今度は引き離しにかかる。

それでもまだ、追いつがる光線の帯の数々。

「おっ!?! そうか……。」

眼前に映る、緑豊かな山々。その内の一つの裏側へと滑り込む。

数秒の後、彼女の思惑通りに、E・Bは山腹へと突き刺さり、緑を燃やし地をえぐる。

だが貫通はして来ない。どうにか無力化に成功したのだなど、ほっと一息……。

んん？ 何かガリガリとかバリバリとか嫌な音がする様な・・・？

！？

私は、正面から異様な殺気を感じ、その場を早急に離脱。

直後の事だ、山を貫き青葉が現れる。何と化け物じみている事か  
！！

「シィヤアアアアア！！」

だが青葉はまだエンゲージの第二段階、うまくやればいけるはず。  
彼女の突撃を回避。スピードはやっぱりそれ程じゃない、余裕を  
もって回避出来た。

行くよっ！！

「B・O・D・E！！」

一撃特化の極太光線、ブラスト・オーバー・ドライヴエンゲージ・エクステンド。

それは見事に青葉の背を捉える。あのタイミングならば、防壁は間に合わない。

そこを追撃だ。

「ハアアアアアア！」

加速つ、もっと加速。

まっ、真っ直ぐに飛べない・・・凄まじいG、再び。

それでもっ、自身のB・O・D・Eを追い越して、青葉に追撃ををを！！

だが、青葉は笑っていた。

「!？」

「あハハハハハ、段階なんぞあるから、お前に希望を与えるんだよなっ、悪かった悪かった、そろそろお前の希望を摘み取るとしよつかあ、”ファイナルエンゲージ、モード、ダークエル・ナーフイJOKER!!!”」

光がっ……金色の光が青葉を包む。

ファ……ファイナル……？ マズイ、常に私の上に行く青葉に、ファイナルなんて出されたら……。

「絶望したか？」

背後で声がした。

私が振り返るその前に、私の身体は吹き飛ばされていた。痛みもなにもないのに、何で！？

「うあああああああ————！！！！！」

ヤバっ、速い速過ぎる！！ 次々に違う景色が現れては消える。

身体が軋む、悲鳴をあげる。

どこまでも……どこまでも飛んでいく。

止まらない、自力で止められない！！

乙女的最NG更新顔だろっね、今アアアア！！

陸、かと思えば海っ、しっ、しまっ、えーっなんか森。

こころ変わる眼下の様子。もっとゆっくりなら楽しめたらうに・  
・今は息をするだけで精一杯だ。

ん？ 何か居る、空に・・・あれは・・・あつ、青葉ア!?

「おかえり。」

せつ、世界を一周して戻ってきちゃった!? いつ・・・。

音速を超え、マツハにしていくらかも分からぬ速度で飛来する私  
を、青葉は拳で真下に、直角に叩き落とす。スピードの損失は全く  
と言っていい程なかった。

眼下には山岳。緑豊かな山がある。

ダメだ、あがく事すら出来やしない。

頂点、僅かに丸みを帯びた鋭角の頂上より私は突き破って行き、  
そのまま沈下を続ける。

山に、火口にも似た大穴を作り出してしまった様だ。

背中が・・・いや身体の周りが熱い。地熱なのだろうか、全身がじんわり熱い。

遙か上には、ちよこつと光が見える。どれだけ潜らせられたのだろうか？

身動きがとれない。地面に身体の半分が埋もれているし、力が入らないというのもある。

全身に、電気でも流れているのかというくらい、しびれていた。感覚が、麻痺してしまっている？

あっ・・・気付いた、血だ・・・。私の血だ。

いつの間にか、いろんな所から出血していた。

うっ・・・ああ・・・血が、ぬるっ、として暖かくて、イヤな匂い。

お話しでもゲームでも、私の妄想の産物でもない。今、この瞬間、そしてこれまでもこれからも全部、独り立ちした現実なのだ。

私より強い者がいる。私がダメージを負えば、血が流れるし怪我もする。



当然の事なのだが、私はついさっきまでそれを忘れていた。

いつものドジで、転ぶだけで、頭をガンと打つだけで、足の小指をタンスの角にぶつけるだけで、味わえる痛み。

そんなものさえ、忘れていたのかもしれない。

ここまで来て、私はようやく、死、というものを自覚する。

あの時、黒くんが目の前で死んでからずっと、自覚も感じられる事も出来なかったそれ……。

死ぬかもしれないという思いが、恐怖が、そして力の差からくる絶望が、溢れだし染め上げる。

ダメでグズでドジ……今の私は、それに戻りつつあったのかもしれない、普段の私に。本来の私に。

（美空は、こんな事をして平然としている訳がない！！）

華夏の言葉だ。

確かに、あの時の私は恐ろしく平静に友を攻撃していた。

だが、友を逃がす為だと自分に言い聞かせ、自分を説得し、戦っていたのだ。

罪悪も後悔もない・・・そんなのはウソ。

彼女らは彼女らなりに、世界を救う為戦おうとしていたのだ。

それを、私は無理矢理止めさせた。ゲームオーバーを強制した。本人らの意志を無視した。

力の差にものを言わせ、強引にだ。

(ああ・・・私は、本当に、正しい事をしたのだろうか・・・)

得てしてヒトは、こういった展開になってくると、弱気になってゆく。

弱くなる、強さとか意志とか目的とかでできた装甲を、ベリベリに剥がされていくのだ。

(私は迷わないって・・・迷わないって言ったばっかなのに・・・どうして?? どうしてこんなに、ごちゃごちゃして、モヤモヤして、ますます迷ってしまうの?)

もう、ぐちゃぐちゃだった。何もかもが。

絶対的強者というアドバンテージを失った、ただそれだけなのが・・・それを支えとし頼りきっていた美空の心には、風穴がいくつも開き、風が通り放題だった。

当然、そんな状態では、エンゲージを保てない。

消滅するエル・ナーフィ。真のエンゲージの欠点は、百かゼロかという事。滅多な事では解除されないが、混乱にも近い精神状態となれば全くのゼロとなる。再生も難しい。五十がない、ハーフがない。

そして・・・最大のリバウンド。痺れて、感覚がない、それはエンゲージ時の精神の状態を乱れさせない為の措置。

エンゲージが失われた事で、美空の全身、至る箇所が一斉に悲鳴をあげた。

「うあっ!?! うあああああああああああああ!!!」

たまたらず、叫ぶ。

堰を切ったように、痛みが内部から走る。声が意に反して吐き出される。

腕が、足が、身体が全てもげたら、どれだけ楽だった事だろう。

骨がバラバラにでもなっているのか、それとも……。

ともかく美空は、ものを考える暇すら与えられない、地獄の苦痛を味わう。

頭の中が真っ白になる程の、純粹な痛み。

「いたい、いたい痛いいたいよオオオオ!! 助けて、助けてよ、いたい痛い痛い!!」

すぐに、発狂も寸前に。気の狂いそうな激痛。しかし、発狂出来ない、狂えない。

身体の奥底から、いくらでも痛む、いくらでも……。

「イヤっ、イヤアアア、助けっ、助けて、助けて助けてよオオオオくっ……くろ、黒くううううん!!」

彼の名を呼ぶ。だが、それで和らいでくれる痛みではない。

奴らは一切の容赦なく、美空の全身を締めあげる。

「やだ・・・よ、いたいよ、イヤだ、いたい、いたい、やだよオオオオオオオオ！！！！！」

大粒の涙が、幾筋も、幾筋も流れる。

苦痛が、恐怖が。

痛みから逃れたい一心が・・・。

やだ・・・よ・・・。

あれ？

だが、それでもまだ、

痛みにあらがい、

事を成したいと願うなら、

終わらぬ闇を取り払い、

堕ちゆく身体をつなぎ止め、

光りさす、その下で、

私は対となろう。

それは偶然といえは偶然、だが、奇跡に他ならない。

“ミ……ソラ……。”

「!？」

誰!？

誰かの声がする。

耳に聞こえたんじゃない、心に直接響いた声。

内側から響いた声。

“私是对となるっ。”

まさか、まさか!?

“ミソラ”

「くっ、黒くん!？」

間違いじゃない、彼だ、彼の声だ、黒くんの……。

痛い、痛いつ、痛い、けど!!

“美空っ!!”

彼の声が、

「黒くん!！」

聞こえたのだ。

確かに、ハッキリと感じたのだ。

彼が居る、どこかに、彼が居る。

「美空っ!!」

美空の中から、金色の粒子が溢れ出す。

一粒一粒は小さいけれど、力強く光り、輝こうとする粒子であった。

その無数とも思える輝きは、一つの、ただ一つの形を成してゆく。

その、姿は……。

「黒くん!!」

そう、黒斗であった。彼であった。

銀色の髪の毛の、ツリ気味の目の、クール感漂う、右手が巨大なワンちゃんアームの、彼であったのだ。

もう痛くはなかった、どこも、ひとつも、痛くはなかった。



「美空アアアア!!」

「黒くん、黒くうううーん……ってキヤアアアアア、黒くん、服、服うううう!!」

本つ当に、こんな時に、なんなんだけれども、黒くんは何も身に付けてはいなかった。

生まれたまんまの格好だったのだ。

でも、少しは……いや、むしろ興味ある!!

キヤーとか言っついて、顔を両手で覆っておいて、実は指と指の隙間からしっかりと見ているのだ。

うん、遅しい!! 引き締まって、YES!! いろいろバンザイ!!

「やれやれ美空、相変わらずだな。しかし、内側から見ていたよ、相当に無茶をしゃがって……馬鹿だな。」

彼の腕が、私に触れる。暖かい、フサフサの腕だった。

「お前は、一人で戦っている訳じゃない。」

「えっ……。」

「出来るだけ、お前の運命を軽くしたかった。リムに聞いたよ、もしかしたらお前が、自分達の創造主じゃないかと。そして、俺はお前によって生み出されたモノじゃないかと。だから、お前には思っ出して欲しくなかった。ただの美空として生きて欲しかったのかもしれない……だけど、もうそんな事は言わない、お前は今、自らを知ろうとしている、自ら作り出した運命を砕こうとしている。だから、一人でやらせない、俺も一緒に行こう!! さあ、美空、手を!!」

と、彼はフサフサの手を差し出す。太い、ワンちゃんの腕だ。

「黒くん……うん、行こう!!」

躊躇いも、躊躇もない。私も差し出す、左手を。自分で言うのも  
なんだけど、細腕を。

ようやく、黒くんに会えた、再会出来た。

手が触れる。

もう、私は一人じゃない!!

「「エンゲージ!!」」

光が、二人を包んだ。

・

「さあて美空、まあまあ楽しかったよ……。」

眼下の山を満足そうに見下ろし、青葉は言った。

勝者の特権である。地に落ちた者を空高くから見下ろすのは。

「私を楽しませてくれた、心ばかりの礼だ、受け取って欲しいなあ。」

と、彼女は両の手を、胸の前にかざす。

「この、A・Bをなああ！！！」

A・B、アグナスティナ・ベリユアルド。

B・O・D系統の、最上級クラスの攻撃。これで、決めるつもりである。

これまでに無い程、重く密度の高い粒子が集まってゆく。

それは、金色の球。

六つの球が、彼女の周りを飛び回る。惑星の周りを回る衛星の様に。

「さあ・・・世界崩壊への始まりだ。終わりの始まりだ。この一撃でさようなら、春野 美空ア！！！」

青葉の周囲、一メートルの圏内に展開した球、その内の一つから一本のラインが走り、球と球を繋ぐと、また次の球からラインが、また次、また次。

全ての球がラインで繋がると、一つの円が出来上がる。

光が一瞬、ほとばしった。

それは全てを焼き尽くす審判の雷、終焉の焰。

「ハはハはははハハハハアアアア!!!」

「ううああああああ!!!」

「!?!」

それは、A・Bが山を飲み込もうかという時であった。

山岳を突き破り引き裂き、一筋の光がA・Bに衝突する。

「何イイイイ!?!」

力が拮抗どころか、謎の光はA・Bを掻き消し、天へと向かい伸び続ける。

「クッ!!!」

すんでの所で青葉は、それを避ける。

だが・・・何なのだ、あの光はっ！？ ファイナルエンゲージだぞ、それを・・・。

「青葉アア！！」

山を割り、現れる者。

それは美空・・・そして、あれは黒斗であった。

光の柱の中から姿現す彼女らは、まるで神・・・。

“私は対となるっ。”

「まだまだ、勝負はこれからっ！！」

第二十六話 私クエスト final

第二十六話 私クエストfinal

「まだまだ、勝負はこれからっ!!」

私は言った。青葉に、あのラスボスに対して。

黒くんも今は一緒だ、負ける要素がどこにある。

私は倒す、青葉を。

「・・・フン、これからだと？ もう勝負は決したよ。」

青葉は、吐き捨てる様に言い、更に続ける。

「美空、お前にはつくづく失望させられたよ。何せ、真のエンゲージを自ら手放したのだからな。」

青葉の言う真のエンゲージ、それは体内にパートナーを取り込み

発動する事で、百パーセントの力を持って戦う事が可能となる手段。

青葉の中には、キサラギという名前の魔族らの神が居る。私の中には黒くんが居た。まあ、彼はもう、私の隣に居るけれども。

「それでは精々、一人につき四十パーセントにも満たない出力だろうよ。単純に私はお前らより三倍以上強いんだ、ただの悪あがきに過ぎないんだよ、美空アアアア!!!」

・・・確かに、青葉の言う通りかもしれない。真のエンゲージを捨てたのは愚かな選択なのかもしれない、でも・・・。

ぎゅっ、と繋がれた互いの手と手、それが間違いじゃないと思えて仕方がない。

「刻んでやる、絶対的な絶望と死をなああ!!!」

青葉に粒子が集まってゆく。黒の翼もこの時ばかりは金色の粒子によってか、金に見える。

「美空っ、来るぞ。」

黒くんが言う。私は、うんと頷くと、繋がれた手を放した。



一瞬の後に、戦いは再開される。

もはやお馴染みとなった攻撃、粒子ビームB・O・D。

だが、ファイナルエンゲージ状態である彼女の攻撃は、たかがB・O・Dとはいえ桁外れの出力を誇る。

二人を逸れた砲撃は、眼下の海面に突き刺さり、海底まで覗ける穴を開けた。

「どこを見ているのかな？」

背後から声がする！？ あの時と同じだ、目にも止まらぬ速度で彼女は、私の背後に回り込んでいる。

やられる・・・！！

と、しかし、私を衝撃が襲う事はない。すぐさま振り返りながら距離を取って見てみれば、ダークエル・ナーフィを黒くんの短刀が受けとめていた。

「ほオオ・・・やるじゃないか、よくもまあそんなモノで受け止めた。」

「悪いが、美空をやらせる訳にはいかない。」

カツ、カツコいい！！ そのセリフいい、朝の目覚ましボイスにしたい！！

「だが非力！！」

しかし、すぐに黒くんは弾き飛ばされる。武器の質量や長さ、エネルギー、その辺りの差は歴然であるからだ。

でも彼は、空中にて姿勢を回復し手近な島へと綺麗に着地した。うーん、やっぱり黒くんは高い身体能力、ポテンシャルを有している様だ。

私の場合は、いくら肉体が強化されようとも身体の動かし方がよく分かっていないから、宝の持ち腐れみたいになる。

おっと、青葉に警戒だ。黒くんは大丈夫。

彼女が次、私の視界から消えたら、すぐにその場を移動しよう。

もっ目は離せないのだ。一切。

「無駄無駄無駄無駄ア、無駄な事なんだよ所詮はああ！！」

正面、青葉が突っ込んで来る。私も負けじと突撃。止まっている方が不利に決まっているのだ。

「美空ア、前にも言ったよなあ、どうして戦うのかって!!」

「それがどうしたのよっ!!」

金属音、交差する刃。

「いや何、私の理由を言っていなかったと思っただけなあ。」

二撃目が、エル・ナーフィを打つ。

「ぐっ……。」

「私には、何もなかったんだわ。どんな質問にも特になんか答える自信はあったわな。無い無い尽くして奴だよ……キサラギにエンゲージパートナーにされた時だって、戦う相手も守るべき世界も何も無い、何をしてもいいのかも分からない。キサラギも答えやしなかった!! だからだよ、戦いを煽って、私とまともに戦える相手が現れるのを待ってたのさあ!!」

「それはっ……。」

それは私のせいだった。明確な目的を描いていないせいなのだ。

キサラギに生きている設定とは、魔族を率いて戦う、という部分だけであるし、青葉というキャラクターの目的も考えていなかった。

ならば当然、彼女はそうなるだろう。ラスボスとして敵を駆逐するだけの、圧倒的な化物が誕生しても何の不思議もない。

自分とまともに戦える相手が欲しかった……だから私一人を……無理矢理、彼女なりに理由を作り出した。

「どうしてお前なんぞに目をつけたんだろうなあ、わざわざ私の人格のコピーまでお前の中に入れて、エンゲージ覚醒の手助けまでしてやってなあ。」

そうか……黒くんと初めてエンゲージを発動した時とか、青葉と初めての直接対決の時とかに、私の中にもう一人、誰かが居た様に感じていたのは青葉だったんだ……思い出した、あの不自然な感覚を。

「ようやくお前は黒斗を取り込み覚醒した、だが……今一步私に劣っている。どうせなら、コトノハを取り込んでくれてればなあ……！」

止む事の無い、青葉の斬撃。反撃の糸口が見いだせない。

「青葉アアアア！」

黒くんだ、彼は青葉の背後より攻撃を繰り返す。

「何よ。そんな大声をださなくてもいいじゃないか。」

彼の奇襲。しかしそれとてラスボス青葉は、紙一重で、余裕をもつて回避した。

だけど、私はようやく攻撃から抜け出せた。

「どうしたよ、お二人さん。さっきの光を出してみなよ。もっとも、今度は避けてやるけどなあ。」

「……もうアレは出ないよ。アレは登場の時だけだから……。」

なんかノリで出ちゃったヤツだから。

「それともおしまいなら、黒斗を殺してやるのか!? そうすれば今よりもマシになるんじゃないか!?」

それはっ・・・それだけはダメだ、絶対にダメだ、許さない。

「ダメか。なら、二人一緒にじっくりと消滅させてやるっ・・・そうすれば寂しくないだろお!?!」

悪役の極みなセリフ。

月並みでスタンダードなセリフ。

だがそれは、いざ言われてみれば、恐怖をじっくりと引き出される。掻き出し棒みたいなセリフであった。

現に私は、そのセリフに若干の恐れを覚えた。

次は何をされるのだろうか、と。防壁があるからといっても、ダメージを軽減出来るとはいつても、斬られたり叩かれたりするのに変わりはない。違うのは痛みとダメージだけ。

また、アレを味わう事になるのか・・・そして万が一にでもエンゲージが解除されたりしたら・・・今度こそ、身体がバラバラになるかもしれないのだ。

「美空。」

と、その時、私の震える手に、黒くんの手が優しく乗っかる。  
思わず、彼の顔を見た。

「大丈夫だ、恐れるな・・・エンゲージが乱れるだけだ。」

「でも・・・。」

「その不安が少しずつ増幅し邪魔をする・・・恐れるな、少しでもいいから楽しい事を思い出すんだ。思考をプラスに持って行くんだ。」

「えっ？ と、突然だね・・・。」

しかし楽しい事、プラス思考ねえ・・・。

これまで生きてきて楽しかった事、思い出せるかなあ・・・。こんな、何だかよく分からない存在だった私が・・・。

子供の頃の記憶ってさ、ほとんど残らないよね。

三歳以降だね、まともに覚えてるの。

幼稚園の頃だったろうか、先天的な運動センスゼロのスキル持つ私は、他の子に置いてきぼりにされていたんだよね。

絵本が、好きだったなあ。いろんな絵本、好きだった。

三匹子豚から七匹子山羊、浦島に桃に・・・豆の木イ！！ いやいや、楽しい思い出だよ、楽しかったって。保育士さん、困らせただけだね・・・。

それでもどうにか、皆のお遊戯についていこうと必死は必死だった・・・。

あれ？ 大して楽しくなくない？

次、次い！！

小学校、完つ全にスポーツがダメになった。

って、これネガティブだってば！！

そつだ、黒くん。



黒くんと出会って、初めて遊んだ。放課後の砂場で。

他に・・・やっぱりこの時もお話しが好きだったなあ。“私クエスト、スクールエンゲージ”、この時にちよつと手を付けていた。でも、黒くんがいなくなってから、私クエストも放り投げた。

で、確か紅葉や忍、華夏とかと仲良くなったのは、黒くんがいなくなりすぐの頃だったと思う。

そうそう、仲良くなれたのは私が原因だったんだよね。

完全に思い出したよ、あの飼育小屋のウサギ事件。私のドジが全開だったやつだ。

やっぱり、数有る小学校での思い出の中でも、それがトップクラスである。

そして中学。皆と一緒に仲良く過ごしていたら、突然に始まってしまった冒険の旅。

黒くんに再会した、あの日。そこからの、魔族大冒険。

人との関わりの少ない大冒険。本当はもっともつといるんな人と会って、いろんな困難を乗り越える大作だったはずなのに・・・。

そして、結局、黒くんは死んだ。でも復活して、今は私の隣に居る。

嬉しいなあ。

って、ほとんどプラスじゃないよね。もつといい事考えたり思い出したいんだけど、今の私の頭じゃ、これが限界なんだ。

ああ、中途半端だったなあ。でも、幾分かは安定した様だ。

安心して安定。

不安になれば不安だね、そうだよマイナス思考してちゃダメだ。

負けちゃ、ダメだ。

「さてと、それなら私の最大技、特別にもう一発見舞ってやろう。苦しむ間もなく昇天だ、約束は守ってやる。」

と、青葉は宣言した。既に彼女の周りには複数の光の玉が飛び回っている。

A・B、アグナスティナ・ベリユアルド。

B・O・D系統の最上級粒子砲撃。

「真のエンゲージを手放したお前だ、さっきの奇跡でも無い限りは消え行くだけだぞ？」

六つの球が、彼女のメートル範囲内に、一定距離を保ち点在。

ラインが走り、球と球を結んでゆく。

「美空ア、そして黒斗オ、死んで来おおおい！！」

一つの円となった法陣より、放たれる粒子砲撃。

向かって来る、迫って来る粒子の津波。放射光。

「黒くん！！」

「ああ！！」

金色の光を目の前にして、私はもう、目を閉じなかった。

無数の粒子の濁流が、私と黒くんを包む。

眩し過ぎる、そして熱い。沢山のスポットライトを押し当てられているみたいだった。

でも・・・全っ然、平気!!

私の彼の、身体は焼かれぬ!! これは確信だ。

・・・耐えた。耐えられた!! よっし、いよっし!!

光が通過した。二人は、傷一つつかなかつたのだ。

ミラクルが今、正に起こりつつあつた。ノーダメージがその証拠  
!!

これには、さすがの青葉も驚きを隠せていなかった。

「なっ・・・何を、何をしたお前らああ!!」

光を弾き、光の中より現れた、私と黒くん。今度は、こちらが恐れを与える番であつたのだ。

「バカな、真のエンゲージを捨てたお前がどうして・・・。」

来た、その言葉、待ってました。

「青葉・・・真のエンゲージってさ、そんなに凄い力なのかな？」

「なっ、何を言っている！！ それはお前も身を持って体験した  
だろうが！！」

更に青葉は、続ける。

「エンゲージを百まで引き出すものだ、最強にして唯一の力だ、  
何者にも負けない力だろうがああ！！」

そう、エネルギー損失を無くし、二分割する事もなく全てを安定  
して得る、それこそが真のエンゲージ。だけど・・・。

「ひとりぼっちの力だよ、それは。」

そう思った、感じた。

「何、だど・・・？」

「確かに、一人で全部の力を得られる、最強に近づくよ。でも、独りきりで頂点に立つ力じゃないの!? 一人で出来て、一人きりで強くて、誰とも分かち会えない、独りぼっちの力なの!!! 人を独りきりにする力なの!!!」

「!!!」

「現に私がそうだった。何を気取ってたのか、神でも気取ってたのかもしれないけど、自分から独りぼっちになった、自分で孤独を選んだ。一人で何もかもをやるうとした。だけど・・・黒くんと、彼と再会して分かったの・・・一人じゃダメだって、分かった!!!」

「何が悪い!? 一人になって何が!? 足手まといも、気を遣うウザイ連中も居ない、最高じゃないか!!! エンゲージが乱れる事だっつてない、何が悪いんだ!!!」

「そうとも、何が悪い!? 私の今までの人生、僅か十四年、その間に足手まといは星の数程居た。」

「そうだ、いつもいつも他人は、私の足を引っ張る事しか出来ないんだ!!!」

「あの飲んだくれクソ親父も、勝手にどっか行った母と妹も!!! 私がどれだけ苦しみ、どれだけ屈辱にまみれ生きてきたと思ってる!!!?」

生まれの差だよ、美空ア……。

お前の、その呑気な生き方に私がどれ程イラついていた事か。

恵まれてたんだよなあ……父親も母親も居て、愛されてて、お友達の居るガッコウに行けてさアア！！ 生きてるって言えてさアア！！

父親ア、ブツ刺した私と大違いだわ！！

血にイ、塗れた私と違ってる！！

懂れてた、ガッコの制服着てさアア！！

お前、ズタズタに引き裂く、やっぱり許せない。刺してやるよ、あのゴミクズと同じ様に！！

認めてやるよ、お前が光なら私は闇、お前が光なら私は影、お前が天なら私は地、だが……お前が正義だというのなら私も正義！！

皆の思い願う事が……総意が、この場合正義ではない！！

己こそ正義！！ 個人の正義を突き進む！！

そこだけは、お前も私も同じだと思ってやってもいい、お前も私も、総意に反した行為からの正義を行使している。そこは同じなのだ！！

「言えよっ、一人きりで何が悪いか！！ 何がデメリットなのかを！！！」

言ってみろよ、何かを！！

「・・・悪いけど、アナタもその力を捨てないと分からない、絶対にっ！！！」

「誤魔化してんじゃねえ！！ 何かと思えば、結局答えを用意してないんだろっ！！ とんだ時間稼ぎだっ、セコい奴め！！！」

その時から、青葉のダークエル・ナーフイが金色に輝く。だんだんと型を崩し、光の柱となって再構築されてゆく。

I・B、“インフィニティー・ブレード”

雲を突き砕き、なおも伸びてゆく光の剣。A・Bに次いでの大技。

「私はお前をブツた切る、この一撃をもってなあ！！！」



「それは私のセリフだ青葉ア!!」

私が、言葉を発したその直後に、ある出来事が起こる。

それは、この世界のまやかしの証明、それと同時に青葉の勝機が薄れているという事実の証明に他ならなかった。

BGM・・・明瞭にして勇壮、テンポの良い楽曲が、どこからともなく流れ始めた。

まるで、アニメーションの始まりを示すオープニングテーマソング。

「なっ、何だこの音楽はあ!?!」

まさかアニメ化!? とか私は心の中で叫んだ。そうだ、このタイミングでテーマソング、これは最後の攻防を示すのだろう。

決まるのだ。

「黒くん、私達もやるよ、あの技を!?!」

「ああつ、お前のやりたい様に行け!!」

黒くんのセリフが途切れた直後、ついにBGMに歌が入る。

いつもの朝の  
いつもの君の  
いつもの顔を  
見送ってた

おとなしめのリズムから挿入される歌声。あれつ、私の声じゃね  
!?

眠そうな君  
ダルそうな君  
でもそれだけで  
満足だった

誰が作詞作曲したんだろ、でもまあ、悪くない、いいよいいよっ  
このリズム!!

「くそオオオオ、いい加減にしろつ、全部黙らせてやる、死ねえ  
えええ!!」

あの日君はどこに行ってしまったの 私一人ここに座りた  
ずんできた

振り下ろされるI・B。だが、曲がサビを迎える。私はエル・ナ  
ーフィー一本で光の柱を受け止め叫ぶ!!

「I・B!!」

いつかあの空の向こうにまで アナタを探しに行くから  
例え暗闇の彼方にさえ アナタを迎えに行くから

「バカなっ、バカなああああ!! 何故私のI・Bがああ!!」

吸収されてゆく、美空のエル・ナーフィーに吸い込まれてゆく。

そして同時に、全身の力を吸い取られてゆく様な気分だ。事実、  
身体から力がだんだんと抜けてゆく。

「うあああああああああ!!」

力を吸われ、落下を始める青葉。

対照的に、美空と黒斗は上昇を始める。手を繋いだまま、凄まじ

い速度で。

二人は金色の光となり、今、雲を越え、大気の壁を越えて、その更にも、暗黒の空、宇宙空間にまで上昇した。

やがて生まれゆく心、叫ぶ アナタと歩み行くから

不思議だ。

眼下の惑星、地球にも似た青い惑星の上にはっきりと、魔族の一体が存在しているのが見えた。

青葉も、もちろん見える。力を失い、頭から地表へと落下していった。

私のエル・ナーフィは既に光の柱と化し、まだまだ伸びる。

もう全長の把握は不可能だ。

どこまででも、金色の柱は伸びてゆく。

それは一筋の希望くれた アナタを見つけ出すから

「黒くん……。」

「美空……。」

一度、見つめ合う二人。互いの手で握り合ったエル・ナーフィ。

どんなに重たくても、二人ならば振り下ろせる。

そう、あの星目がけ!!

好きなだけ この旅を続けて

二人でこの柱を振り下ろす、技名が必要だった。美空はもう、考えていたが。

「行くよ黒くん、二人で行う人生初、一度っきりの共同作業オ  
!!」

「……言わなきゃダメか……おめでとう、舞散る紙のオ花  
吹雪。」

「振り下ろすこの刃に幸あれと、今後の二人の将来込める!!」

「……皆の拍手にそなえつつ、力を込める互いのこの手。」

解き放つ 僕らだけのエンゲージ!!

「最終奥義、ケーキイイイ、入、刀オオオオオオ!!!!」

ケーキ入刀と書いて、ハッピーウエディングスペシャル番組と読んでくれアターアアアツク!!

「オオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

二人で、光の柱を振り下ろす。

長い、超々々々々々長ブレード。

やがて星に、到達する!!

(何なんだアレは……。)

青葉は、地表へと落下しながらも空の上を見上げていた。美空らの舞い上がった先を。

そこには、自分のものよりも遙かに巨大な光の剣があった。

それが今、この星目がけ振り下ろされ……いや、傾いてきている。

(何故、私が及ばなかった……最強の、真のエンゲージを手に入れたハズなのに……。)

青葉は問う、答えの返らぬ問いを。

(どうして、あんな安穩と生きている奴なんか……。)

“それはさ、私を解放したみたら分かるんじゃないかな？ 青葉。

”

問いの答え、それは内側から……自身の内側から響く。

(お前は……キサ……)

直後、柱が青葉の身を包み込んだ。

「あああああああああああ！！」

“フフ……そういう事が、魔族とは……”

星が分かれる……真つ二つに。魔族の星を両断した。

核を両断され、バランスが崩壊、無重力の侵食、惑星としての斥力、重量、質量の崩壊、結果、惑星は粉々に砕けて行き、すぐに宇宙を漂う無数のデブリと成り果てた。

魔族の星は消滅した。この私の手によって。

「……終わった様だな、美空……」

黒くんが私の隣で呟いた。



「うん……。」

とだけ、私は答える。

さっきまでのテンションはもう、どこかへと吹き飛んでいて、達成感にも似た何かでいっぱいになっている。

私の妄想の産物は、今、消え失せた。これで人類に対する脅威は排除されたのだ。

終わった……遂に、とんでもな世界は閉鎖されてゆくだろう。

「美空……ところで、これからお前はどつするつもりなんだ？」

黒くんが、言う。

「えっ、これから？ ……うー……。」

私はあちらを向いた。

真っ暗い……だけど、真っ暗い中にキラキラとちりばめられた、点の星々が煌めく。

どこまでも広がって、どこまでも続いて、どこまでも、どこまでも……黒と金色。

生命に満ち溢れる個体、あるいは死滅し最後の光を放つ個体、あるいは、生まれたばかりの名もない星。それらを眺め、力なく漂う美空は目をそっと閉じた。

まぶたを閉じてても、感じられる生命の輝き。私が生み出したものとは違う、生の美しさ。

「ゴメン、全く何も考えてないや。・・・ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ星の光を浴びながら、眠っていたいかな。そうしたなら・・・やる事をやらなくちゃいけないけど、今は・・・ちよつとだけ・・・眠っちゃっていいかな？」

「・・・ああ、お前がそうしたいなら。」

「うん。じゃあ、ちよつとだけお休みなさい。」

とはいっても、すぐには眠れなかった。

慣れない事だらけ。

だけど結局、私は眠る。しばらくの間、眠り続けちゃった訳で・・・

。

星々の中を、二人で漂いながら・・・。

そして、世界は・・・。

## 第二十七話 黒い私と私

第二十七話 黒い私と私

ピュピュピュッ。

朝、時刻六時三十分に目覚まし時計のアラーム音。

枕元に置かれたハズの時計を、私は手探りで探す。

えっと、ええ・・・おっ、あつたあつた、これだ。ほいっと。

OK、んじゃ、おやすみ・・・。

じゃない！！ そうだ、今日は学校があるんだった、久々の学校が。

私の部屋は二階なのっ、だから一階へと降り・・・って、メガネ忘れてたよ、うん。どつりでよく見えない訳だ。

さて、メガネよし、いざ一階へ。

たんたんたん、今日は何だか身体が軽い。

居間を抜けて台所へ。誰も居やしないのは、こちらでも同じか。でも、という事は、お皿の下には・・・やっぱり手紙が残されている。

さっと手に取り、読んでみた。

“朝ごはんはテーブルの上に用意したから、しっかり食べてね。私は今日も遅くなるからいつもの様をお願い。”

母さんより + 父さんより”

フツッ、プラス父さんよりとかつ!! 無理矢理だなあ。変わらないなあ・・・たまには早く帰ってくれないかなあ。

朝食、玉子焼き、ミートボールにトースト。美味しそう。

いただきます。……うまいうまい、おいしい、予想通り。

温かかったら尚よしだったけど……この際贅沢はなし。

ごちそうさま。

次は歯磨き、次、洗顔……ぎゃああああ、メガネ外してなかったあ！！ なんかこの日はメガネに関するトラブル多い……。

よしよしっ、身支度おっけー、ねぐせなんかも……ないね。

時間は……NO、七時三十分になってるじゃないか！！

ヤバい、逃げ逃げ。

見慣れたドアを開き、外に広がる空間へ、いざ！！

ようやくだ、待ちわびたよ、この日を！！

・

降り立った、久しぶりの私の町。帰って来れたのだ。

大変だったよね、休んでいる間に、かなり遠くに流されちゃったんだもの。

さてと、皆がきちんとこの世界でやれているのかを確認しておかないと。

歩いてみる、ちょっとばかり。

おや？ あれは……。

多分、小学生、それも低学年と思われる団体に遭遇する。あれだ、保護者同伴の登校なのだろう。

その中に……居た居た。

ツインテール、そしてポニーテールの一際目立つ少女達が。私はさりげなく会話に耳を傾けた。

「うわあああんキサラギが叩いたあああ！！」

「うるさいっ、コトノハの方が先に手をだしたんだからあああ  
！！」

あれま、ケンカ中、かな……。やっぱり双子だったんだね、二人は。

泣き出した二人に、母親らしい女性が近寄る。間違いなく、お母さんだ。

優しく頭を撫でてもらって……。すぐに二人は仲直り。

ランドセルがぴょんぴょんと弾みだす。

学校、頑張つてね。

いつも通っていた道を、反対方向目がけ歩く。勿論、いつもの目的地とは反対方向だ。

逆に向いて歩いて歩いてみたら、本当に景色が違って見える。それもまあ、たまにはいいかな。

時間的にはそろそろだけど……。おつと来た来た。そろそろと歩いて来る集団。知っているよ、私はアナタ達を。

「しっかしまあ、そろそろ中間テストかぁ……。勉強してるかよ？」



忍。

「別に……私は毎日、予習復習してる。」

紅葉。

「ハアア、いーよなあ、我が妹は賢くてさ。」

あつ、青葉ア！？

「まつ、紅葉にはかなわないだろうけど、青葉には負けない様にはやってるよん。」

華夏。

「別にいいじゃねーか、そんなん赤点じゃなけりゃあよ。」

勇。

ああ驚いた。一人、イレギュラーが居たよ！！

青葉が居るじゃん、あのラスボスが。……っていうかさ、紅葉と青葉、姉妹だったんだね。どうりで顔つきが似てる訳だよ。

彼女らは、楽しみに談笑し通学している。

うんうん、よかったよかった、元通りだね。くどい様だがイレギユラーが居るけれども。

私とすれ違う、皆。

違和感。あら？ 何だか皆が違う様な……。

えっ！？ ちょっと待てよ、皆何だか成長してない？

よくよく見たら、あの制服は近所の公立高校のものじゃないか！？

そう、今更ながらに気付いた。どういった経緯で、どういった過程で、どういった理由でかは知らないが、結果彼女らは高校生となっていたのだ。

皆、同じ高校に通っている様だが……どういつ事だこれは？

SFとかでたまに耳にする、ウラシマ効果とかいう奴か！？ 光

の速さに近づく程に時間の流れが遅くなるとかいうアレなのか、浦島太郎だって地上に戻ってみたら数百年経っていたのだからね。

彼女らは私を無視したとか、そういう訳ではなく、どちらかといえば知らない、という風であった。

えええ・・・私は確かあの空間で黒くんと三日間（だと思っ）過ごただけなのに・・・その間に皆は高校二年生、もしくは一年生になっていたというのか・・・。

い、いやっ、それでもおかしい。そういう事なら私は何年も行方不明となっていたはず。そんな者がひよこっ、と現れて無反応なんて事は・・・もっ、もしかして私の存在感なんてそんなものだった！？

と、その時であった。私はもっと恐ろしい現実を目の当たりにしてしまうのだ。

「皆あー、よかった、追い付けたあ。」

あれ？ この声は・・・。

「何だよ、ようやく来やがったか寝坊助め。」

高校生、忍が振り返りながら言った。私の後ろの方をみている。

私もつられて振り返ってみると、そこには……

「ゴメンゴメン、支度に手間取ってさあ。」

ここ、高校生バージョンの私がそこに居た。

今の私よりも、僅かに高い身長、メガネをかけておらず、コンタクトレンズにでもしているのだろうか。そして、最大の相違とは、髪型をショートカットにしているということだ。バツサリいつちやつてるのだ。

しっ、しかしどういう事だろう？ 私が同じ世界に、同じ時間軸に二人？

もしかして、ここは私の居た世界でなく、別世界では……？  
次元の壁を余計に越えてきてしまったのではないのか？

成程、それなら現状の説明はつく。それに私は光の速さに近づいた訳ではない、のんびりとあの空間をさまよっただけであるから、ウラシマ効果が起こるハズはないのだ。

パラレルワールド・・・そんな単語が頭をよぎる。でも・・・そうなのか？ パラレルにしては何もかもが、同一過ぎる気がしてならないのだが・・・。

「春野、美空ちゃんね？ はじめまして、私も春野 美空、よろしく。」

えっ・・・私？ 黒い、私？

「えっ、美空、だあれそそ・・・の・・・。」

あっ、あれ？ 高校生華夏が喋ってて、そしてそのポーズのまま固まっちゃったよ!？

ピクリとも動かなくなっていた・・・瞬きも、呼吸ですら活動を停止している。

そうだったのは華夏だけではない。忍も紅葉も勇も、いや、二人居る私を目にしたものが、活動を停止してゆく。やがて、時間そのものが停止していつていた。私達を中心に。

「ははあん、この世界にあり得ないものが存在しちゃって、世界が矛盾を観測し始めているのね。分かる？ 矛盾を認識したものが

らフリーズを始めたのよ。無理もないわ、美空が二人いるんだからねえ。」

高校生バージヨンの私は言った。こんな現象が起きているというのに、全く動じもしていない。すまし顔のままだ。

「あの・・・一体何が？」

「ぶっちゃけると、ここは間違いなくアナタの世界よ、美空ちゃん。けどね、アナタがここを留守にしてみたかったから乗っ取って書き替えちゃったのよ。だから、今はアナタの方が部外者。」

ええっ!?!? なに恐ろしい事を平気で言ってるの、この私!?!

でも、まあ状況は理解出来た。三日は三日だったのだ。

皆をこの世界に戻してから、私が戻るまでの三日の間に、この高校生の私はここにどうやってか侵入し、世界そのものを書き替えたらしい。

だから、中学生であるハズの私の友人達が高校生になっていた、されていた。

「困るんですが・・・そんな事されたら。」

「いいじゃないのよ別にい。この世界、気に入っちゃったから私  
が貰うの。アンタは・・・あれよ、どうせいくらでも世界とか作れ  
るんでしょ、そっち行きなさいそっち。」

なっ・・・何てふてぶてしい私だっ！！ クソツたれた大人にな  
っちゃってる、いい反面教師だ！！

「それが出来ない事は、アナタが私ならよく知ってるハズよ。全  
部、一からやらないといけない。それに、そんな事むやみやたらに  
出来ないよ。また、この現実世界にどんな影響が出るかも・・・。」

「あーあーあーうっさいうっさい、私は何でも出来るでしょ  
！？ んな些細な事、ブツブツ言っただんじゃないわよ。アンタ、私  
より年下じゃない、素直に言うこと聞きなさいよ！！」

ダメだ・・・ダメな人になってる。力を持ち過ぎると、結果人は  
堕ちていくらしいが、その典型の様だ。

「この世界は私の過ごした世界です！！ それに、私の所有物で  
もない、アナタや私一人がどうこうしていいモノじゃない！！」

「私なら分かるでしょ、私は神様なのよ！！」

「違う、ただの春野 美空でしかない!!」

そう、私は神様なんかじゃない、春野 美空だ、一人の人間なのだ。

「ふん、でもアナタは行使した、その力を。神様って自覚があるクセに、今更ただの人間ぶるんだ・・・違うでしょう、私にしか出来ない事がいくらかもあるじゃない。」

「え？」

「アナタのこの世界、普通でいいわね。・・・着いてきなさい、戦うにも、ここじゃあイヤでしょ？」

そう言うと、高校生版の真っ黒い制服を着ている私、通称黒美空はヒトとは思えない跳躍で手近なビルの屋上に着地、私に手招きをする。

行くしかないね・・・なら、

「黒くん、聞こえる？ エンゲージをお願い。」



“ん・・・どうした美空、トラブルか？”

私の内側から響いた声、それは黒くんこと黒斗のものだった。

さて、一度は実体化し私と共に戦ったんだけど・・・この世界に戻って来る時に再び粒子化し、私の中へと入っていった。

何故かって？ 本人いわく、本来、この世界に居るはずのない存在が認識される形をもって私達の世界に干渉した場合、何が起こるか分からないかららしい。

「うん、ちょっと・・・私が、私の世界をメチャクチャにしようとしてる。」

“何！？・・・よく、分からんのだが・・・。”

「えつと・・・高校生バージョンの黒い私がこの世界に来て・・・なんか世界を書き替えてる。」

“・・・お前が二人居て、お前じゃない方の美空がこの世界を都合の良く書き替えようとしている、という事か？”

「そう言う事みたい・・・だから、もう一回あの力をお願い。」

あの力・・・そう、孤独の力をもう一度。黒くんの都合もあって、ただのエンゲージはダメだからね。

“分かった、集中してくれ美空。”

「うん。」

真のエンゲージを発動する。私を包む金色の光、そしてその光が固まって形を成し、やがて私の背丈程もある剣を構成した。

エル・ナーフイ。

もう何度も握り振るって来た、私のエンゲージウエポン。

多分、これが最後・・・この武器、この力を使うのが。

「黒くん・・・？」

彼の名を呼んでみたが、もう返事はない。この力の発動中は、黒くんとの交信は不可能になるのかな？

完全に時間が停止する。今、この世界で動いているのはあの黒い

私と私、二人だけになった様だ。

まぎれもなく、孤独となった瞬間だ。

誰も、もう頼る事は出来ない。だけど・・・あの時、青葉の元へ向かう時とははつきり違う。

私はもう知っている、一人では何も出来やしないと。やっぱり皆の力は必要で、孤独は違うと。

それだけで、戦う事に対する意味が変わる。心までは孤独じゃない。

「誰が正しいかなんて分からない・・・だけど、あの私が間違っている事だけは分かるから・・・行くよ!!」

私は黒い私を追い、跳躍した。

「さて、どうかしら？　ここなら思い切り戦えるでしょ？」

黒い私があった。

ここは・・・どこだか分からない、人里離れた山中である。

周りを見渡せば、木と緑しかない。視界は閉じていて窮屈な感じがする。

「でも、まあ戦う前に、アナタに聞きたい事があるのよ。耳の穴かっばじってしっかり聞いて頂戴。」

黒い私はこちらの言葉も聞かずに、話し始める。だが、その内容とは私の想像を絶するものであった。

「ちっさい私、アナタは考えた事があるかしら、突然友達が、親しい人が死んでしまったらなんて事。」

「えっ……？」

「例えば今日、華夏が死んでしまったら……紅葉や忍が死んでしまったら……お父さんやお母さんが死んでしまったら、どうする？」

えっ、ええ！？ 突然何を……。

「不幸ってね、突然やって来る。私が生きている限り、いつでもどこからでも、襲って来る。」

「……………」

「私は逆らった・・・運命、とかいうバカみたいなモノにね。書き替えられる事は分かったから・・・華夏は生き返った、だけど、またすぐに死んでしまう。超えられない壁があったのよ、いくら力を持っていったって、いくら書き替えられたって、絶対的な部分はいじれなかった。それどころか・・・何か世界そのものが失われちゃったよ。」

当然だった・・・絶対的運命をいじるという行為は、世界そのものをいじる事に他ならない。私が二人居るといふ事態は、巨大なプログラムの中の小さな小さなバグの一つに過ぎないだろう。

だが、それだけでも時間は止まった、フリーズした。

世界というメインシステムそのものを、知識の無いものが書き替えたらどうなるか・・・。

その結果が、世界の消滅だった。

「この世界はいい・・・皆がちゃんと生きている。それに、アナタはどうやらこの世界を留守にしてみたじゃない。だから辿り着けた私は書き替えた、この世界のほんの一部のルールを！！」

そうして出来たのが、今の私の世界。

私の居場所と、友達を書き替えられた世界。

「アナタが帰って来ちゃったけど・・・もう、ここは私の家、残念だけどね。帰るならそれでよし、ダメってんなら力づくよ。」

「空き巣が開き直ってんじゃないわよ、私ならそんな事しちゃダメって分かるでしょうが!!」

「ダメ？ 何で？」

黒い私は何気なしに言った。マジかよ、この美空ちゃん。

「元々の世界が辛い事ばかりだったから、辛い事のない世界まで逃げて来ただけ・・・アナタもないから同一存在によるなんかかんとかが発生しなかったのよ・・・で、どこがダメなのよ？」

「・・・ああ・・・!？」

「どこが悪い？ 何が悪いだって・・・？ それは、私の世界を奪ったって事。でもこれ、理由としては弱いのかな・・・。」

「考えてごらんさいよ、私はこの平凡な世界で満足してあげて言ってるの。アナタはね、もしかしたらもったいない世界、素晴らしい世界に行けるかもしれないんだから。」

うん、理由弱くないわ！！ 悪者だ、この私。

結局、泥棒だ、世界を盗んだ。

僅かな同情も憐れみも消え失せた。

この平凡な世界？ 満足してあげる？ その発言だけは許せない。

「アナタ・・・いや、私は何様のつもりだ！！ 分かった、アナタの様な私はこの世界から追い出します！！」

私は、エル・ナーフィの刃先を、黒い私へと向ける。

「ま、そうよねフツーは。むしろどっぞって言われたらどっぞいようかと思ってたしさあ。」

もういい、もう喋らせない。

エル・ナーフィには斬った相手を元の世界に帰す力があつたよね。

簡単な事だ、黒い私を斬ればいい、それだけだ。

「んじゃ、こっちから行こうかねえ。」

先に動いたのは、黒美空であつた。

ふわっ、と宙に浮いたかと思うと、どんと高度あ上げ、両の手より光を放つ。

B・O・Dの様にまとまった光線とかじゃなく、広範囲にバラバラに撒き散らす光だ。

木々を薙ぎ倒し、土壌をえぐり・・・美空の周囲に降り注いだのだ。

巻き上がる土くれ、消し飛ぶ山の一部。

砂煙を掻き分け、美空が飛び出す。背中には純白の翼、それを広げ飛行。

「ハハッ、そこなくなっちゃあー!」

集中、収束、放射。



更に増加する光の帯。

正面、あるいは上下、左右から青色の光線が飛来する。

この攻撃、E・Bに性質が似ている。ならば対応も同じでいいか・  
・  
・

上下に、あるいは左右、前後と三次元に対応。確かに厄介な攻撃  
だけど、回避出来ない程じゃない。

「うおらあああああ!!」

回避、回避、そして接近!!

エル・ナーフィを振るう、大気を押し退け一直線。

「おっと。」

当たらない、空を切る。それは予測していた。

だからすぐ、次撃へ。

また、外れた。そして、黒美空は後退、一気に距離を稼がれた。

あっちの私は、どうやら遠距離攻撃主体の様だ。

「野蛮ね、こっちの私は。もっとスマートにならないかしら。」

野蛮……か。でも黒美空の攻撃方法は、相手にダメージを与えたというのを自らの手で感じ取れない。それは、ダメなんじゃないかな……なんて。

傷付けてるのを自覚しなきゃ！！

「フフツ、小さい私、消えなさい……無限斬突原！！」

それは手をかいさぬ武器、振るわぬ武器、扱わぬ武器。

黒美空の周囲に現れる、無数の武器。それは剣、それは刀、それは短刀、それは斧、それは鎚、それは槍、それは……。

「いつ……!？」

「これも避け切れるかしらねえ!!」

避け切れないよ……防壁を使って、そして武器らの数を減らさ

ないと。

「い、E・B、発射アアアア!!」

エンシエント・ブラスター、拡散方式のB・O・D。これでいくつかの武器を叩き落として……。

「イージスの盾、前へ!!」

えっ……あ、アレ、勇のエンゲージウエポンにそっくりだ!!  
それがいくつも、武器らの前に立ちはだかる。

マズイ、あれが勇のと同じなら跳ね返される。

盾に……命中する。防がれた、けどどつやら跳ね返せる程ではないらしい。相殺。

だが、武器は減らせてない、来る!!

「進軍!!」

一斉に魂を得て、飛来するまがまがしき刃。

私の命を狙う、無数の死神。

ぐっ……回避を。

空間を埋め尽くす刃の嵐。

咄嗟に急降下。頭上を、無数の武器が通過する。

身体を止めてはられない。後続の武器は軌道を修正し、私へ向かう。

しかも一旦外れた武器らは、意志持つ動物の様に、ターンし再び私を目指す。

タチが悪い。破壊しなければあの武器は止まらないのか!!

ならば……。

「I・B!!」

インフィニティー・ブレード。どこまでも伸びる光の柱、無限の  
剣。

「回転斬りイイイ!!」

剣を伸ばし、身体を回転、三百六十度、縦横前後、三次元に回転するブレードは、襲い来る武器をことごとく撃墜する。

うおオオオオオ、目エ回るう！！　とはいえ止まってちゃダメだ、移動移動オオ！！

よし、ほとんどを落とす。回転止め！！　三半規管強化は流石で、ほぼ目は回っていない。

少しばかりの残武器は、今度こそE・Bだ。

拡散した光が、次々に武器を叩き落とす。五、四、三、二・・・  
一、ゼロ、いよっし全破壊完了。

今度はこっちの番。出来るかどうか分かんないけど、アレを使うよー！！

確か、光の球を六つ、自分の周りに浮かばせて・・・ラインを走らせる、と。

「・・・？　何だ、この雰囲気は？」

一方の黒美空は、怪訝の表情を浮かべる。彼女は未だ、自分の方

が強者であると疑っていなかった。

今でも、あつちの私、予想以上にやるわね程度にしか思っていなかった為、対応が遅れてしまうのだ。

「A・B、発つ射アアア!!!」

!!! 何ッ!? 何か来るっ……クソッ、避け切れない、防壁を。

A・B、アグナスティナ・ベリユアルド。青葉の最終奥義に位置する極太光線。

それを今、美空は見よう見まねで放つたのだ。

黒美空の眼前に、半透明の壁が現れる。それは、ビームを分割しどうにか押し留めてはいたが……。

(ぐっ……ぼっ、防壁がっ……!?)

壁は、どんどんと端から崩壊を始める。そんな事が起こっていた。

(クソオオ、こうなったら運命の書き替えでえ!!!)

書き替える。“私は、さっき止まらずに移動していた。”

A・Bが通過する。空を超えて、いずこかへと飛んでいった。

「やった!？」

かと、とりあえず口に出してはみたが、多分、そうはいかないだろうと予想していた。

直後に飛来した光線が、死角から私の防壁を打つ。

ああ、やっぱり。そう簡単にはいかないよね。防壁張っておいて良かった。

しかし、移動した痕跡も、何もなかった。確かにあの私はA・Bに吞まれ、あの程度の防壁なら関係ないハズである。

だが、私の死角に奴は居た。瞬間移動!？ いや、違う何かだ。さては・・・書き替え!？

くそう、だとしたら何というインチキだ!!

(フーツ・・・危なかった・・・この世界のちっこい私、強い。  
単純な能力だけなら私より上かもしれない・・・。)

書き替えがなかったら、あれで終わっていたかも知れない。恐ろしい子だな・・・これは侮ってはいけない、書き替えもやるまいと思っていたけど・・・、フル活用しなければいけないかもしれない。

「くっ・・・どうすればいいの？」

“落ち着くんだ美空、書き替えなんてそうそう出来やしない、それに能力は多分、お前の方が上、要は書き替える余裕を与えなければいい!!”

あれ？ 黒くん・・・確か交信不能になるはずじゃ・・・？

“そんな事気にするな!!”

ええっ！？ ついに黒くんも何でもアリになってきちゃった！！  
でもまあ、いいや別に。丁度相談相手が欲しかった所。



“大切なのは勢いだ。これまでの戦いだって、お前は勢いでどうにかしてきたろう、やれる事を全力でやればいい！！”

「黒くん・・・そうだよ、勝てない事はないよね！！」

“そうだっ、例え奴が神そのものであつたとしてもだ！！”

むしろ、私もなんだか神の一種っぽいし行けばいい！！

負けていないのだから、力では！！

「オオオオオオオ、エンゲージエクストラ、エル・ナーフィBL  
ACK！！」

今思い付いた必殺技、黒く染まるエル・ナーフィ。つまりはダーク化である。

力を貸して、青葉の力よ！！

翼を見る。黒くなつてた、よし、行くぞ！！

ドンッ、と大気が弾ける。加速だ加速。一気に間合いを詰めよう。

エル・ナーフィで斬ってこそ意味があるのだ。

飛行しつつのランダム軌道。どちらの方向に動いて、どちらの方向へ向かうのか、そんな事はいちいち考えていない。

適当に動く、計算されぬ動作。

「チツ、クソツ、このオ!!」

今まで以上に、光の帯をばらまく黒美空。

だが、現美空を捉える事はかなわない。明らかに光線よりも奴は速いのだ。

そして・・・黒美空の背後に回り込んだ美空。

直後には、ダークエル・ナーフィを振り下ろす。

だが、黒美空は消えた。また書き替えか・・・ならっ!!

「E・B、セパレート!!」

ただのE・Bではない。更なる拡散、蜘蛛の巣状に全周囲全てを埋めるエンゲージ粒子ビーム。

これだけやれば、少々の書き替えでは対応出来まいというのが美

空の考えである。

現に、自らの存在位置を書き替えた黒美空を、何発かのビームが捉えたのだ。

「きゃあああああ!?!」

態勢崩す黒美空、これはチャンス、ダークエル・ナーファイ!!

「くそオオオオ!!」

また、剣は空を切る。だが、上等だ……書き替えが間に合わなくなるまで……やってやろうではないか!!

また消えた、さっきのパターンだ、もう一度……

「E・Bセパレートオオ!!」

を放つ。やはり周囲に蜘蛛の巣状に拡散する光線。だが……そこに居た事になった黒美空は、更に、二重に書き替えていた。“私はそこには……”

またしても、瞬間移動。そこに居て、そこには居ない。

「オオオオオオオオオオオオ!!」

「チイイイイ!!」

この空間内に、どれ程の矛盾した出来事が、現象が現れただろう。それも、短時間の間に。

それは時空間に負担を蓄積させてゆき、やがて歪みから破断へと至る。

その危険が今、飛躍的に高まりつつあった。

書き替えの連鎖、連続によってである。

「もらったああああ!!」

「!!」

それは、書き替えの間に合うタイミングではなかった。あと少し、もう少しだけ手の角度が違っていたら黒美空を両断出来ていたのだ。

空間がねじ曲がる、空間がひび割れる。

二人は気付く暇もなく、その影響を受けてしまったのだ。

「でええええい!!」

美空は勢いそのままに、ダークエル・ナーフィを振り抜いた。

両断される高校バージョンの私。やった。ついに斬れた、これで・  
・この黒い私は元の世界に・・。

「うあつ、あああ・・・痛い・・・痛い・・・。」

「えっ!?!」

ひっ、光にならない!? 彼女は、上半身を、下半身をのたうち  
まわらせ、血液を撒き散らしていたのだ。

なっ、何っ、どうなっているの・・・?

“ っつ、美空っ、気を付けろ、周りがおかしい。”

「えっ・・・そ、そういわれれば・・・。」

周りの景色が、はっきりと見えなくなっていた。モザイクか粗いドットのように、もしくははぶれて、やがて景色は渦に飲み込まれてゆく。

コーヒートを掻き混ぜてミルクを投入したら、ぐるぐると渦が出来るよね。

それに似たものが大気に来ていたのだ。

「すつ、吸い込まれ……。」

気付くのが遅過ぎた……私は、特に抵抗も出来ず、なすがまま、時空の渦に吸い込まれていった。

・

「!?!? ちっこい私が……動かなくなった、のか?」

一方の黒美空側の変化といえば、剣を、身体を、一切の動作を停止してしまっていた現美空が存在している事であった。

「フ……フフフ……そうかあ、時空に矛盾が起こったせいで、お前までフリーズしてしまったのねえ。」

現美空は答えない。ピクリとも動かず、瞬き一つもしない。

「フフフフフフ・・・運命とやらも、たまにはアジな事をしてくれる・・・私の勝ちみたいね。・・・さようなら、ちっこい私!!」

手始めに、光線を手の平より放ち、美空に確実に命中させる。

彼女はいとも簡単に吹き飛んで、その身を山腹へと衝突させる。

「さあてトドメよ・・・確実に刺してあげないとねえ。」

黒美空はすつつ、と高度を落として行く。さて、奴はすぐに見つかった。

あれだけ派手に落ちたんだもんな、トドメといこう。

地に足をついた黒美空は、ゆっくりと手の平を現美空へとかざす。

だが・・・その時であった。

“みっ・・・そら・・・”

「!?! この声・・・華夏!?!」

そう、よく知った声我突然に響く。一番の友達だった千秋 華夏の声であった。

現実の音声とは異なる、エコーがかった声。頭の中に直接響いた声だ。

「華夏? 華夏なの!?!」

黒美空は明らかな狼狽を見せる。確かに、彼女の声だ・・・だけど、この世界の彼女らは矛盾を観測してしまつてフリーズしてるハズなのだ。

“みそら・・・。”

「!?!」

ゆっくりと立ち上がる現美空の身体。

しかし、それは異様な光景と化す。

すつ、と立ち上がる訳でなく、妙にぎこちない、操り人形にも似た不自然な立ち上がり方をしてみせる。



しかもどつやら、華夏の声は、現美空の方から聞こえて来ている様だった。

“美空……。”

「華夏!？」

いいや、現美空などもはやどこにも居やしない。

そこに立っていたのは、紛れもなくあの時の華夏であった。

頭から血を流しながら、のろのろと、あの華夏らしいものは、こちらに向かって来ていた。

## 最終話 私達クエスト

最終話 私達クエスト

「つぎいいいいいい。」

私は今、引つ張られている、空間そのものに。

時空の渦に吸い込まれてからというもの、ずっとこんな調子だ。真横に落下している様な気持ち悪い感覚がずっと続く。

どれ程の時間、どれ程の距離があつたのかはしらないが、しばらくするとだんだんと速度が落ちてゆき、やがてピタリと停止した。

落ち着いた様なので、私は目を開く。

「ここは・・・?」

周囲の状態といえば、景色というものがなく、緑と黒のねじれあつた様な色合いの壁が、私を囲んでいる。

距離感の一切掴めない辺りの情景に、私の目は疲れるばかりだ。

また、今私自身は、仰向けに寝転んでいる状態なのだが、浮遊している様であるし、がっしりと床に背をついている様でもあるという、曖昧な形で存在していた。

気持ちが悪過ぎる・・・はやいところ、こんな場所おさらばしたかったのだが・・・。

“ 美空・・・春野 美空・・・ ”

「誰!？」

声が聞こえた・・・男性の低い声、はたまた女性の高い声、それから二つの声が同時に喋っている様でもあった。

「誰なの、どこに居るの!？」

“ 私はここに居る・・・この空間、全てが私。私は時の流れ、私は運命の流れ・・・つまりはお前達のいう所の絶対神とかいうやつだ。”

「絶対神!？」

へええ・・・本当に居たんだ、そんな存在が。しかも時の流れや運命そのものみたいな事言ってるし・・・。

“では早速だが、この次元は狂い始めている。矛盾、絶対的運命の書き替えが頻発し、他の次元との共振が発生してきてしまっているのだよ。”

「えっ・・・ええと!？」

“つまりだな、可能性、他の可能性が同じタイミングに複数存在してしまつて、他の可能性を潰してしまう。お前達の世界に起こっていたのを簡単に言つとだ、あちらの美空はこの瞬間、ここに居た。しかし書き替えにより同時にそちらにも居た。つまりは、ここに居た可能性とそちらに居た可能性が同時に発生し、分岐するべき選択肢を対消滅させ続けたのだ。”

「うっ・・・ううん?・・・つまり、無数の選択肢の中から混じつて・・・力を持った私と持たなかつた私と同じ世界に居て、潰し合いするみたいな・・・?」

“まあ・・・だいたいあつてるが・・・有り得ないものの蓄積、それは少しでも絶大な影響を及ぼしてしまう。僅かなウイルスが生物を死に至らしめる様に、僅かなプログラムミスがコンピュータ全てをフリーズさせる様に。”

世界は選択の機会がある度に、分岐する様に出来ていると聞いた事がある。例えば、ジャンケンをしたとして、それに勝った私、負けた私、あいこの私のそれぞれの世界があるように、どんどんと世界は枝分かれで広がってゆく。

黒美空のやった事は、相手がチヨキならパーとグーを同時に出して矛盾を作った。そうなれば、あいこ以外の選択肢は潰れる。

「だから現われさせてもらったよ。歪みの中心である二人・・・お前とお前の前にな。しかしまあ、これ程の力を持つ者が二人も、同じ時空に存在するなど・・・珍しい事だよ。」

「・・・そうだ、私はいつからこんなだったの？　こんな力を・・・アナタなら分かるんじゃないかな？」

“それはお前が何者なのかを示せというのだな？　・・・期待に答えてやりたいが、残念だ。私は、お前の望む答えを持ってはいないのだよ。・・・強いて言うなら確率だ。いつ、誰かが圧倒的な力を持つであろう・・・そこに至る可能性は生物が生き続ける限り、限りなくゼロに近いが誰もが持っている。たまたま、天文学的確率を経て、力持つ全く同じ名を持つ全く同じ存在が二人、生まれたのだ。それも、私をも書き替えられてしまう程のね。だから、あの美空もお前もただのヒトに変わりはないのだよ・・・広い意味で言うのならね。”

ぐっ……偶然、か。実は私は神様の子供だとか、ずっと転生して生き続ける者だとか、いろいろ期待してたんだけどね。

「ま、まあとにかくさ、次元を正常にするには、あの私を元の世界に帰せばいいんでしょ？ 奴が書き替えた部分も私がどうにか直せば……。」

私は、空間目が私なりの唯一の解決策を提案した。

すると、珍しく間が空き、しばらくして返答。

“それでもいいはいのだけれどね……実は、私はお前を信用していないのだよ。”

「ええっ、どゆことなの!？」

“お前が、あの美空と同じ事をしてしまつかもしれないのだ。書き替えによる次元への過負荷からの世界消滅をね。”

はつきり言って、混乱を撒き散らす存在なのだ、アレは。と、絶対神は付け加える。

えっ、で、でも私がそんな事をするハズが……。

“ 分からないのだろう、何故あちらの美空が書き替えを何度も行ったかが。ならば、特別だ、体験させてやろう。真実を見て来るがいいさ。”

との言葉が聞こえた直後、見覚えのある渦が目の前に発生する。

あつ、また時空の渦だ！！ うあああつ、吸い込まれるうううう！！

私の意識は途絶えた。

.

「みそらあ！！ 聞いてたあ、私の話！！」

うっ、うえ！？ 何、イキナリ・・・。

「呆れた・・・またボートしてたのね、まあ、美空らしいけど。」

うわっ、華夏、だよな？ 高校生バージョンの。

「うっ……っ、こんにちは華夏……さん。」

「はぁ！？ マジでボケないでよね！！」

うあっ、怖い。髪の毛は茶色になってるし、耳にはピアスとかしてるし、フリヨーだよ不良！！ 華夏だって分かってもこの変わり様はちよつと……。

「ほらあ、紅葉や忍がさあ、今度の休みに久しぶりにこっちへ帰って来るから、一緒にどっか行こうって話よ！！」

ん？ 紅葉や忍が帰って来る……？ って事はどこか遠くに行ってしまったのか、あの二人は。

「って、そうじゃなくて一体私は………  
ああ、ゴメンゴメン、あんまり暑いからボケてたわ。」

そうだった、思い出したよ。私はもう高校生だった、ボケてたなあ。そうそう、紅葉や忍が帰って来るんだったよね。

「もっつ、ようやく正気に戻ったね。……で、やっぱりさ、近所じゃ味気ないから思い切って遠出しようかなって思っただけど。」



「ああ、うん。その方がいいよ。とびきりの思い出作つところよ、ね。」

某夢の国とか、某ランドとか。

ところで、今は高校が終わって下校中なんだよね。私と華夏は同じ高校に行ったのよ。

相変わらず色恋沙汰とは無縁の私達。華夏は彼氏募集中らしいんだけど、未だに彼氏候補すらないらしい。私はただ、興味があまりないだけである。

さてと、楽しくお喋りしていたら、目の前の横断歩道の歩行者用信号が点滅を始めていたのが見えた。

「あつ、ヤベえ。美空、早く早く、赤になっちゃつ。」

「あ、ちよつとお！！ 待ってよ華夏。」

横断歩道の元まで私が辿り着いた時には、信号は既に禁止の赤を示していたのだが・・・華夏はもう、半分近くまで渡っていたのだ。

「まだだつ、まだ行ける！！」

「ハア・・・ハア、ちょっと華夏、シャレにならなかったよ!!」

「あははゴメーン、そーいや美空って運動ダメだったよね。」

「よく知ってるでしょ・・・。」

全く、小学の頃からの友達でしょうが、私達はっ!! などと思  
っていた。だが、次の瞬間に、そんな思いも吹き飛んでしまう。

「あっ? あああ・・・がっ、ぼっ・・・。」

え!?!? 華夏!?!?

「なっ・・・何、がっ・・・。」

本人にすら分からない事。華夏は突然、何の前触れもなく血を流し倒れた。全身から血を流して、だ。

「ちよつと華夏、華夏、どうしたの!?!」

その場にかくん、と倒れる華夏。返事すらしてくれない。

「しつかりして華夏!! ねえ、ちよつと、ねえ!!」

応答、なし。彼女はピクリとも動かなく・・・。

「イヤだよ、何でこん・・・な・・・!?!」

そうか、思い出してしまった。私は・・・信号だ、あの時、華夏は赤信号にも関わらず横断歩道を渡り、車にひかれてしまったのだ・・・だから、私は望み、手に入れた。力を。

書き替えた。華夏が血を流し倒れて動かなくなったから、死ぬかもしれないから書き替えたのだ、運命を、時を。

だが、ひかれたのと全く同じ時間、タイミングに華夏は同じ姿をさらした。だから・・・私はまた、書き替えた。

「これは・・・ああ、コンビニだ。華夏と二人で買い物に入ったのだ。

「ねえ美空、この新商品、おいしい？」

ああ、それは先日発売されたばかりのマンゴー大福っ。私は三日前に早速食べたのだけど・・・。

「止めときなよ華夏、それまっずいんだから。」

「えー、ホン・・・ト!? えっ・・・がつ、ふっ・・・。」

華夏は血を流し、倒れる。まただ・・・また思い出す。私はまた、書き替えて華夏を助けようとして・・・。

あとは、その繰り返しであった。一旦は生き返った華夏は必ず、十六時三十四分に血を流し倒れた。その度に書き替え、忘れ、そして思い出す。華夏が死ぬ度に。その繰り返し。

こうしてありとあらゆる可能性を潰して行って、矛盾を作り過ぎて・・・何回目だったろうか、遂に世界は耐え切れなくなり消失した。

私はその後、虚無の中を彷徨っていた。真っ黒い、何も無い空間だけが見える空間、そのただなかをゆっくりと、漂う。

「ああ・・・あ・・・。」

“もういいだろう、君はこちらの美空だ、あの時の美空だよ。”

「!?!? うっ、うあっ!?! 私、は……?」

突然、辺りの景色が変化する。緑と黒色混ざり合った様な空間のただ中に私は居たのだ。

咄嗟に自分の身体を見る。縮んでる……元に戻ったんだ。

「あの、さっきのが黒い私の?」

“ そうだ。だが、君はただあの時の美空の記憶に同化してただけで、感情まではダイレクトに伝わらなかったと思うが……どうだね? 君が信用出来ないというのはそこなのだよ。もしも君が同じ目にあつたら……彼女と同じ事をやるんじゃないかね?”

「……それは……。」

“ 原因の段階であるから回避出来る。だが、結果が提示されてからでは既に遅い。変わらないし変えられない。書き替えという能力は実はそこまで万能ではなくてね……彼女が考えている程、運命は適当なものでもない。”

私は何も言えなかった。私はきつと、あつちの私と同じ事をして

しまつと、そう思えたからだ。

もしも華夏が・・・いや、紅葉や忍、勇でも。私の知っている人物なら誰だろうと。何度も何度も書き替えて、結局は世界を崩壊させてしまつだろう。可能性が極めて高い。

だって、友達を助けられる可能性が少しでもあるなら、やっちゃんよ。

“それにだ美空・・・お前はあちらの美空を助けようとしている様だが、すくなくともその武器、エル・ナーフィといったか・・・それでは無理だな。何故ならば、元の次元を対象を戻すという力が、あの美空には発揮されない。そのまま、死んでしまつ。”

えっ・・・エル・ナーフィで斬ったら死ぬ？ ああそうか、あつちの私の世界は消滅しているのだった。それつつまりは・・・。

「あの私を殺す以外の・・・選択肢がないって事？」

“いや、あと二つ程現実的なものがある。一つはお前が死に消滅する事、無かった事になる事・・・もう一つがあちらの美空を次元の渦に叩き込み、いずこかへと送ってしまう事だ。まあ、それはまた、お前の世界に干渉してくるかもしれないが。”

私が死ぬ・・・それはダメだ。私は他人の・・・いやこの場合は

自分だけでも、その為に犠牲になる程、お人好しじゃない。この世界は私達の生き暮らす世界なのだ・・・アイツのものじゃない。

それにまた、アイツは書き替えを重ね世界を滅ぼすかもしれない。私にも可能性はあるけど、今のところ現実を書き替える能力はないし、世界の過程と結果を知った。

残された、ただ一つの選択肢。やはり、あちらの私を次元の渦に叩き込むしかないのか。

“まあ、お前の答えは聞くまでもないだろうな。”

「・・・うん、そうだね。それで一つ聞きたいんだけど、渦に飲まれたあっちの私もどこか別の次元に行くだけなんだよね？」

“・・・それは・・・正直、運に身を任せるしかないな。生存出来るかもしれないし、消滅してしまうかもしれない・・・それでも、斬って確実に殺すよりはマシだろう？”

「運命そのものが・・・運、とかいうんだね。それくらいの大バクチって事か・・・。」

“ああ。だが、何度も言うが、私はお前を完全に信用している訳ではないのだ。でも、私は直接何か出来る訳じゃないから、ただ流れるだけだから、あくまでも可能性の低い方に頼むしかないのだ



よ。それを忘れないで欲しい。”

「分かったよ。でも、そんなに都合良く渦が発生してくれるかな？」

“それに関しては大丈夫だ。間もなく、あの次元の歪みの中心に多量の渦が生まれる。歪みを排除する為にだ。”

そうか・・・ならば、私のやるべき事はただ一つ、か。あの美空を渦に叩き込むだけ。

“・・・準備は、いいかね？”

「・・・うん、いつでも。」

私の、その言葉を最後に、また次元が渦を巻く。三度目、私はそれに吸い込まれていった。

“美空・・・美空・・・。”

起き上がった華夏の亡霊は、ゆっくりと私を目がけ歩いて来る。その顔は死人の様に青白く、また表情というものがなかった。

それは、かつての友人ではなく、友人の形をした何かとしか捉えられない。あの明るかった華夏とは、似ても似つかないのだ。

「違う・・・そんなハズはない。華夏は死んだわ、この世界に、死んだ華夏が居るハズがない。」

必死で私は否定した。あの華夏は幻だ、違うと。だが・・・。

“美空ア・・・友・・・達・・・。”

「!？」

“友・・・達・・・。”

「やめてよ・・・友達!? ふふ・・・止めてったら!! アナタはっ、私を置いていく。何度助けても結局、アナタは何度も死んでしまう。私がどれだけアナタを助けようとしたか分かるの!? 華夏は、私に絶望しか残してくれなかった!!」

“美……空ア……。”

それでもアレは、私の元へと歩いて来る。ゆっくりと、のろのろと。手を伸ばし、私を捕まえようとしているのか。

「寄るなア!!」

私は咄嗟にビームを放つ。あの、華夏を模した何かに。命中……断末魔と共に、それは崩れ落ちる。バラバラと。

「ハア……ハア、何なのよ……。」

だが、その直後に地面から……続々と華夏らしいアレがいくらかもいくらかも現れて来る。

「なっ……!?!」

美空、美空とあらゆる方向から響く、暗い声。全てが亡者の様であった。そういえば、あの日見てしまった華夏の最後の姿もこんなだった。

「止めて、止めてええ!! 何がしたいのよ、私にどうしろって

のよ!! あれ以外に方法なんて無かったじゃない、他にどうしろって言うのよ!!」

ビームを乱射する、全方位に全方位に。命中するたび砕け散る華夏。しかしそれでも彼女は何度も甦る。何度も、起き上がる。

「どうして欲しかったのよ、華夏は!! あれ以上に何をすればよかったのよオオオオ!!」

“私は……死んでしまったら……それでも……良かった……”

「!?!」

“あなたは……一人じゃなかったはず……私が居なくなっても……皆と生きて欲しかった……私くらい、乗り越えて欲しかった……”

「そんな事出来やしない、あの時の私にはアナタしかいなかった!! お父さんもお母さんも出張で、紅葉も忍も遠くて、勇も絶望してて……そんな時に耐えられる訳ないじゃない!!」

“それでも……アナタの大切な人……皆を巻き込んだじゃいけ

なかった・・・人には、忘れる事も必要な・・・心の中に、ふと居ればいいの・・・私は立ち止まっただけ・・・あの日に立ち止まっただけ・・・ふと思いついたら、私はいつでもアナタのそばにいる・・・思い出の一ページに私をしてあげればいいの・・・。

「分からないよ!! 私には華夏の言っている事なんて一つも!」

黒美空の両の手に、光が集まる。それを目の当たりにしても、華夏は進むのを止めなかった。

「私はっ、この世界でええ、幸せに生きたいのよっ!! どうしてダメなの、どうして私だけが不幸なのっ、どうして、どうしてよオオ!!」

光が、限界近くまで収束し、今正に放とうとした、その時であった。黒美空の周囲を囲む様に、無数ともいえる時空の渦が発生する。次元の限界が近づいているのだ。だが、彼女はお構い無しで、動作も何一つ変わらない。

だが、彼女の目論見は崩れ去る。

「うあああああああ!!」

「!? 何イイ、お前はちつこい私!？」

次元の渦、その中の一つから彼女が、現美空が現れると脇目も振らず、黒美空へと駆ける。

「邪魔ををするなああああああ!!！」

現美空目がけて放たれた、大出力のビーム。これまでの追尾に重点を置いた攻撃ではない。純粹な破壊の、破碎の為の一撃。美空どころか、トラックをも丸々飲み込める程の規模。

だが、構わない、美空は正面から、それに突っ込んでゆく。

「私よ、戻れえええええええええ!!！」

多分、このタイミングで、私は何も考えていなかったと思う。全力で武器を振り、粒子ビームを真つ二つに切り裂いて、そのまま黒い私を・・・エル・ナーフイで打ち付けた!!！」

「がつ!？」

峰打ち・・・じゃあないけれど、刃以外で叩いた。ホームランをかつ飛ばす様に。黒い私は吹っ飛んで、計算どおり渦の中へ。

「なっ・・・カラダが、飲み込まれ・・・。」

「元の次元に帰りなさい、もう一度、もう一度だけ自分を見つめ直して、可能性の私い!!！」

「いつ、いやだ、いやだいやだ!! あ次元には絶望しかない、失望しかない!! こんな幸せな世界をようやく見つけたのに、樂園をようやく見つけられたのにいいいい!!！」

「それでも、アナタの世界はあっちなの!!！」

「いやだ、戻りたくない、イヤアアア・・・だ・・・」

あっさりと、彼女は時空の渦に飲み込まれていった。音も、すぐに尾を引く事なく消えてしまい、後には不気味な静寂だけが残る。これで、終わったのだろうか・・・。

辺りを見渡せば、多量に発生していた時空の渦が一つ、また一つと消え失せていた。私が一人だけになった事で、次元が安定しつつあるのだろう。

だが、今回の一件で今の私がどれだけ幸せな時を過ごしているの

かが分かった気がした。

私に、あの私とは違った選択肢が出来るのだろうか・・・未だに自信は持てない、一切だ。私ももしかしたら、あの未来に辿り着いてしまうのでは、と考えてしまうのだ・・・。

“アナタも・・・美空ね・・・中学生の時の・・・。”

うわっ！？ ビックリした・・・そこには、高校スタイルの華夏さんが居た。なんだか・・・ひどい怪我をしている様で、顔なんかは真っ赤っかだった。

「あっ・・・。」

でも、彼女の顔は笑顔であった。いつの間にかだたの一人となった華夏も、次元の安定により、足元から少しずつ消滅していった。

“忘れないで・・・アナタは、一人じゃない、二人きりでもない・・・沢山の仲間が居る・・・どんなに辛くてやり直したい事があったても・・・逃げ出したい事があったても・・・仲間が居る、だから・・・。”

「だから・・・？」



“いつも、アナタらしく居て……。”

そこまで言っつて、彼女は完全に消滅した。何の痕跡も残らない、まるで全てが夢の中の出来事の様であった。

でも……私は……。

“オイツ、美空!! 何があつた、オイツ!!”

「あつ、くろ……くん?」

“ああ、良かった、ようやく返事してくれたか。さっきまで一切返事がなかったから……。”

「うん、もう大丈夫……後は、この世界を元に戻すだけだけど……私に出来るかな? ちょっと自信ない……。」

“……俺は、お前の力についてはよく分からない。でも、きつと出来ると思う。”

「ありがとう、黒くん。……じゃあ、行くつ。」

私は、翼を展開し飛行すると、華夏達の所まで戻って行った。

丁度その頃、飛び去る美空を見上げる者が一人。その者は、大人の様であり子供の様であり、女性の様であり男性の様であり、人の様であり動物の様である、そんな不確定な存在だった。

じつ、と美空の遠ざかる背中を眺め続け、彼女が視野より消えると同時に、その者も姿を消した。次元の狭間にも入り込んだ様である。

## エピローグ

聞こえる・・・嫌でも耳に入ってくる。皆の噁り泣く（すすりなく）声が。

重苦しく、耐え難い、湿り気を強烈に帯びた空気が背中にのしかかってくる。

私は、涙一つ流さなかった。頭の中がこれ以上ないくらいぐちゃぐちゃで、ありとあらゆる思いが去来し、消えてゆく。

泣く程の余裕はもう、在りはしなかった。

やがて経が終わる。皆、一人一人が棺へと歩み寄り、別れの言葉を告げると花を手向ける。

私は、その場から動く事さえかなわなかった。

やがて、誰も居なくなる。私はようやくそっと立ち上がると、棺へのろのろと歩いて行った。ゆっくりと、棺の中の人物を見下ろす。

「華夏……。」

見た事もない、青白い華夏であった。血の通わぬ、精巧な作りの人形ではないか、とさえ思えた。

「華夏……。」

それでも、涙は私の頬を伝う事はない。悲しいハズなのに、泣きたいハズなのに……私は、涙を流してあげるといふ一番簡単でどんな言葉よりも強いその行為ですら、親友に対して行えないのか……。

絶望も失望も……自分に対する冷めた感情も、どんどんと強くなつてゆく。

そこからは、よく覚えていない。

フラフラと無気力に、街を彷徨ったからだろうか、気が付けば私は、自身の通う高校の屋上に居た。ここに来た理由はもう、一つではない。

(私も、華夏の所へ……)

彼女は、ゆっくりとフェンスをよじ登り、フェンスの反対側へ着地。あと二歩でも踏み出せば、私の身体は宙を舞う。

どこまでも限りのない自由への逃避に、この身を震わせる。

(結局、絶望しかない……あの時、私が華夏を一秒でも引き止めていたら……もしも、あの時をやり直せるなら。)

だが、そんな都合のいい事あるはずはないと、彼女は知ってしまった。どうしようもない。

一步、踏み出す。横風がゆるりと頬を撫でた。

地を眺める事は、もうしない。見下ろす、勇気がない……いや、かえって勇気ある行動なのかもしれないけど。

もう一步を早く踏み出そう。早く。一人で寂しがつている彼女の所へ、行ってあげよう。

(そうしたら、泣いてあげられるかな……一緒にまた、笑い合えるかな……また……。)

さようなら。

誰にという訳でもなく別れの言葉を呟くと、彼女……元黒美空は最後の一步を踏み出した。

“ねえ、美空……。”

彼女の身体が、大気中へと投げ出された。眼下の空間へと身体が吸い込まれてゆく。

“アナタは・・・アナタにはまだ、別れの言葉なんて言わせない。バカな事をしちゃあいけない。そんな事をして、誰も絶対に笑顔にならない、皆や私を悲しませる事にしかならない！！”

私は、目を閉じていた。もう何も見なくていい。だから、早く・・・。

“忘れたの！？アナタには・・・。”

身体がもうすぐ叩きつけられるのだろう。もうすぐ、もうすぐだ。

“沢山の仲間が居る！！”

私の背中が、ついに衝突する。だが・・・。

あれ？ 衝撃がほとんどない。まるで、何かに受け止められたみたいで・・・。ああ、そうか、痛みや衝撃を感じる暇もなく、私は死んでしまっ・・・。

「バカヤロウツ!!」

えっ……?

「お前まで何やってやがる!!」

ええ!?

「バカな事はやめなさい!!」

ゆっ、勇……忍……紅葉……?

「美空ア、ゴメンな、お父さんを許してくれええええ!!」

「美空ちゃん、お母さんも許してちょうだい!!」

お父さんに、お母さん!?

何と、皆がその手で私の身体を受け止めていたのだ。私が、おちない様に。

「みつ、皆・・・？」

“アナタは、一人じゃない。”

人とは不思議なものである。簡単に、孤独になれてしまうと、そう思うだろう。だけど、本当の意味で孤独になるのは、どうにも無理じゃないのか。

縁というものは、そう簡単に切れるものではないのだ。しごとく、しつこく、いつまでもアナタにへばりついて離れない、そんなものなのだ。

人は、一人じゃない。必ず、いつもどこかで誰かが、アナタを想っている事だろう。

朝六時三十分。

びびびびッ、と目覚ましの音。

私はもう、とっくの昔に目を覚ましていた。



メガネもよし、私はゆつくりと立ち上がって部屋を出る。階段をギツ、ギツと音をたてながら降りて、居間を横切り台所へ。

用意されている朝食、そしてお皿の下に敷かれたメモ書き。何が書いてあるのかは、もう大体分かってるけど、一応、内容をとと。

“美空へ”

今日はたまたま私もお父さんも早く帰れるから、たまには一家でディナーにしましょう。丁度、美空ちゃんの誕生日だものね、今日は。学校から帰ったら準備をしておいてください。

母さん & 父さん”

あらら？ 珍しい事もあるもんだね。まっ、いいや忘れてなかったんだ、誕生日。私はすっかり忘れてた。

さて、朝食を手早く食べて、歯を磨いて、着替えまして……えっと、今は六時五十二分だとう！？ 今までの最短記録。

ちょっとくらいテレビ見ながらゴロゴロしていいよねー。

……。

……。

.....。

・・・うん？ うおっ、二度寝してた！！

ダメだね・・・どれだけ早く準備が終わっても、結局はこの時間になる。・・・七時三十分。よし、行こう学校へ。

いつもの通学路、久し振りの通学路を歩いて行く。

「・・・ねえ、黒くん・・・黒くんが私達の学校に転校して来た時の事、覚えてる？」

私は、自分の中にそっと話しかける。

“・・・ああ、覚えている。あの時は・・・そうだな、中学生に

なった美空を見つけるのにさほど苦労はしなかった。・・・お前が  
変わってなくて安心したのを覚えている。”

「えっ、そんな私変わってなかったの!？」

“ああ。・・・もともと、お前は俺に気付かなかった様だがな。”

「・・・仕方ないじゃん、だいぶ前の事だったし・・・それに黒  
くん、随分変わってたよ。」

“そうか？ まあ、創造者のお前が言うんだから変わってたんだ  
ろっな。”

「・・・自分の事となると案外分かんないのよね。」

少しずつ、学校へとむかう。何だか一步一步が今までより少し重  
たい様な気がした。

「黒くん・・・あっちの華夏は何か死んじゃってて、あっちの私  
が華夏を助けようとして世界を滅ぼしちゃったの。」

“そうか・・・。”

「私は分からないよ・・・もしもこっちでも華夏があなっちゃ  
ったら、同じ事をしてしまつかもしれないし、もしかしたら・・・」

“未来は一つじゃないさ。どうなるか分からないし、どうなるか  
知る事も出来やしない。だけど、もしあの未来に辿り着いても、お  
前には俺や、アイツらが居る時点で大丈夫だ。どんな困難でも乗り  
越えて行けるぞ。”

私は、ゆつくりと、だが強く頷いた。さて、そろそろあの地点だ。  
彼女らとの合流ポイントである。

案の定、彼女らは私を待っていた。そして、彼女らが私の姿を認  
めると、口々に挨拶の言葉が駆ける。

「美空アー、おはよう!!」

「おっす。」

「美空・・・おはよう。」

「はよっ、みいそあらあ。」

「おはよう。」

「うん、そうだね。私は案外、大丈夫かもしれない。」

美空がこの後どうなったのか・・・それは分からない。

もしかしたら黒美空が生まれてしまいかもしれないし、能力を使い世界すらも再生するかもしれない。魔族の者達の世界をまた作ってあげるかもしれないし、フツの大人として生きていくのかもしれない。

それでも、どんな事があるとも時は流れてゆく。どう過ごし、どう生き、またどう死に、どうなるのかは・・・全て本人しだいなのだ。

でも繰り返しになるけれど、忘れないで欲しい。

アナタは一人じゃない。



## 最終話 私達クエスト（後書き）

あとがき

「算裏くん、これはどうかと思うで？」

この一言が、私にトラウマを植え付けた。

さて、ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございます。これにて、スクールエンゲージ 私クエスト は完結です。本当にありがとうございます。

話は変わりますが、プロローグのあとがきの方でも触れている様に、このスクールエンゲージという作品、実は原案者が居ます。そう、冒頭でいきなり私の名を呼んだ、“ぬーちゃん 先生”です。彼女は、あるきっかけから知り合いとなった方なのですが、あれは去年の十月頃だったと思います。以下、思い出せる限り再現。

ぬーちゃん 様 “算裏くん、あんたケータイ小説書いてるんやて？”

算裏 「はい、まあ・・・ちょっと違いますが。」

ぬ “ならな、私が昔書いたんがあるんやけど、日の目を見せたくれんか？”

算 「ええ！？・・・僕なんかでいいんですか？」

ぬ “ええってええって、途中までしか書いてへんから、好きにしいや。”

と、まあこういった会話だったと思います。こうしてスクールエングージがスタートしたのですが・・・いかんせん、彼女は私の書き方が気に入らなかつた様でして、結構頻繁に、冒頭の方の様なダメ出し電話を頂きました。

実は、黒美空のくだりは、私が考えた部分でありまして、一応ぬーちゃん 先生にも相談したのですが、彼女の一言、“好きにしいや。” が返ってくるだけ。すいませんでした、結構好き放題やっちゃって!!

最後に、ぬーちゃん 先生、そしてその友達のブロス先生、読者の方、本当にありがとうございます。これからも頑張りますので、よろしく願います。

算裏 友城



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7206i/>

---

スクールエンゲージ

2010年10月9日01時29分発行